

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第121集

東大阪市

岩 田 遺 跡

近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004年12月

財団法人 大阪府文化財センター



古代遺構面全景（西から）



18井戸出土遺物

序 文

岩田遺跡は昭和40年代後半、学校の建設工事に伴う調査で発見された遺跡である。周辺には西岩田・瓜生堂などの遺跡が存在し、『延喜式』にみる式内社で知られる石田神社も西にあり、古くから遺跡・史跡のある場所として知られた地域である。周辺の宅地化に伴って遺構分布の確認が進み、徐々に遺跡の範囲も広がってきた。

今回の調査地は、岩田遺跡の南端にあたり、瓜生堂遺跡の北東端と接する地域であった。

調査の結果、従来知られていた、古墳時代から中世の遺構・遺物を検出した。なかでも古代の集落をまとめて検出したことが大きな成果と言える。瓜生堂遺跡北東部に広がる古代集落域に連続して、集落が営まれていたことが判明したのは、古代における周辺の遺跡の展開を考える上で興味深い。

これらの発掘調査および整理事業の実施にあたっては、近畿日本鉄道株式会社、大阪府教育委員会などの関係各位のご協力・ご支援を受け感謝する。今後も当センターの事業にご指導・ご協力を賜れば幸いである。

2004年12月

財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、大阪府東大阪市岩田町4丁目地内に所在する岩田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化事業に伴い近畿日本鉄道株式会社から平成15年10月1日～平成16年12月28日の間委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は（その1）（その2）に分けて行った。（その1）が平成15年10月15日～平成16年3月25日、（その2）が平成16年5月21日～平成16年6月30日まで実施し、整理事業は平成16年12月28日まで行った。また、平成15年11月26日～平成16年2月27日の期間行った確認調査についても、本書に掲載した。
3. 調査は以下の体制で実施した。

〔平成15年度〕

調査部長	玉井 功	中部調査事務所所長	小野久隆
調査第二係長	金光正裕	専門調査員	宮田佳代

〔平成16年度〕

調査部長	玉井 功	中部調査事務所所長	小野久隆
調査第二係長	金光正裕	技師	川瀬貴子
4. 遺物の撮影は中部調査事務所主査片山彰一が、木製品・金属製品ほかの保存処理と有機遺物の同定については同主査山口誠治が行った。その他に本間元樹、亀井聡、信田真美世など当センター職員の協力を得た。また、発掘調査および整理作業には、以下の方ほかの参加、協力を得た(五十音順)。青山由美子、川崎理恵、高田泰子、那須三枝子、平田淑子、藤井文子
5. 自然科学分析などは下記に依頼した。

〔花粉・珪藻・植物珪酸体分析〕パリノ・サーヴェイ株式会社

その報告は別途掲載する。
6. 報告書の執筆は、金光・川瀬があたり、執筆分担は目次に記した。編集は川瀬があたった。
7. 本調査に関わる写真・実測図などの資料は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 実測図の基準高は東京湾平均海面（T.P.）を使用する。
2. 座標の単位はすべてmである。座標は世界測地系である。方位は座標北である。
3. 調査や遺物整理は当センターの「遺跡調査基本マニュアル」（2003年版）に準拠して行った。
4. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1999年版農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
5. 遺構番号は基本的には調査時のものを使用した。
6. 各項冒頭の遺構面全体図が1/2500、遺構実測図については調査区平面図が1/200・1/250、遺構平・断面図が1/10・1/20・1/50等を使用する。その他も各図にスケールを用いて表記してある。
7. 遺構番号は通しのアラビア数字の後に遺構の種類を示す名称が続く。（例）1溝、2井戸
8. 遺物番号は03年度調査区出土遺物が頭に1を、04年度調査区遺物が頭に2を、03年度確認調査区遺物が頭に3をつける、各々4桁の番号とした。
遺物の縮尺は土器展開図が1/4、同断面・拓本のみのもものが1/3、木製品が1/2・1/3・1/8、金属製品が1/2、丸・平瓦が1/4となっている。縮尺は各挿図にスケールで示した。

目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例・目次

第1章 位置と環境	(川瀬)	1
第2章 調査に至る経過	(金光)	3
第3章 調査の方法	(川瀬)	5
第4章 調査成果		
第1節 2003年度の調査	(金光)	7
(1) 基本層序		7
(2) 遺構と遺物		10
1) 中世以前		10
①遺構		10
②遺物		12
2) 中世以降		12
①遺構		12
②遺物		16
第2節 2004年度の調査	(川瀬)	17
(1) 基本層序		17
(2) 遺構と遺物		19
1) 古墳時代		19
①遺構		19
②遺物		19
2) 古代		20
①遺構		20
②遺物		33
3) 中世以降		45
①遺構		45
②遺物		46
(3) 小結		46
第3節 2003年度の確認調査	(金光)	48
(1) はじめに		48
(2) 03-1-1区		49
1) 基本層序		49
2) 遺構		49
(3) 03-1-2区		51

(4) 03-1-3区	54
(5) 小結	57
第5章 有機質遺物・遺存体の同定	(川瀬) 58
第6章 まとめ	(川瀬) 60

写真図版

- 遺構
- 遺物
- 報告書抄録
- 奥付

挿 図 目 次

図1 岩田遺跡位置図および周辺の遺跡 (S = 1/40000)	1
図2 調査区位置図 (S = 1/2500)	3
図3 調査区配置図 (S = 1/2500)	6
図4 03-1-2・3区 基本層序断面図	8
図5 第5面平面図 (S = 1/250)	10
図6 第5面遺構断面図 (S = 1/20)	11
図7 第4・3面平面図 (S = 1/250)	13
図8 第3面8・9溝断面図 (S = 1/40)	14
図9 第3面島島断面図 (S = 1/80)	14
図10 出土遺物実測図 (S = 1/4)	15
図11 第1面畦畔断面図 (S = 1/40) および平面図 (S = 1/100)	15
図12 第1面畦畔出土遺物実測図 (S = 1/4)	16
図13 04-1-1区 基本層序断面図 (S = 1/80)	18
図14 古代遺構面全体図 (S = 1/2500)	20
図15 古代遺構面(第5～2面)平面図 (S = 1/200)	21
図16 第5面畦畔・溝断面図 (S = 1/20)	22
図17 第4面遺構断面図 (S = 1/20)	23
図18 第3面遺構断面図 (S = 1/20)	24
図19 69土坑平・断面図 (S = 1/20)	25
図20 大形土坑平・断面図 (S = 1/20)	26
図21 第2面遺構断面図 (S = 1/20)	27
図22 18井戸平・立面図 (S = 1/20)	28
図23 18井戸平・断面図 (S = 1/20)	29
図24 97井戸平・立・断面図 (S = 1/20)	32
図25 第5～2面包含層他出土遺物実測図-1 (S = 1/3)	33

図26	第5～2面包含層他出土遺物実測図-2 (S = 1/4)	33
図27	第5～2面遺構出土遺物実測図 (S = 1/4・1/3)	35
図28	18井戸出土土器実測図 (S = 1/4)	37
図29	18井戸他出土製塩土器・金属製品・木製品実測図 (S = 1/3・1/2)	39
図30	18井戸枳板実測図-1 (S = 1/8)	41
図31	18井戸枳板実測図-2 (S = 1/8)	42
図32	中世遺構面全体図 (S = 1/2500)	45
図33	第1面平面図 (S = 1/200)	46
図34	中世以降遺構面出土遺物実測図 (S = 1/4)	47
図35	確認調査区位置図 (S = 1/5000)	48
図36	確認03-1-1区 北壁断面図 (S = 1/80)	50
図37	第9-2層上面平面図 (S = 1/50)	51
図38	第9-2層上面遺構断面図 (S = 1/40)	51
図39	確認03-1-2区 北壁断面図 (S = 1/80)	53
図40	確認03-1-3区 北壁断面図 (S = 1/80)	56
図41	ヒキガエル骨格図	59
図42	層序比較図-1 (99-10区～02-4区)	61
図43	層序比較図-2 (確認03-1-1区～03-1-3区)	62
図44	瓜生堂遺跡・岩田遺跡における古代遺構の分布 (S = 1/8000)	64

表 目 次

表1	18井戸枳板計測表	31
表2	04-1区出土動植物遺体同定表	59

写真図版目次

写真図版1	03-1-2・3区 遺構
写真図版2	03-1-3区 遺構
写真図版3	03-1-3区 遺構
写真図版4	03-1-2・3区 遺構
写真図版5	03-1-2区 遺構
写真図版6	04-1区 遺構
写真図版7	04-1区 遺構
写真図版8	04-1区 遺構
写真図版9	04-1区 遺構
写真図版10	04-1区 遺構
写真図版11	04-1区 遺構

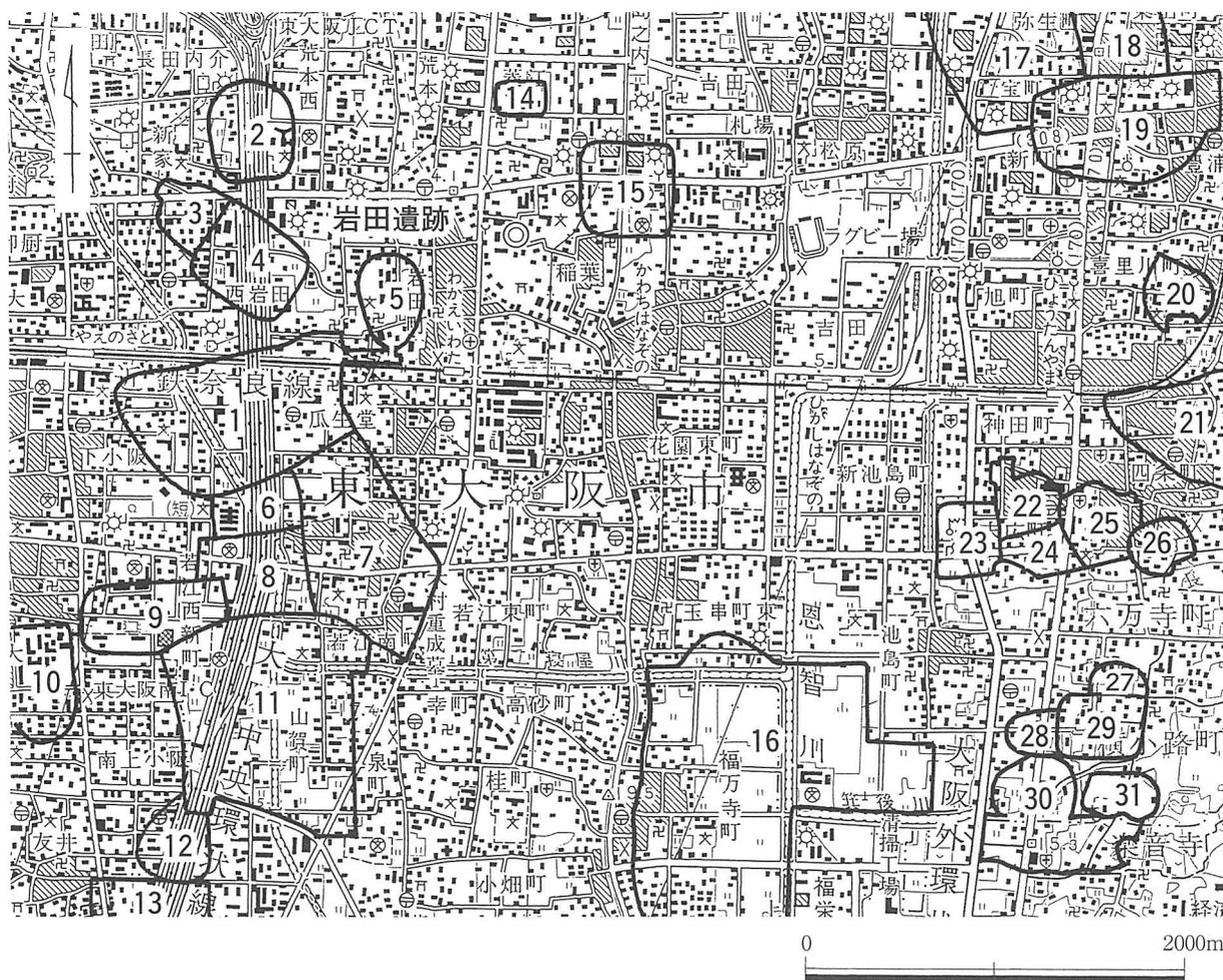
- 写真図版12 04-1区 遺構
- 写真図版13 確認03-1-1区 遺構
- 写真図版14 確認03-1-2・3区 遺構
- 写真図版15 03区・確認03区 遺物（土器）
- 写真図版16 04区 遺物（土器）
- 写真図版17 04区 遺物（土器）
- 写真図版18 04区 遺物（製塩土器・金属製品・石）
- 写真図版19 04区 遺物（木製品）
- 写真図版20 04区 遺物（木製品）
- 写真図版21 04区 遺物（木製品）

第1章 位置と環境

岩田遺跡は大阪府の東部、東大阪市に所在する遺跡である。東大阪市遺跡保護調査会によって、1973年石田神社の北東部で試掘調査が行われた。これによって、はじめて遺跡の存在が明らかになり、岩田遺跡と命名された。

岩田遺跡の試掘では、溝などの遺構、遺物は古墳時代後期の円筒埴輪、土師器・灰釉陶器・黒色土器・瓦器等が検出されていることから、主たる時期は古墳時代と平安時代後期である。石田神社境内付近に古墳があったという伝承などから調査者は埋没古墳の存在を示唆している。実際、南の巨摩廃寺遺跡では古墳が検出され、人物埴輪・水鳥形埴輪なども出土している。

岩田遺跡の周辺を見渡すと、北西部には意岐部遺跡や西岩田遺跡が、南西には瓜生堂遺跡や若江・若



- 1 瓜生堂遺跡 2 新家遺跡 3 意岐部遺跡 4 西岩田遺跡 5 岩田遺跡 6 巨摩廃寺遺跡 7 若江遺跡 8 若江北遺跡
- 9 上小坂遺跡 10 小若江遺跡 11 山賀遺跡 12 友井東遺跡 13 美園遺跡 14 菱江寺跡 15 稲葉遺跡
- 16 池島・福万寺遺跡 17 鬼虎川遺跡 18 西ノ辻遺跡 19 鬼塚遺跡 20 皿池遺跡 21 山畑古墳群 22 五合田遺跡
- 23 北鳥池遺跡 24 段上遺跡 25 縄手 26 上六万寺遺跡 27 北屋敷遺跡 28 西代遺跡 29 馬場川遺跡
- 30 楽音寺遺跡 31 西の口遺跡

図1 岩田遺跡位置図および周辺の遺跡 (S = 1/40000)

江北遺跡などが存在する（図1）。

意岐部遺跡からは古墳時代後期の遺物が出土する。岩田遺跡に最も近い西岩田遺跡では、古墳時代初期から後期の集落を検出している。

また、南西に位置する遺跡群は主に大阪中央環状線、近畿自動車道の建設に伴って検出されたものであり、複数の時代にまたがる複合遺跡だが、遺跡の主たる時期は弥生時代であり、弥生時代の各時期にわたって集落域、墓域、生産域などが存在することが広範囲な調査によって明らかになった。これによって、河内平野の様相がかなり解明され、生駒西麓地域など高地部に位置する遺跡群と対比して、瓜生堂遺跡群などとも呼ばれるが、東部とは異なった集団の存在が明らかになりつつある。

当センターでは、平成11（1999）年度から、近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化事業に伴う発掘調査を断続的に行っている。事業予定地内の西半部は弥生時代の大規模集落として知られる瓜生堂遺跡であり、平成11年度から平成14年度までの間に3次にわたって調査を実施した。おおよそ調査区の01-1区までが瓜生堂遺跡にあたる（図2参照）。これより東の地区は岩田遺跡として認識されるが、2001年度の瓜生堂遺跡調査の後、2002年度の3調査区で調査を実施した。2002年度の調査では中世の生産域が検出された。

岩田遺跡は当初、瓜生堂遺跡の北東部に位置する遺跡として認知されていた。しかし、南方の瓜生堂遺跡と接する部分（01-1区）で、中世の集落遺構が検出され、02年度調査区では生産域が検出されたため、中世の集落域の範囲を確定する目的で、若江岩田駅までの間で橋脚予定地3箇所の調査を2003・2004年度に行った。それが本書で報告している2003・2004年度調査にあたる（第4章第1・2節）。

また、若江岩田駅の更に東側、花園駅までの間3箇所も連続立体交差化事業地にあたるため、確認調査区を設けて、遺跡の範囲を確定することとなった。その結果は第4章第4節に記載してある。

確認調査では弥生時代前期相当層までの調査を行ったが、本調査では古墳時代から古代・中世相当層までの掘削にとどまり、主な遺構の検出時期は古代であった。そこで、周辺の遺跡で古代に関連する検出例をもう少し詳しくみていく。

瓜生堂遺跡のなかでも南にあたる地域では、最近の調査成果として8世紀後半から9世紀の掘立柱建物3棟や井戸、埋納土坑などが検出された（センター『瓜生堂遺跡2』）。井戸からは一括投棄されたと思われる土器が、埋納土坑内の甕底部からは5枚の銅銭が出土している。同遺跡西部では東大阪市第24・32次調査区で9世紀前半代の掘立柱建物5棟以上や井戸などが検出されている。

岩田遺跡に最も近い瓜生堂遺跡の調査としては、東大阪市第45次調査区で掘立柱建物2棟や井戸数基、土坑、溝など9～10世紀の遺構、遺物が検出されている。センター99-1区でもわずかに古代の遺構、遺物が検出された。

これらのことから、古代の集落は瓜生堂遺跡の中央部では8世紀を主とし、西部や北東部では9世紀以降となるなど、小規模に展開していた様子がうかがえる。

〈参考文献〉

東大阪市遺跡保護調査会 1975 「岩田遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』

（財）東大阪市文化財協会 1999 『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』

（財）大阪府文化財センター 2004 『瓜生堂遺跡1』

（財）大阪府文化財センター 2004 『瓜生堂遺跡2』

第2章 調査に至る経過

東大阪市は、交通の利便性や地理的条件などから、昭和40年代以降、隣接する大阪市と共に急速な発展を遂げてきた。その一方では、道路等公共投資の遅れなどから、住環境面で多くの問題が顕在化してきた。なかでも、近鉄奈良線沿線周辺では交通渋滞が慢性化していた。

今回調査の契機となった、近鉄奈良線連続立体交差化工事は、近鉄奈良線八戸ノ里駅から瓢箪山駅間における鉄道を高架化し、「交通渋滞等の弊害を解消し、周辺地域の新たなまちづくりに向けた都市交通の充実を図るため」¹⁾の都市計画都市高速鉄道事業である。事業区間は大阪中央環状線から大阪外環状線までの3.3kmで、平成4年度に事業認可を受けた。また、これより先の平成元年度には、同じく都市計画道路事業として大阪瓢箪山線の建設が事業認可を受けている。これら両事業と併せて、東大阪市では、若江岩田駅、花園駅、瓢箪山駅周辺地区の再開発事業を進捗させてきた。

平成2年度には、都市計画道路予定地内の西岩田2丁目地内において、大阪府教育委員会による試掘調査が行われた。この調査で、中世の溝や弥生時代前期包含層や中期の方形周溝墓が検出された事により、これまで周知されていた瓜生堂遺跡の範囲が近鉄奈良線を超えて北へ広がる事が明らかにされた。この結果を受けて、平成8年度からは、(財)東大阪市文化財協会による本格的な発掘調査が開始された。

この調査では、弥生時代以外にも、古墳時代の井戸や配石遺構、中世の水田や寺院の基壇と推定される遺構などが検出され、特に、岩田遺跡の南西部にあたる第45次調査区では、古代末から中世の井戸や区画溝など注目すべき遺構が数多く検出され、岩田遺跡の範囲がさらに広がり、中世を中心とする集落遺跡である事が明らかにされた。

平成11(1999)年度には、当センターが、大阪府八尾土木事務所の委託を受け、近鉄奈良線連続立体交差化事業に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査に着手した。

調査は、若江岩田駅までの工区のうち、線路高架の橋脚部分10箇所(図3 99-1区~10区)、総延長約420mの区間を対象として行われた。調査の進捗に伴って、99-1区で弥生時代中期から中世の遺構面が検出され、遺跡の範囲がさらに東に広がると予測された事、また、99-2区と3区の間にあった関西電力の鉄塔跡地にも、破壊を免れた箇所が存在する事が明らかになった事から、瓜生堂遺跡(その

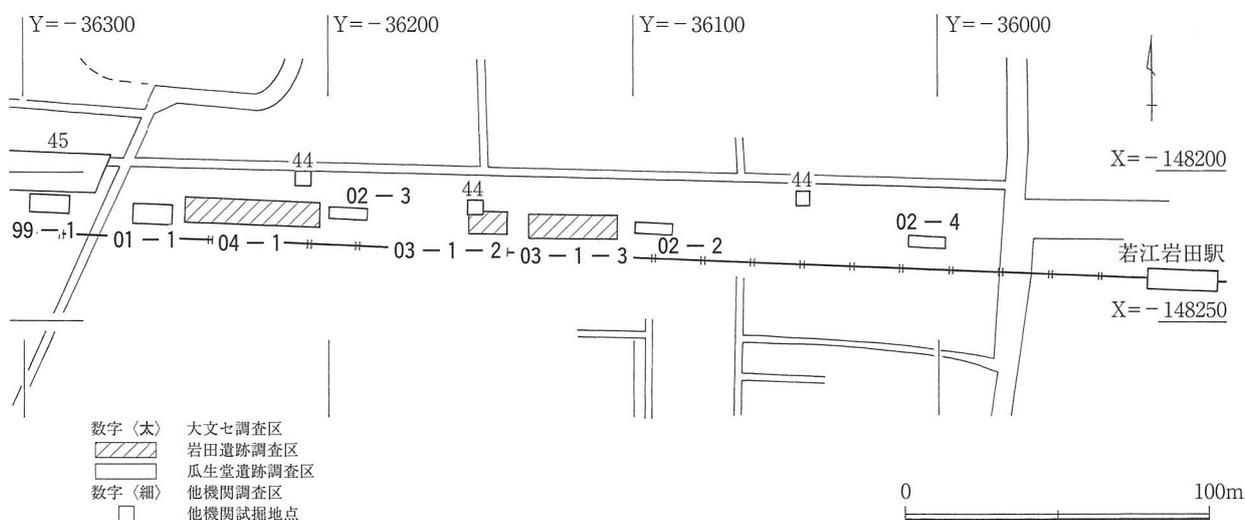


図2 調査区位置図 (S = 1/2500)

2) として、3箇所(01-1区~3区)の追加調査を行った。

その結果、01-2区と3区では弥生時代前期の水田や関連遺構が、01-1区では、弥生時代中期の溝や古墳時代初頭の水田、中世集落関係の遺構が検出された事から、01-1区から東の若江岩田駅までの間における遺跡の広がりや埋没深度を確認するための調査を行う事となった(02-2区~4区)。

調査は瓜生堂遺跡(その3)として実施され、弥生時代関連の遺構は検出されなかったものの、集落の東側には水田が展開し、岩田遺跡の範囲がさらに東南へも広がる事、古墳時代中期から後期と推定される厚い砂層が堆積する事、東端調査区02-4区には、弥生時代前期水田の可能性のある遺構面が存在する事などが確認された。

平成12年1月に開始された調査は、平成15年3月に現地調査を終え、整理事業の後、平成16年2月『瓜生堂遺跡1』の報告書を刊行し、全ての事業を終了した。

02-1区~3区の調査成果を受け、若江岩田駅までの間に未調査区として残っていた3箇所については、古墳時代中期から後期の砂層上面までを調査する事、また、02-4区で弥生時代前期遺構面が検出されていた事などから、第2工区の若江岩田駅から花園駅間において、3箇所の確認調査を行なう事となった。

センターは、平成15年9月30日、近畿日本鉄道株式会社と「近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化に伴う岩田遺跡他発掘調査」の委託契約を締結し、同年10月、岩田遺跡内東側2箇所(03-1-2区と3区)の調査に着手した。

平成15年12月岩田遺跡2箇所の調査を終了、引き続き、岩田遺跡隣接地確認(03-1-1区~3区)調査を開始し、平成16年2月に終了した。その後、岩田遺跡の残り1箇所(03-1-1区)に着手する予定であったが、本体工事関連の準備工事の遅れから、03-1区の調査を期間内に終了させる事が困難と判断された。

この部分については、平成16年度、岩田遺跡(その2)として改めて調査を行うことになり、平成16年5月から6月の間に調査を行った。

〈註〉

1) 東大阪市 「連続立体交差推進室」ホームページ 2001.09.04

〈参考文献〉

高橋 学 1991 「河内平野の地形環境分析Ⅰ」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要 1989年度調査区』(財)大阪文化財センター
別所秀高 1999 「瓜生堂遺跡第45次調査地点でみられた体積環境変遷過程と人間活動の履歴」『都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う大阪瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』 (財)東大阪市文化財協会

第3章 調査の方法

2003・2004年度調査区とも従来通り、線路高架の橋脚部分が調査区として設定されている。調査区の面積は東西幅が4～7m、長さ10～40mと小規模なものである。調査区の配置と名称は図3の通りである。

調査区名は当初2003年度に3調査区の調査を行う予定であったため、西から03-1-1～3区の名称を与えていた。が、03-1-1区の調査を2004年度に行うこととなったため、04-1-1区に名称変更し、03-1-2・3区はそのままこの名称を使用した。従って、03-1-1区は存在しない。また、03年度に岩田遺跡の隣接地で確認調査を行うこととなった。こちらの調査区名も03-1-1～3区であり、岩田遺跡調査区と紛らわしいため、確認03-1-1～3区という名称で表すこととする。

調査にあたっては、線路に近接していることと、本体工事でそのまま使用することから、機械掘削に先立って調査区の四周に綱矢板の打設を行った。それに続き、現地表から約0.7から1.0mの盛り土にあたる部分を、機械によって掘削した。機械掘削終了後は各調査区的设计深度に応じて、厚さ1.2～3.0mの人力掘削を行った。堆積状況を把握するためのアゼは、調査区幅が狭いこともあり、南側東西方向にのみ設け（南壁）、それ以外は必要に応じて設定することとした。

測量については、03年度に調査区北側の市道上に3級基準点を1点打設し、これをもとに調査区場内に4級基準点を設けた。これらの基準点をもとに、標定点測量を行い、数回のクレーン撮影と高所作業車による撮影を行った。

04年度は昨年度既設の3級基準点から、やはり場内に4級基準点を1点打設し、クレーン撮影1回と高所作業車撮影3回を行った。測量の基準は世界測地系によった。また、航空測量以外にも必要に応じてこれらの基準点をもとに平板などの測量作業を行った。

地区割りは当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に基づいた、国土座標系を使用しての地区割りを使用している。国土地理院の1万分の1地図を細かに区画して、IからIVに区画していく方法である。遺物の取り上げの際などにこの地区割りを使用した。ただし、本報告書の記述では、調査区的面積が小さいこともあり、調査区東、中央、西という形で記述し、直接的には地区割りの名称を使用していない。

遺構番号は現地調査の際に付与した番号をそのまま使用している。遺構番号の付け方は通しの数字番号の後に、遺構種類を表す名称（例えば溝など）がくる。

遺物番号は遺物取り上げ時に付けた登録番号とは別に、種類毎に貴重なものを取り出したときに番号を与えて図化などの作業を行い、更に本書に掲載順に通しの遺物番号を与えた。従って、本書に挿図、写真が掲載されている遺物は遺物番号が与えられているが、そうでないもの（例えば、第5章の有機遺物など）では登録番号や取り上げ番号のままで記述されているものもある。

分析委託は本書に掲載した有機遺物の同定以外に、土壌の植物珪酸体・花粉・珪藻分析を行ったが、時間的な関係もあり、本書に掲載できなかった。機会があれば、何らかの形で報告したい。

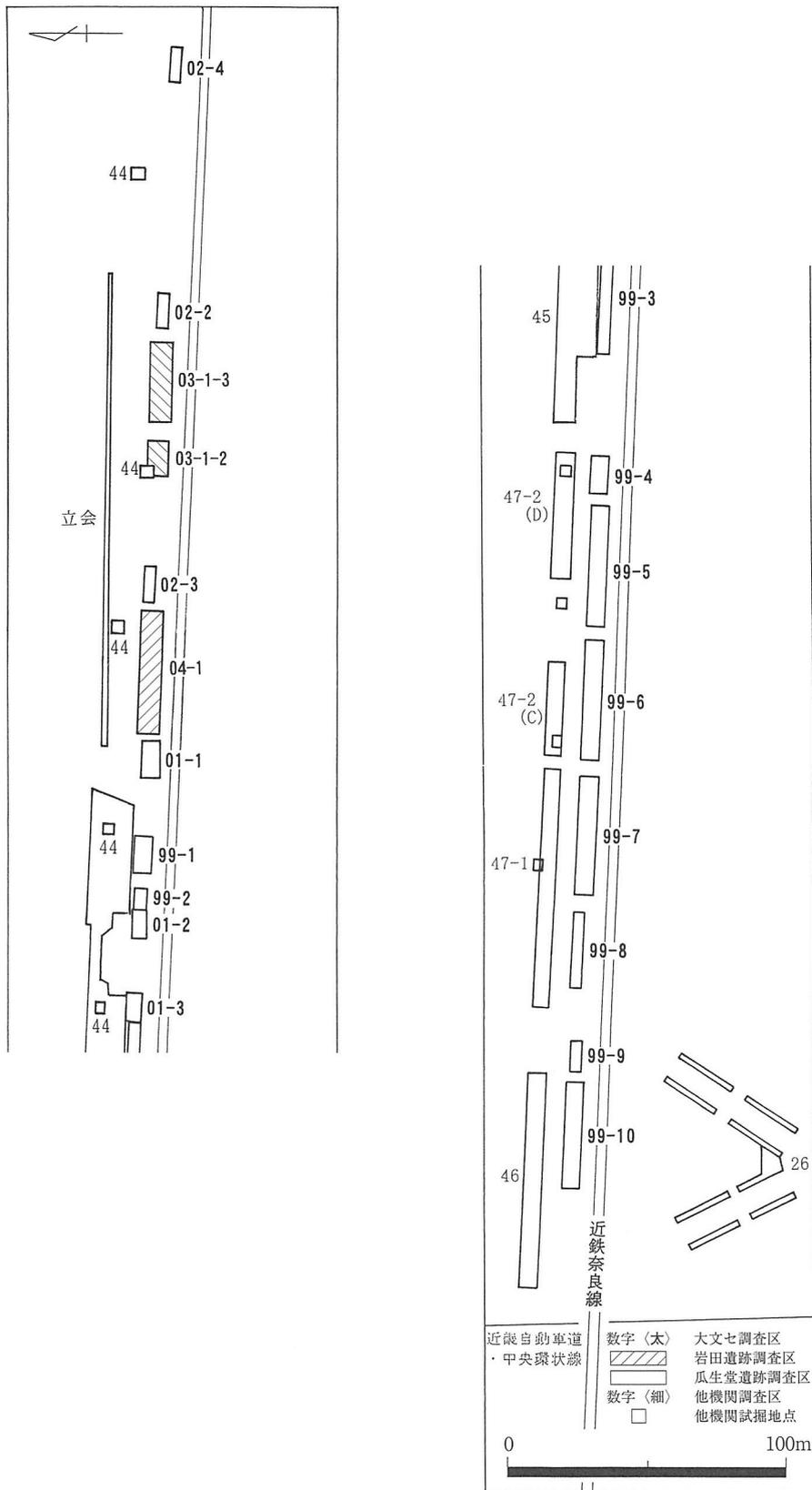


図3 調査区配置図 (S = 1/2500)

第4章 調査成果

第1節 2003年度の調査

2003年度は、2箇所の調査を行った。調査区名は、調査着手時に西側から付けた03-1-1区・2区・3区を最後まで踏襲した。03-1-1区は、平成16年度に岩田遺跡04-1-1区として調査を行った。調査区は、センター調査02-2区と02-3区の間、(財)東大阪市文化財協会第44次調査D地点の南側に位置する。調査の結果、T.P.2.0m～0.1mまでの間に大別6枚の遺構面を検出した。

(1) 基本層序 (図4)

当地域は、弥生時代末から古墳時代中期頃に陸化されたと推定される沖積平野三角州I b帯に地形分類され(高橋1991)、近年の調査では、「小阪合分流路」から分岐した「西岩田分流路」と「萱振分流路」に挟まれた後背湿地にあたる事が指摘されている(別所1999)。両調査区は、約7mの距離で近接しているため、層の連続性の把握に努めたが、後背湿地特有の複雑な堆積状況を示し、細分された層においては、必ずしも同一層準として把握できなかった部分もある。

第1層 03-1-2区西半部にのみ堆積が認められる。細粒砂～中粒砂を含む暗青灰色粘土の作土層である。平均層厚10cm前後。近世陶磁器を含む少量の遺物が出土した。

第2層 極細粒砂～中粒砂を含む暗青灰色粘土の作土層で、砂粒の混入は少なく、粘性を帯びた比較的均質な層である。層厚10cm～15cm前後。近世陶磁器、瓦、土師器、瓦器の細片が出土した。

第3層 中粒砂～粗粒砂を含む暗オリーブ灰色砂質粘土の作土層で、第2面のベース層である。第2層との層界には、細粒砂～中粒砂のラミナの薄層が認められる個所もある。層厚10cm～20cm。03-1-2区では、砂粒の混入が少なく比較的均質な層で、2層に細分される。下層には径8cm前後の鉱物溶脱斑が見られる。03-1-3区では、粒砂・小礫を比較的多く含み、若干粘性を帯びる。土師器細片が少量出土しているが、時期を特定するまでには至らなかった。

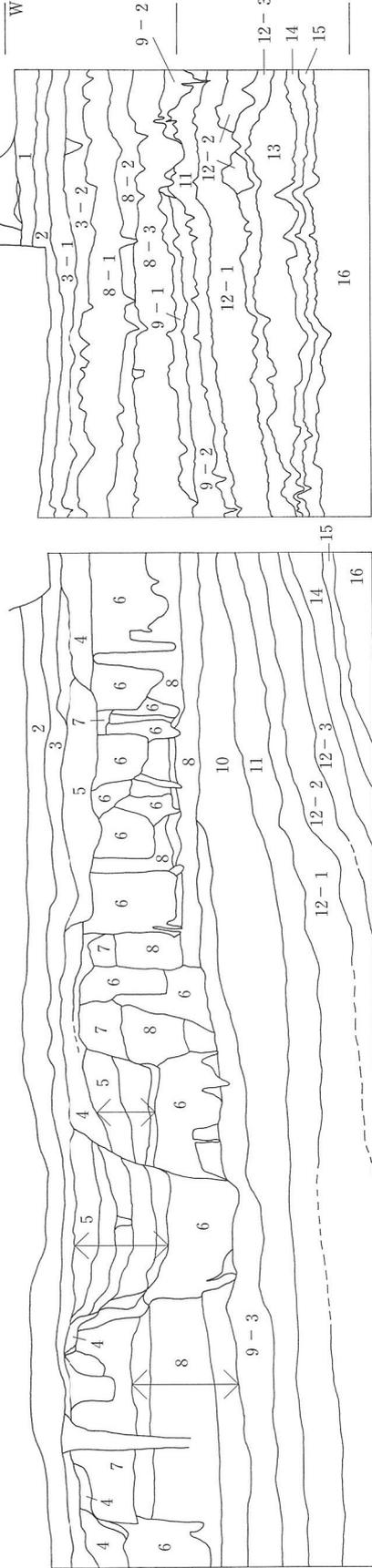
第4層 03-1-3区で検出された島島の作土層を一括する。細粒砂～中粒砂を多く含む暗青灰色砂質シルト層である。層厚5cm～15cm。層中に砂粒の薄層が認められ2層に細分される箇所もあるが、層の連続性に乏しい。須恵器・東播系こね鉢、瓦器、土師器、須恵器、瓦など比較的多くの遺物が出土しているが、いずれも細片で図化するまでには至らない。

第5層 03-1-3区で検出された島島間の作土層を一括する。細粒砂から小礫や第7層の粘土をブロック状に含む暗緑灰色粘土質シルト層で、粘性を帯びる。層厚は20cm～50cm。含まれる砂粒や粘土ブロックの大きさや量、粘性の違いによって4～6層の細分が可能である。土師器、須恵器、瓦器、陶磁器など、比較的多くの遺物が出土しているが、いずれも細片で図化するまでには至らない。

第6層 第4層と第5層を除去して検出された土坑内埋土を一括する。第7層の砂と第8層の粘土のブロックからなる。この土坑は03-1-3区の大半を占める。土坑の掘削によって、第8層が寸断され、連続した層の把握が困難となる個所もあった。

第7層 第8層を覆う洪水砂層である。第3面島島は、この洪水を契機として出現したと考えられる。水平方向のラミナが顕著なシルト～粗粒砂からなる。粒径は東側に向かう程大きくなる傾向が窺え、層厚も厚く残存する。03-1-2区では、これに相当する砂層の堆積は認められなかった。西側へは第3

T.P.2.0m
E



T.P.1.0m

T.P.0.0m

(スケールは縦が1/40、横が1/200)

(03-1-3区)

- 2 暗青灰
 - 3 暗青灰
 - 4 暗青灰
 - 5 暗青灰
 - 6 8層の粘土ブロック(径10.0~20.0cm)と7層の砂粒の攪拌土 非常に大きな粘土ブロックも有る
 - 7 洪水砂層(クロスラミナ) 東に向かう程粒径が大きくなる
 - 8 暗緑灰
 - 9-3 暗緑灰
 - 10 暗オリーブ灰
 - 11 暗青灰
 - 12-1 暗緑灰
 - 12-2 暗緑灰
 - 12-3 暗緑灰
 - 14 灰
 - 15 黒
 - 16 暗青灰
- 5BG3/1 粘土 極細砂を含み、粘性強い、黒色有機質物の薄層を含む
 - 10BG4/1 粘土 小礫・粗砂を比較的多く含む、粘性強い
 - 10BG4/1 砂質シルト 極細砂・細砂を多く含む
 - 10G4/1 粘土質シルト 粗砂・中粒砂と8層の粘土ブロック(径0.5~1.0cm)を多く含む
 - 8層の粘土ブロック(径10.0~20.0cm)と7層の砂粒の攪拌土 非常に大きな粘土ブロックも有る
 - 洪水砂層(クロスラミナ) 東に向かう程粒径が大きくなる
 - 10GY3/1 シルト質粘土 西半部では鉄分の沈着が顕著 東半部では中粒砂・細砂の薄層を挟む
 - 10GY3/1 粘土質シルト ラミナ不明瞭
 - 5GY4/1 シルト質粘土 径0.5~0.2cmの砂粒をやや含む
 - 10BG3/1 シルト質粘土 下方に中粒砂をやや多く含む
 - 10GY3/1 粘土質シルト 黒色有機質物の薄層と極細砂・シルトの薄層を挟む
 - 10GY3/1 粘土質シルト
 - 10GY3/1 粘土質シルト 未分解の植物遺体を含む
 - 10Y4/1 シルト質粘土 青灰色粘土のブロックを含む
 - 5Y2/1 極細砂・青灰色粘土のブロックをやや多く含む
 - 10BG4/1 土壌化層で、未分解の植物遺体をやや多く含む
 - 粘土

(03-1-2区)

- 1 暗青灰
 - 2 暗青灰
 - 3-1 暗オリーブ灰
 - 3-2 暗オリーブ灰
 - 8-1 暗オリーブ灰
 - 8-2 暗緑灰
 - 8-3 暗青灰
 - 9-1 緑灰
 - 9-2 緑灰
 - 11 暗青灰
 - 12-1 暗緑灰
 - 12-2 暗緑灰
 - 12-3 暗緑灰
 - 13 洪水砂
 - 14 黒
 - 15 黒
 - 16 暗青灰
- 5BG3/1 粘土 比較的均質な粘土層 細砂・中粒砂を極少量含む
 - 10BG3/1 粘土 径0.3~0.5cmの砂粒を少量含む
 - 2.5GY3/1 粘土 径0.3~0.5cmの砂粒を含む 粘性強い
 - 5GY4/1 砂質シルト 径0.2~0.5cmの砂粒を多く含む 径0.8~1.0cmの粗砂の鉄分沈着斑が見られる 若干粘性を帯びる
 - 2.5GY3/1 粘土 全体に均質な粘土層で、粘性、しまり有り 径2.0~6.0cmのシルトブロックを少量含む
 - 7.5GY4/1 粘土 全体に均質な粘土層で砂粒をほとんど含まない 粘性しまり有り
 - 5BG3/1 シルト質粘土 径0.1~0.2cmの砂粒を極少量含む 層下部には、植物の痕跡 鉄分沈着が著しい
 - 7.5GY6/1 シルト質粘土 細砂を含む
 - 7.5GY6/1 シルト・極細砂 ラミナ顕著
 - 10BG3/1 粘土
 - 10GY3/1 粘土 黒色有機質物の薄層を多数挟む
 - 調査区西側に堆積する細砂・中粒砂の洪水砂
 - シルト質粘土で、13層との層界にオリーブ黒 5GY2/1シルト質粘土の薄層を挟む
 - 洪水砂 細砂・粗砂(ラミナ顕著)
 - 2.5GY2/1 粘土質シルト ラミナは不明瞭 穏やかな止水堆積層
 - 5Y2/1 シルト質粘土 極細砂・径0.3~0.5cmの暗青灰色粘土ブロックを混入する
 - 10BG3/1 粘土

図4 03-1-2・3区 基本層序断面図

層下部か第8層上部へ収斂するか、若しくは攪拌されて本来の層が失われているものと考えられる。

第8層 03-1-2区と3区に堆積する厚い暗緑灰色粘土層で、強い粘性を帯びる。層厚50cm~70cmで、東に向かって層厚を増す。層中位から下部にかけて鉄分の沈着が顕著である。03-1-2区では3層に細分が可能で、層下部には砂粒が少量含まれ、植物の根などの生痕が認められる。03-1-3区でも2層ないし3層の細分が可能である。東半部には、細粒砂・極細粒砂のラミナの薄層を複数挟在するが、シルトから粘土へと側方変化し、層界が不明瞭となる。また、西半部では、地震の影響による地層の変形構造が観察され、上部には炭酸カルシウムの結核が形成される。土師器、5世紀から6世紀の須恵器杯身・杯蓋の細片が少量出土しているが、図化するまでには至らない。

第9層 第5面流路内堆積物と03-1-2区第5面を覆う洪水砂層を一括する。03-1-3区流路内堆積物は、極細粒砂や有機質の薄層を挟在する暗青灰色粘土質シルト層で、ラミナは不明瞭なのに対して、03-1-2区の流路にはラミナが顕著なシルト~細粒砂が堆積し、層上部には、細粒砂を含み、弱い土壌化が観察される。さらに03-1-2区の西側には、ラミナが顕著な極細粒砂~中粒砂からなる洪水砂の堆積が認められる。砂層は西端で層厚20cm、東端付近で層厚5cm。

第10層 暗オリーブ灰色シルト質粘土層。細粒砂・中粒砂を少量含む。層厚は東端で10cm、西端で30cmである。03-1-2区ではこれに対応する層を把握する事ができなかった。遺物が出土しなかったため、時期を特定する事はできなかった。

第11層 細粒砂・中粒砂を少量含む暗緑灰色シルト質粘土層である。層上面は、03-1-2区の西端でT.P.1.0m前後、03-1-3区の東端でT.P.0.3mで、東に向かって下降する。遺物が出土しなかったため、時期を特定する事はできなかった。

第12層 暗緑灰色粘土質シルト層で、両地区ともに細分が可能であるが、細分された各層の層準は必ずしも一致しない。層上部には植物遺体の薄層や極細砂・シルトの薄層を多数挟在する。全体に東に向かって下降し、03-1-3区の途中からは掘削限界より深くなる。03-1-2区の西端には西に向かって層厚を増す細粒砂~粗粒砂の洪水砂層が堆積する。遺物が出土せず、時期を特定する事はできなかった。

第13層 03-1-2区に堆積する、ラミナが顕著な細粒砂~粗粒砂の洪水砂層である。西端で最大層厚30cm、東に向かって粒径が細粒砂からシルトへ変化し、層厚も10cmと薄くなる。03-1-3区での層準は確認できない。

第14層 未分解の植物遺体の薄層を挟在する灰色シルト質粘土層で、ラミナはさほど明瞭ではない。03-1-2区では第15層上面を比較的均質な厚みで覆い、03-1-3区では層厚を増しながら、東に向かって下降する。03-1-2区で層厚10cm前後。03-1-3区で層厚15cm~20cm。遺物が出土しなかったため、時期を特定する事はできなかった。

第15層 黒色シルト質粘土層。層厚約10cm前後。暗青灰色粘土のブロック（径0.3cm~0.5cm）や極細粒砂をわずかながら含む土壌化層。全体に東に向かって下降し、03-1-3区で掘削限界に達する。03-1-3区東端付近に設定した小ピットにおいて、層上面の埋没深度がT.P.-0.5mにある事を確認した。遺物が出土しなかったため、時期を特定する事はできなかった。

第16層 暗青灰色粘土層。第15層との層界付近には、未分解の植物遺体が多数挟在されている。03-1-3区東のピットでは、第15層下にシルト~細粒砂層の堆積が認められるが、暗青灰色粘土層と同一層かは不明である。

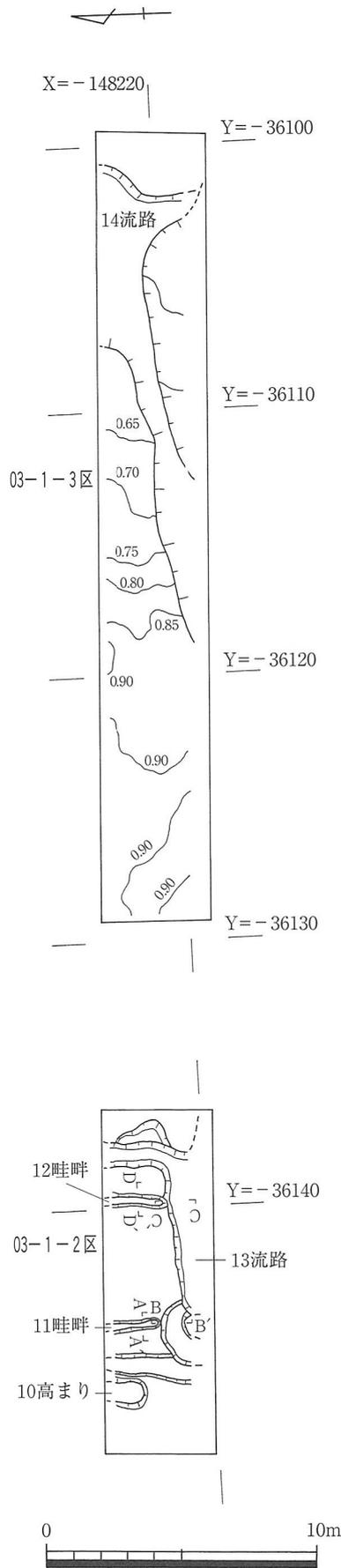


図5 第5面平面図 (S = 1/250)

(2) 遺構と遺物

大別6枚の遺構面が検出されたが、遺構に伴う遺物が少なく時期を特定する事ができたのは、第1面と第4面のみである。その他の面については、上下の包含層出土遺物と既往の調査成果を参考にした。

1) 中世以前

① 遺構

a. 第6面

第14層の灰色シルト質粘土層で覆われた、第15層上面が第6面である。03-1-2・3区西端から8m付近までは、T.P.0.3m前後でほぼ水平な面であるが、それから東に向かって徐々に下降する。3区東端に設定したピットにおいて、埋没深度を確認した結果、上面はT.P.-0.4mにあり、その下層にはシルト～細粒砂層が堆積する事が確認できた。

東西方向の断面において、畦畔状の僅かな高まりが複数個所で確認された事、細粒砂や青灰色粘土のブロックを含み黒色を呈する事から、水田の可能性が予想された。畦畔に注意しながら面の検出を行ったが、畦畔は検出されず、若干の凹凸が認められただけであった。また、第15層を除去した面においても遺構は全く検出されなかった。第15層下部および第16層との層界付近に、未分解の植物遺体が多数挟在される事から、湿地状の堆積環境下で形成されたものと推測される。

出土遺物が得られなかった事から、03-1-3区の東に位置する02-2区の調査成果を参考に、帰属する時期について検討する(図42)。

02-2区では、T.P.0.3m～0.4m付近に弥生時代後期と推定される植物遺体を含むオリーブ灰色シルト層が、T.P.0.1m～0.2m付近には、瓜生堂遺跡の調査で弥生時代中期と後期を分ける鍵層として認識された層厚10cm前後の黒色粘土～シルトの弥生時代中期包含層が堆積する。その下層には、T.P.0m～-0.4m付近に灰色砂混じりシルト層と灰色極細粒砂層が堆積する事が確認されている。

近接した距離で大きな地形変化を考え難い事からすれば、第15層は、弥生時代後期もしくは弥生時代中期包含層の層準に相当させるのが妥当と考えられる。

b. 第5面 (図5・6、写真図版1)

第5面は、03-1-2区では第11層を、03-1-3区では第10層

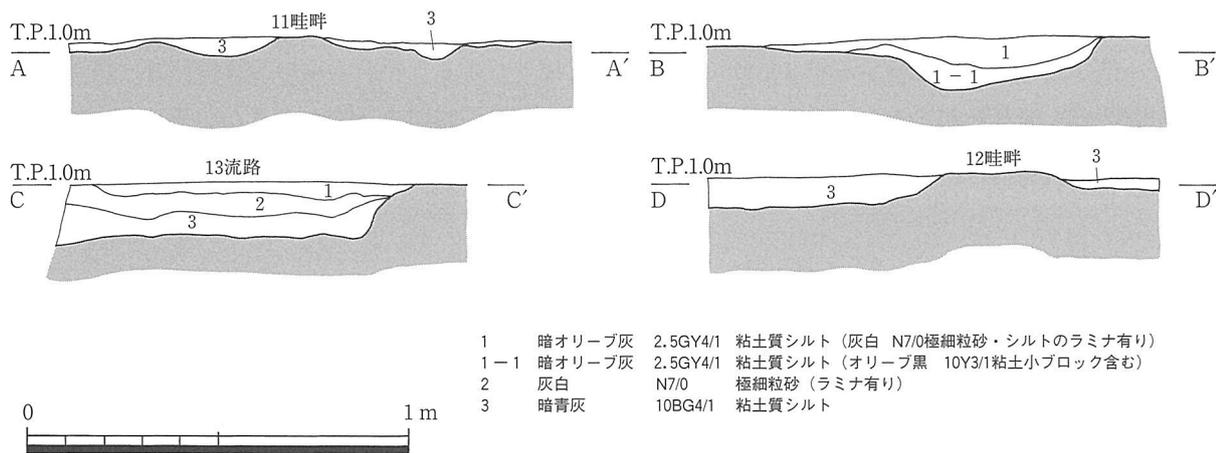


図6 第5面遺構断面図 (S = 1/20)

をベースとする。03-1-2区はT.P.1.0m~1.1m前後の平坦な面であるが、03-1-3区はT.P.0.9m~0.6mで、東に向かって下降する面である。03-1-2区では流路北肩部の他に南北方向の畦畔や高まりを、03-1-3区では流路の北肩部を検出した。

03-1-2区の面は、シルト~粗粒砂の洪水砂層が覆う。検出された2本の畦畔は、約4.8mの距離を隔ててほぼ平行する。

〔11・12畦畔、10高まり〕 11畦畔は高さ6cm、幅0.2m~0.4m、12畦畔は高さ5cm、幅0.6m~0.8mが残存する。両畦畔とも残りが悪く、盛土は確認できなかった。11畦畔の南側には、幅0.6m~0.7m、深さ10cm前後で水口状に途切れる個所があり、シルト~極細粒砂が堆積する。

また11畦畔の西側には、0.8m×1.1m、高さ6cmの10高まりが検出された。高まり部分にも盛土は認められない。高まりの南側もT.P.1.1mの平坦な面となっている。12畦畔の東側はさらに5cmほど低い面となる。畦畔間の平坦面からは、粗粒砂・細粒砂を埋土とする足跡や根株痕跡が数箇所検出された。調査範囲が狭く周辺の様子が不明であるが、平行する畦畔や高まりと面の状況から、水田が営まれていた可能性が高いと考えられる。

〔13流路〕 調査区の南端を、畦畔を侵食しながら東に流れ、01-1-3区の14流路に続くものと考えられる。12畦畔の東側で分岐して北に抜ける。幅0.9m、深さ0.1mである。いずれもシルト~細粒砂を埋土とする事から、本流から分岐した流れの緩やかな河川であったと推定される。

〔14流路〕 03-1-3区で検出される。調査区の南端を、南西から北東方向に抜ける。東端付近では、流路から分岐もしくは溢流したと推定される幅6m、深さ5cm前後の北東方向の痕跡が検出されている。

第5面でも、遺物が全く出土しなかったため、直接遺構面の時期を特定することはできなかった。

第6面上層の第14層から第5面ベースとなる第10・11層からも遺物は全く出土しなかった。全体には、シルト~極細粒砂のラミナの薄層を挟みながら東に向かって下降している事、03-1-2区の第12層中には、より西側に堆積の中心が求められる洪水砂層が堆積する事などから、第14層から第11層は、99-3区から01-1区の間に想定される流路の東側後背湿地に堆積した層と推定される。

03-1-2区の第11層上面の西端のレベルはT.P.1.0m前後にあり、西側02-3区のT.P.1.3m前後で検出された古墳時代後期の流路の肩部と近接した深度にあたる。また、03-1-3区東側の10層上面のレベルはT.P.0.5m前後で、02-2区の弥生時代後期から古墳時代の層順に相当する。これらの

事から、第14層から第11層を、弥生時代後期～古墳時代後期の間に形成された層として把握したい。

また、第5面の最上層に堆積する第8層からは、5世紀後半から6世紀前半頃の須恵器杯身・杯蓋や7世紀初頭頃の土師器杯が出土している。量は少ないものの、他の時期の遺物を含まない事から、第5面の時期は、古墳時代後期から飛鳥時代初頭頃の時期幅と考えられる。

②遺物（写真図版15）

出土遺物量が限られている上、いずれも細片で図化するまでにはいたらず、写真のみ掲載した。

1011は03-1-2区第8層下部から出土した5世紀後半の須恵器杯身である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は断面四角形に仕上げる。体部外面は回転ヘラ削りで、内面には黒色の有機質物が付着する。03-1-2区の第8層からは、口縁部内面に1段の放射状暗文を施す土師器杯の細片が出土している。

1012・1013は03-1-2区の第8層から出土した須恵器杯身である。いずれも口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。6世紀前半頃。

2) 中世以降

①遺構

第5面は第8層の厚い粘土層で覆われる。本層の堆積によって、03-1-3区の東端でT.P.1.3m、03-1-2区の西端でT.P.1.5mとなり、地表面は全体に約50cmから70cm前後上昇する。第8層はさらに東側の低地に流入した第7層洪水砂層によって覆われる。第7層の堆積は03-1-2区では認められず、収斂するか後世の耕作によって失われたと推定され、03-1-3区第3面島畠内にのみに残存する。第7層上面は03-1-2区の第8層上面とほぼ同じレベルのT.P.1.6m付近にあり、この洪水によって、地形は平坦化されたと推定される。

島畠内に取り残された第7層を除去した第8層上面からは、畦畔・溝等の遺構は全く検出されなかったが、T.P.1.3m～T.P.1.4mにある平坦な面で、水田が営まれていた可能性も考えられる。

a. 第4面（図7、写真図版2・3）

03-1-3区の島畠作土層の第4層と島畑間作土層の第5層を除去した面を第4面とした。第7層洪水砂上面から掘り込まれた土坑が多数検出された面である。03-1-2区からは、こうした土坑は全く検出されていない事から、第7層が03-1-2区で収斂するか到達しても薄い堆積であった事を示唆している。

各土坑は、相互に重複し、本来の形状を残すものは少ない。また、掘削時の規則性や計画性を復元する事は困難であった。その中では一辺1m前後の方形を呈するものと、幅0.5m前後の長方形を呈するものの2種類が窺えた。土坑の埋土には、第8層の粘土のブロックと第7層洪水砂を攪拌したものが大半を占めるが、島畠基盤層から検出されたものの中に、洪水砂を埋土とするものが見られる。粘土のブロックは、径30cmのものから一辺が1.0mに及ぶものまでである。

第3面島畠は、この洪水を契機として出現している事から、第4面で検出された土坑群は洪水後の（水田）復旧を目的として掘削されたものと考えられる。

土坑の中には、ほぼ完形に復元される瓦器椀や皿を出土するものがあった。

第4面

第3面

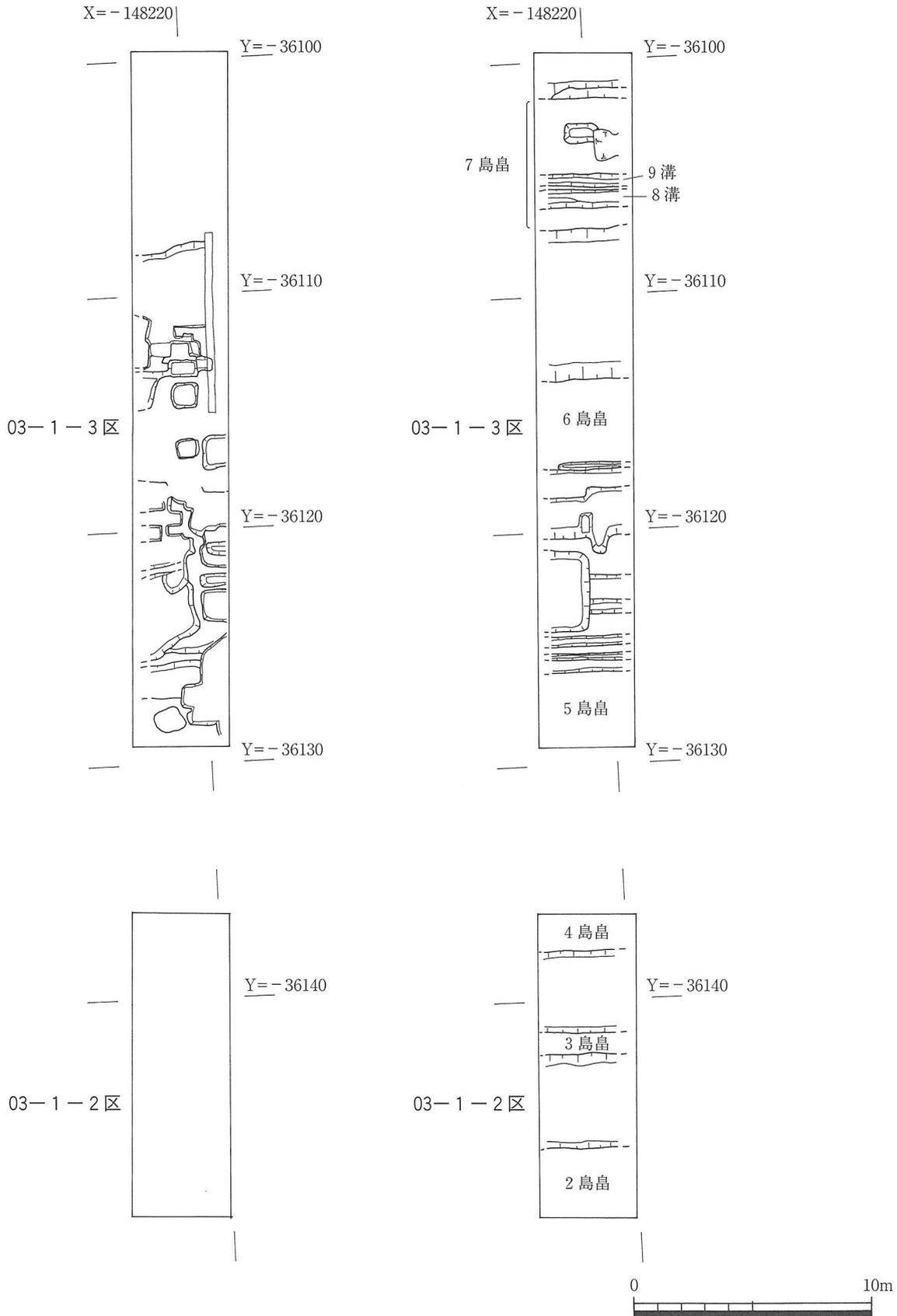


图7 第4·3面平面图 (S = 1/250)

b. 第3面 (図7～9、写真図版3・4)

第3層を除去した面である。南北方向の島畠が検出された。島畠上面は、T.P.1.7m～1.8mである。

03-1-2区で検出された島畠は、作土層および盛土部分が残っておらず、基底部分のみが検出された。

〔2～4島畠〕 2島畠は幅3.5m以上、検出高5cm、3島畠は幅1.7m～2.0m、検出高3cm、4島畠は幅1.2m以上、検出高3cmである。各島畠は西から3.4m、4.0m、3.5mと隔たっている。

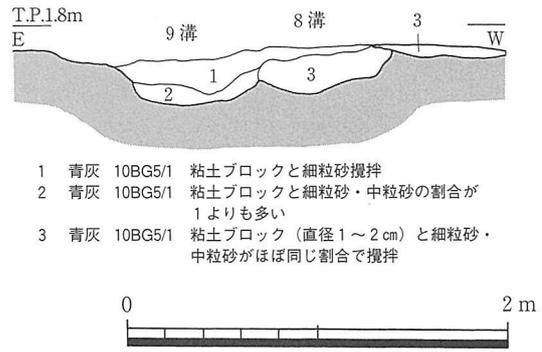


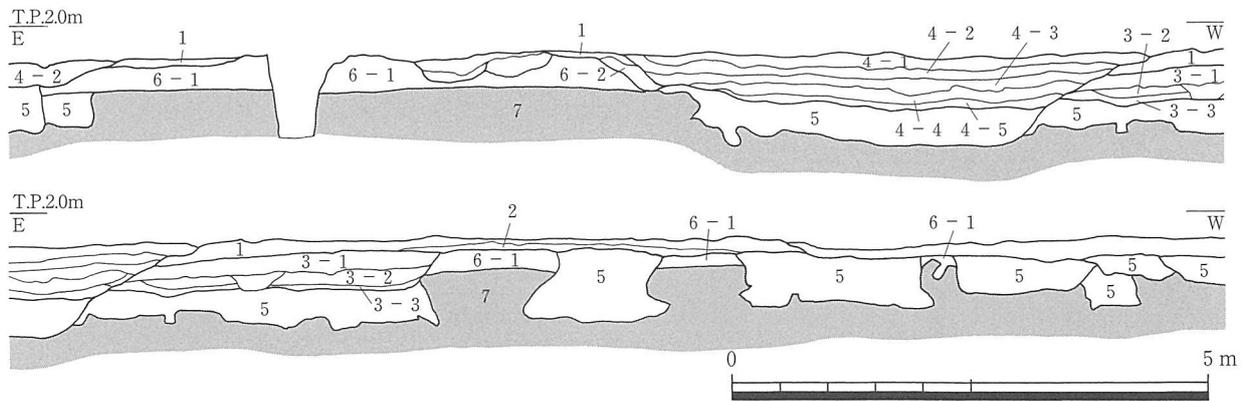
図8 第3面8・9溝断面図 (S = 1/40)

03-1-3区では、3基の島畠が検出された。いずれの島畠も田面からは5cm～6cm程度の高さしか残っておらず、後世の耕作によって削平を受けている。

〔5島畠〕 幅3.5m以上で、作土層下部に極細粒砂の薄層として残存する。島畠作土層は、層厚8cm～10cmで、中粒砂を主体とする砂質シルト層で若干粘性を強くおびる。作土層を除去すると、4m×1m以上、深さ0.4mの土坑が検出される。

〔6島畠〕 5島畠の東で検出された。幅6.0m～7.0mで、島畠の内部には厚さ10cm～20cmの洪水砂が堆積する。6島畠は東側に拡張されている事が断面で確認された (図9)。島畠基底部分で検出された一辺1m前後の土坑は、洪水砂を埋土とする。

〔7島畠〕 6島畠の東で検出された。幅3.5m以上。島畠の作土層は後世の耕作によって失われ、島畠肩部周辺にのみ残存する。島畠内部には第7層洪水砂が厚さ0.4mで堆積している。



- | | | | | |
|-----|-----------------------------|-------|--|-----------|
| 1 | 暗青灰 10BG4/1 | 砂質シルト | 下部には細粒砂・極細粒砂・中粒砂を含む | 粘性やや有り |
| 2 | 暗青灰 10BG4/1 | 砂質シルト | 中粒砂を多く含む | |
| 3-1 | 暗緑灰 10G3/1 | 砂質シルト | 暗青灰5BG4/1粘土ブロック (直径2～4cm) と中粒砂を多く含む | |
| 3-2 | 暗緑灰 10G3/1 | 砂質シルト | 層相は3-1とほぼ同じ、粘土ブロックが大きく、また、多い | |
| 3-3 | 暗緑灰 10G3/1 | 砂質シルト | 層相は3-1とほぼ同じ、粘土ブロック (直径0.5～3cm) が多い | 鉄分の沈着が著しい |
| 4-1 | 暗緑灰 10GY3/1 | 砂質シルト | 細粒砂を多く含み、中粒砂・粗粒砂・炭化物 (直径0.5～1cm) をごくわずかに含む | 粘性やや有り |
| 4-2 | 暗緑灰 10GY3/1 | 砂質シルト | 4-1より中粒砂・粗粒砂の割合が多く、4-1より粘性有り | |
| 4-3 | 暗緑灰 10GY3/1 | 砂質シルト | 4-2よりさらに中粒砂・粗粒砂を多く含み、直径3cmの粘土ブロック多く含む | 粘性有り |
| 4-4 | 暗緑灰 10GY3/1 | 砂質シルト | 直径5～10cmの粘土ブロック多く含み、4-3より粘性強い | |
| 4-5 | 暗緑灰 10GY3/1 | 砂質シルト | 直径5～10cmの粘土ブロック多く含み、中粒砂・粗粒砂を含む | |
| 5 | 細粒砂・粗粒砂と、暗青灰5BG4/1粘土ブロックを攪拌 | | 粘土ブロックは直径10～20cm大から直径5～10cm大と様々 | |
| 6-1 | シルト～中粒砂の洪水層 | | 粒径は東に向かうほど細くなる水平方向のラミナ | |
| 6-2 | 細粒砂の洪水層 | | ラミナ有り | |
| 7 | 暗青灰 5BG4/1 | 粘土 | 極細粒砂・細粒砂をごく少量含む | 粘性強い |

図9 第3面島畠断面図 (S = 1/80)

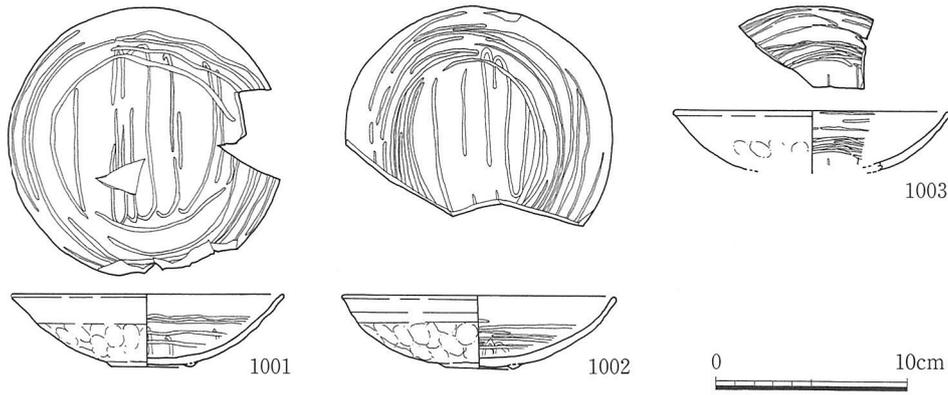


図10 出土遺物実測図 (S = 1/4)

〔8・9溝〕 島島上面からは、重複する南北方向の2条の溝が検出された。8溝は、幅35cm、深さ10cm。9溝は、幅40cm、深さ10cmをはかる。両溝とも青灰色粘土のブロックを含む細粒砂・中粒砂を埋土とする(図8)。

島島の間には幅6m～9mの田面が広がる。5島島と6島島の田面作土層上面からは、幅30cm～50cmの南北方向の小溝が数条検出された。作土層からは、土師器細片が数点出土している。6島島と7島島の田面作土層は5層に細分され、平均層厚5cm。下部ほど粘性が強く、粘土ブロックの混入も認められる。作土層からは、古墳時代須恵器・土師器・瓦器・陶磁器などの細片が比較的多く出土している。

c. 第2面

第3面以降は、平均層厚10cm～20cmの作土層が形成され重層的に堆積する。狭在されるシルト～細粒砂層の薄層を手掛かりとして細分されるが、砂層の連続性は悪い。

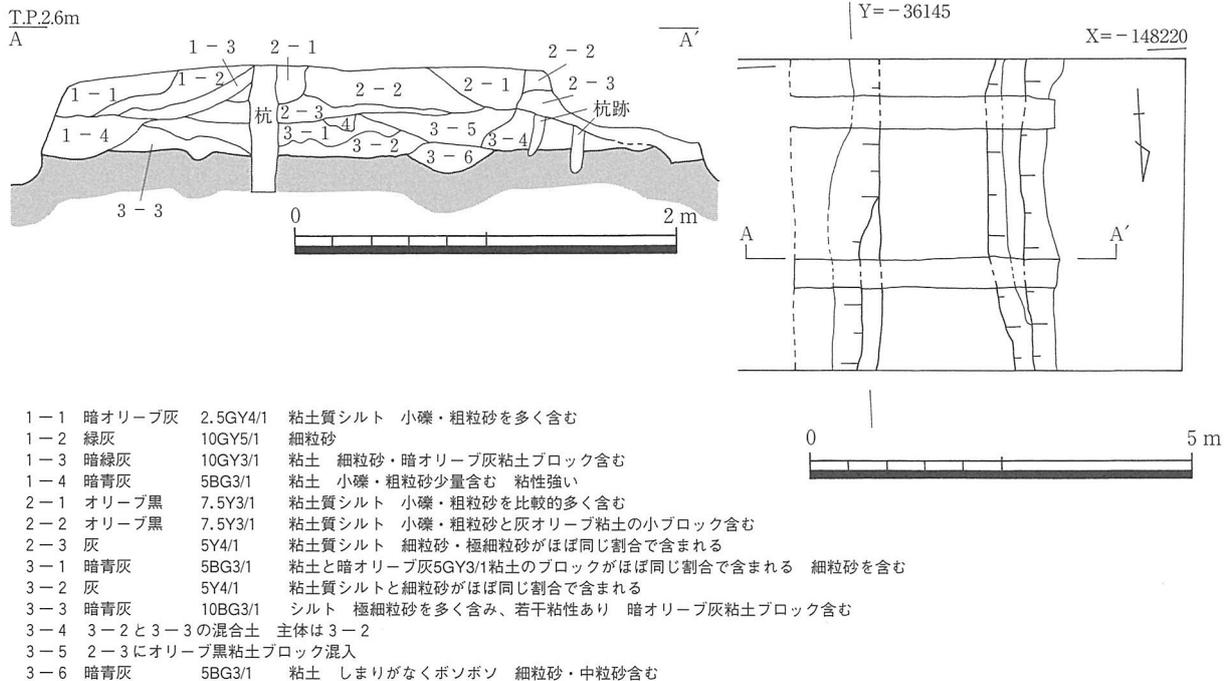


図11 第1面畦畔断面図 (S = 1/40) および平面図 (S = 1/100)

第2面は03-1-3区の第3層上面で、南北方向の溝が多数検出された面である。T.P.1.7m前後の、ほぼ平坦な面である。溝は幅26cmから30cmで、溝は相互に複雑に重複しているおり、この溝を平面的に把握することは困難であった。また、深さも数cmと浅い。

d. 第1面 (図11、写真図版4・5)

03-1-2区に堆積する第1層をベースとする面で、南北方向の畦畔が検出された。畦畔の東側の遺構面は現代の攪乱で失われており、西側約4mの範囲にのみ残存する。

〔1畦畔〕 基底部幅2.8m、残存高0.6m、上端幅2.5mの断面逆台形の形状である。東西の法面には崩壊防止のための杭が打ち込まれている。盛土は3層に大別される。1層は、粗砂・小礫と暗緑灰色の砂質シルトで、層中からは、近世陶磁器類が出土している。第2層は、オリーブ黒色粘土質シルトで、細砂・中砂や灰色粘土のブロックを混入する。13世紀から15世紀の土師器・瓦器や古墳時代後期須恵器の細片が多数出土している。第3層は、暗青灰色シルト質粘土で、極細砂や暗オリーブ灰色粘土のブロックを混入する。

②遺物 (図10・12、写真図版15)

第3面以上の作土層からは、古墳時代の須恵器・土師器から近世染付、瓦までが出土しているが、いずれも細片で、図化できるものは非常に少量で限られた。また比較的多く出土したのは、第1面畦畔盛土からで、全体の約8割を占める。その次には、第3面島島間の田面作土層からである。

1001~1003は、第4面土坑底部から出土した、13世紀の和泉型瓦器碗である。1001は、口径14.2cm、器高3.9cm。1002は、口径14.2cm、器高4.0cm。1003は、口径14.8cm。

1010 (写真図版15下左) は、第1面畦畔盛土中から出土した5世紀後半の須恵器甕口縁。図12は、第1面畦畔盛土から出土したものである。1004は土師器小皿、1005~1007は、13世紀から14世紀の瓦器皿と碗である。1008・1009の丸、平瓦は盛土2層中から出土した。この他にも瓦質鉢、須恵器質片口鉢、土師器皿、近世染付などが出土しており、畦畔築造時期は中世末~近世である。また、古代末~中世の遺物の量が比較的まとまっていることから、周辺に集落の存在が予測される。

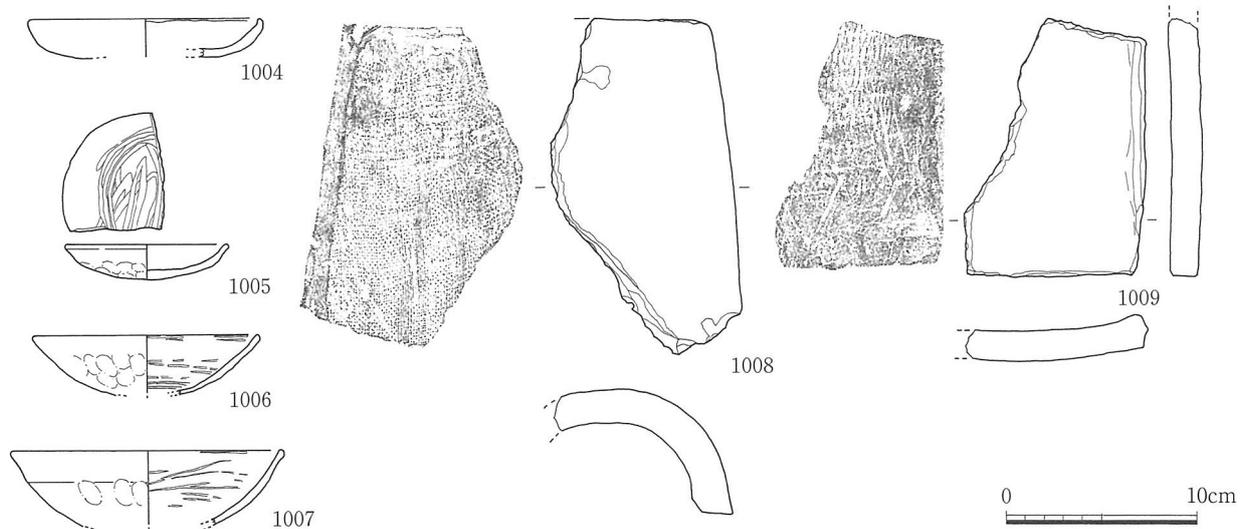


図12 第1面畦畔出土遺物実測図 (S = 1/4)

第2節 2004年度の調査

(1) 基本層序

2004年度の調査は1調査区(04-1-1区)に限られるため、該当区の南壁断面図を基本層序としてあげた(図13)。以下、これに基づいて説明する。

現地表面がT.P.3.0m強であり、ここから約0.7mを機械によって掘削し、それより深さ約1.2mを人力掘削したため、最低標高はT.P.1.0m強である。

第1層 T.P.2.4m前後。淡褐灰色～灰色極細粒砂じりシルト。層厚20cm程度。やや粗い砂礫を含み、調査区の中央付近では鉄分が沈着している。中央から西側に部分的に遺存するが、東側は攪乱により失われている。層全体に、瓦器・土師器などの中世土器および染付などの近世陶磁器片や瓦などを含む。攪拌を受けていることから、客土など二次的堆積による層と思われる。第1層が高まりのように残る面を第1遺構面とした。

第2層 第1層と第3層の間に部分的に狭在するオリーブ褐色シルト層である。

第3層 T.P.2.2m前後。灰黒色シルト～粘土層。層厚は10cm程度である。調査区の中央から西半に部分的にみられる層で、土質より耕土層と考えられる。第1層と同時期の遺物を含む。第1層が存在していないところは、この第2層の上面を機械掘削終了後の第1遺構面とした。

第4層 T.P.2.0～2.1m前後。第4層上面を第2遺構面とした。上層の攪拌土を除去したところ、西半では淡褐色～灰色極細粒砂じりシルトで、鉄分の沈着する層を検出した。断面からもこの層の上面からの井戸や土坑・柱穴を識別することができる。またこの層には、9世紀中頃から後半を主として、それ以降の時期の土器などの遺物を含む。

東半は様相が異なり、灰色シルトで土壌化が進んでいない土が堆積することや、その他遺物の含有量が少ないことから、水田などの生産域に利用されていたと推測できる。地表高は中央部が最も高く、東側に行くとそれより10cm程度低くなる。

第5層 T.P.1.8～2.0m前後。第5層上面を第3遺構面と捉えた。西半は灰色～灰オリーブ色シルト。層厚20cm程度であり、第4層西半の土質に似るがやや粒子が細かい。

包含する遺物も第3層とほぼ同時期のものであり、狭義には第4層と第5層は同一層であり、同一遺構面の上面と下層と捉えるべきかもしれない。ただ、この層の上面でも土坑などの遺構を検出したため、別の層とみなした。同一土層が堆積の過程で堆積速度が鈍くなり、短い期間形成された遺構面の上面を捉えたと考えられる。

東半は、第2面の東半と同質の灰色～青灰色シルトである。第4層との明確な境界が認められなかった。よって、東半は長期間生産域として継続利用されており、その間に短期間で止水と流水を繰り返している層の変化点が第4～5層間に表れているものと考えられる。

第6層 T.P.1.8m前後。第4遺構面上面に相当する。青灰色～灰色極細粒砂から細粒砂。層厚平均40cmであり、河川の氾濫による堆積と考えられる。遺物は皆無である。よって、明確に土層の時期を決定できるのは、第4層までである。

東半では細い南北溝を検出したが、西半では第2・3面の遺構の掘り残しと思われる土坑・柱穴を確認したにすぎない。

第7層 T.P.1.6～1.7m前後。第5遺構面上面に相当する。灰色シルト～粘土で、土壌化が進んでい

ない、粘性の強い土である。層厚50cmと厚い。東から中央にかけてはほぼ平坦であるが、西側は10~20cm程度標高が高くなる。全域に等間隔で南北方向の畦畔や溝を検出した。西側の標高の高くなる場所に大規模な畦畔が存在するので、高いところから低いところに水が流れるように人為的に調節された結果が、この高低差を生じさせているのかもしれない。

第8~11層 植物遺体の含有量によって、帯状にやや茶褐色を呈する部分があり（第9・10層）、3~4層に分層可能である。下層にいくほど砂質が強くなる。東側は第12層の流路の影響を受けてか、水平堆積とならず、層が乱れる。

第12層 T.P.1.1~1.2m前後。灰白色極細粒砂~粗粒砂。有機物を含有してやや紫がかって見える部分もある。平均10cmほど検出したところで調査掘削深度に達したため、この層の下端は不明である。しかし、東西の隣接する調査区（02-3区、01-1区）と対比すると、この砂層は古墳時代中期から後期に、旧大和川の分流路にあたる小阪合分流路がさらに南下して生じる分岐の自然流路になると想定される。この流路は既往の瓜生堂遺跡の調査で、西端が99-3区で、東端が02-3区で検出され、東西幅が約150mにわたり、深さも最深部は約2mであることが判明している。よって、第7層はこの流路の東端付近を検出したと言え、深さも更に下がると予想される。

03、04調査区および確認調査の03区の層序を比較しての検討は、後述の第6章で記述してあるので、そちらを参照されたい。

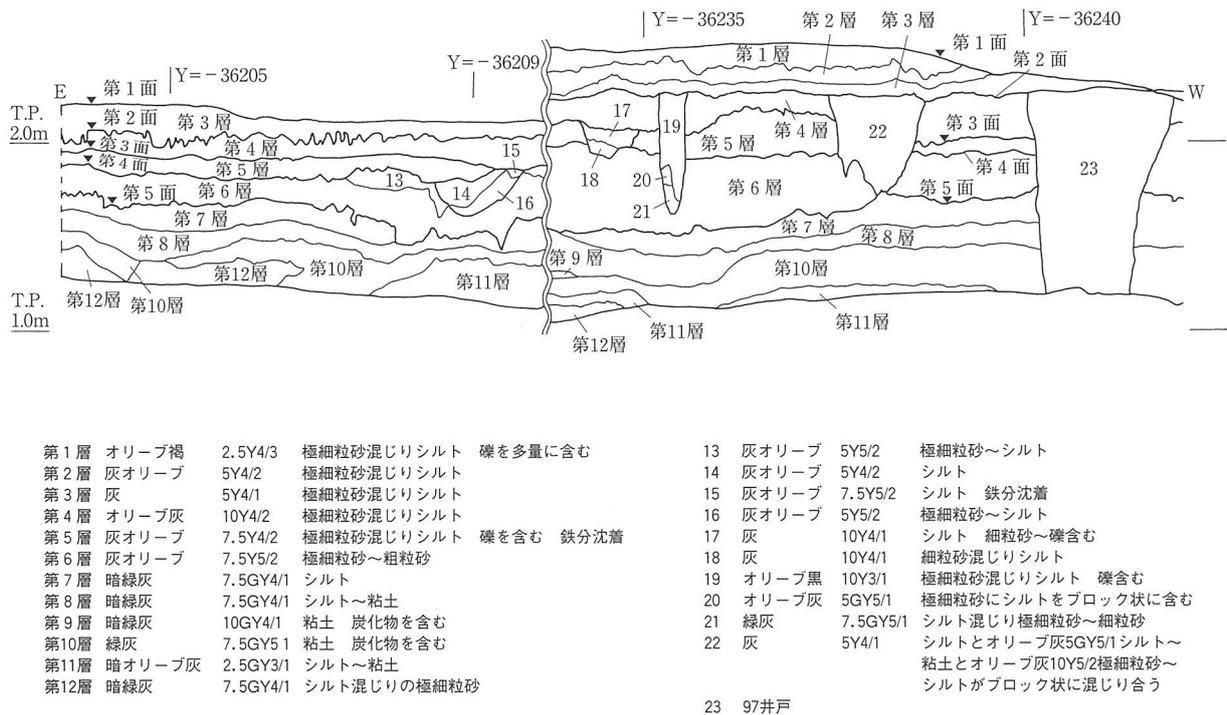


図13 04-1-1区 基本層序断面図 (S=1/80)

(2) 遺構と遺物

1) 古墳時代

①遺構

基本層序で述べたとおり、第4面以下は一部の遺構を除いては遺物が出土していないため、どの時代に帰属するか決定するのは難しい。しかしながら、隣接する地区の層序との対比から、第5面までを古代に属する遺構面と考えた。従って、今回調査したなかで、古代より前の明確な遺構は検出できなかった。

基本層序の項で示したように、第7層上面砂層が古墳時代中期から後期にかけての、大和川分岐流路である自然流路の氾濫堆積と考えられる。よって、第7層以下もしくは第6層～第7層間のどちらかからが古墳時代以前に相当すると考えられる。

調査は断面観察にとどまったが、その範囲では古墳時代の遺構は皆無である。円筒埴輪片が微量だが出土することから、現在は消滅してしまったが、古墳が周辺に存在していた可能性も考えられる。ただし、埴輪の出土量から推測しても、古墳の存在地はさらに西側の瓜生堂遺跡99-3～6区周辺と想定される。

古墳時代より前にさかのぼる遺構・遺物については確認できなかった。

②遺物

古墳時代の遺物として一部の遺構や、包含層中に若干の須恵器や埴輪が含まれていたが、含有量はわずかである。

第3面の69土坑で古墳時代になる可能性をもつ、須恵器の小形脚付壺脚部が出土している(図27、写真図版16-2006)。他の出土遺物や遺構の説明との関係上、古代の項に含めて説明した。

図示し得なかったが、円筒埴輪片などが数点出土している。いずれも、古墳時代中期から後期の遺物である。

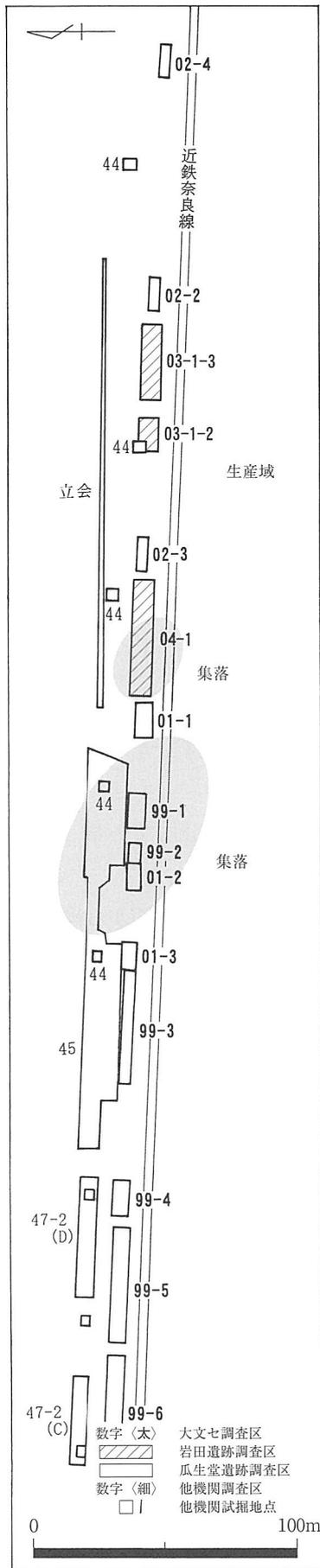


図14 古代遺構面全体図 (S = 1/2500)

2) 古代

① 遺構 (図15~24、写真図版 6~12)

隣接する瓜生堂遺跡では01-1区までは、古墳時代から中世までの遺構が同一遺構面で検出されているが、古代の遺構は99-1区・01-2区でわずかに遺構・遺物が検出されたのみであり、01-1区では中世の集落域しか検出されていなかった。

また、岩田遺跡04-1区より西に位置する、02-2区より東側の調査では、中世の畦畔や島島が検出されているが、それ以前の古代に相当する明確な遺構は検出できていない。

今回調査区に最も近い古代の遺構は、北西に位置する(財)東大阪文化財協会45次調査区で、西半に9世紀後半から10世紀の集落域が検出されている(図14)。

今回の04-1区の調査では、当初は01-1区で検出した中世の集落域がより東に続くと想定して、中世の遺構面を検出すべく調査を進めた。しかし、機械掘削終了直後の第1面には中世後半期から近世の遺物が含まれていたが、第2・3面では西半は主に9世紀中頃から後半以前の遺物を含んでいたため、中世ではなく、古代の遺構面と位置づけた。

さらにその下層の第4面についても、時期決定できる遺物は出土していないが、第2・3面に関連する下層遺構であると捉え、古代の遺構面に含めた。第5面についても、直接時期を決定する遺物を包含しなかったが、隣接する地区との層序の対比や、遺構の形状から古代の遺構に含めた。各々の遺構面平面図は図15に表した。

第5~2面の調査によって、04-1区に7世紀、8世紀の遺構を含み、下限は9世紀前半とする、小規模な古代の集落が存在することが判明した。

04-1区の古代集落は、瓜生堂遺跡99-1~01-2区、45区にまたがる集落とは、集落を検出しない01-1区を挟むため、別の集落域と考えられる。また、時期的にも先行する遺構を含むことから別の集落が存在することが明らかになった。この周辺の古代集落としては最古に属する。

以下、各遺構面の詳細をみていく。

第5面 | X=-148215 第4面 | X=-148215 第3面 | X=-148215 第2面 | X=-148215

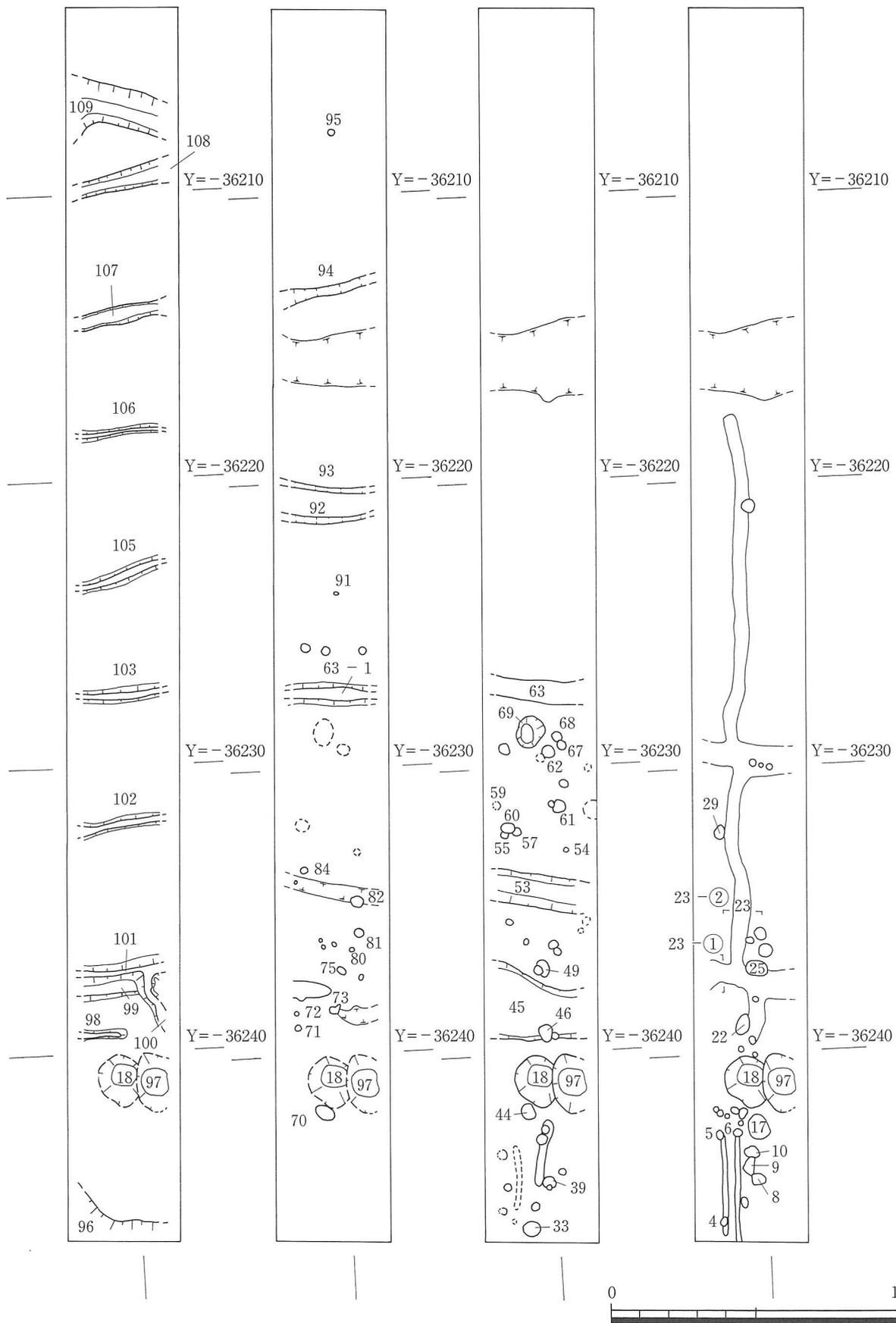


图15 古代遺構面 (第5~2面) 平面図 (S = 1/200)

a. 第5面 (図15、写真図版6)

調査区の全域で等間隔に広がる南北方向の溝3条、畦畔5本を検出した。

なお、調査上の諸般の事情で、本面で最終確認した調査区の西側の井戸1基は本来は上位の第2・3面に帰属するものである。

第5面は遺物が全く出土しておらず、時期決定の決め手を欠くが、上層遺構面で最も古い時期を示す69土坑より古い、すなわち7世紀以前に相当する時期と考える。

[96・107～109溝] 96溝は調査区の西端で検出した幅0.7m、深さ0.1mの浅い溝で、人為的な溝と言うよりは、自然のたわみの可能性も考えられる。107～109溝は調査区の東半で検出した、幅0.6～1.4mの南北方向の溝である。真南北よりはやや主軸を北西もしくは北東にふる。深さはいずれも0.1m未満と浅い (図16)。

[100～106畦畔・99溝] 102～106の畦畔は幅が0.4～0.5m、高さが5cm程度の小さなものである (図16)。

101畦畔のみが幅0.7m、高さ0.2mと大規模であること、100支線畦畔と、畦畔に平行する99溝をもつことから、101畦畔は坪境的な役割をもつ大畦畔であろう。101畦畔より西側は平均して10cm程度地表高も高くなっており、西から東へと流水する水田を形成していたと言える。

101～108の畦畔・溝は主軸を真南北よりやや北西-南東にもつ同じ方向をとり、ほぼ3～4mの等間

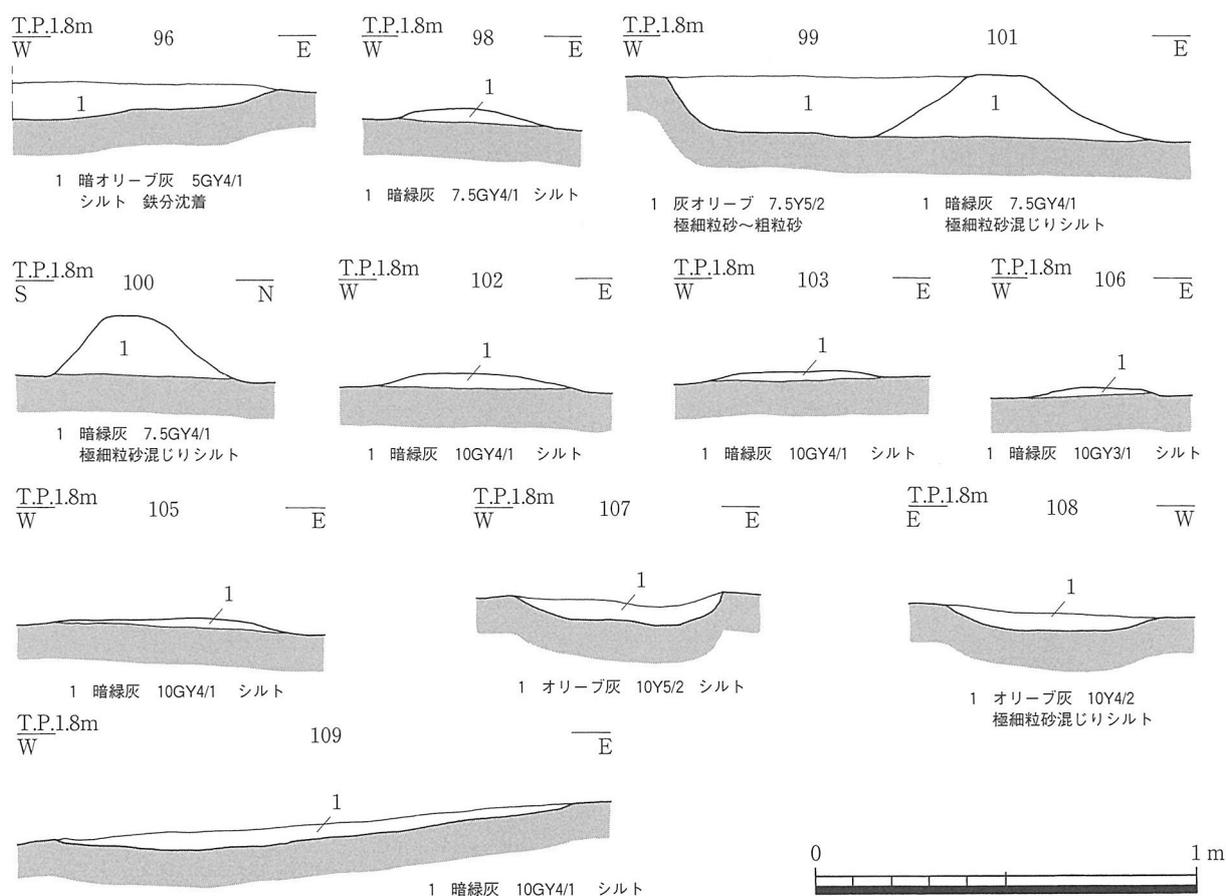


図16 第5面畦畔・溝断面図 (S = 1/20)

隔に並ぶ。これにより1枚の田の東西区画幅は3～4mと判明したが、南北は不明である(図16)。

畦畔・溝からも、包含層からも遺物は全く出土しなかった。

b. 第4面(図15、写真図版7)

第3面のベース層を除去したところ、灰色砂層上面で遺構を検出した。ベース土は砂層で居住、生産に適さない土壌である。遺構面としては第4面としたが、これらの遺構は第2・3面に関連する下面遺構と捉えるべきものである。西半では土坑などを、中央付近では南北方向の畦畔と思われる高まりを、東半では南北方向の細い溝数条を確認した。

遺構・包含層ともに含まれる遺物はほとんどなかったが、上下層との関連から第4面は第2・3面に近い時期と思われる。

〔63-1 畦畔〕 調査区の中央付近で検出した、幅0.7m、高さ0.2～0.3m程度の高まりである。実際に畦畔として機能していたかは不明であるが、この部分のみ土のしまりがよいことや、この遺構より東では溝しか検出されていないことから、西半と東半を区画する機能をもつものとして考えられる。第3面の63溝とほぼ同じ場所に位置する(図18)。

〔92・93・94溝〕 いずれも調査区の東半で検出した南北溝である。92溝と93溝は主軸はほぼ真南北で、1.0m離れて平行に走る。幅0.2m、深さ5cm程度である。94溝の主軸は北北西-南南東に近い。幅0.4m、深さ約5cmである(図17)。

〔70～91土坑〕 調査区の西半では小規模なピットを多数検出した。このうち第2・3面の土坑・柱穴と位置的に重なるものはそちらに掲載し、残りの断面を下図に掲載した(図17)。

下図のピット群も直径約0.2～0.6m、深さが0.05～0.2m程度と直径に比して深さが浅いことから、

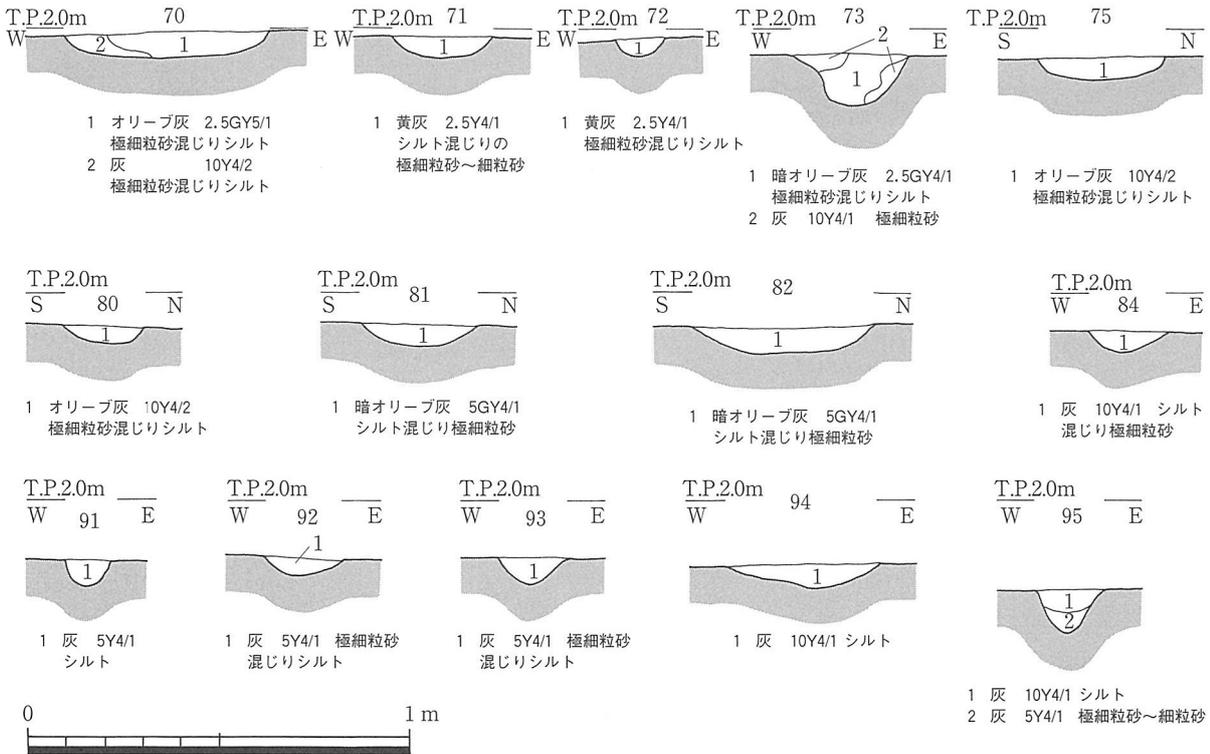


図17 第4面遺構断面図 (S = 1/20)

実際には第2・3面に存在していた遺構の下層を、第4面の高さで検出した可能性が高い。柱痕は検出できなかった。また、遺構の規模や間隔にも規則性を認められず、建物などを復原するには至らなかった。

c. 第3面 (図15、写真図版7・8)

第2面西半を約10cm下げたところで、遺構を検出したため、第3面と称した。

遺構は調査区西半にのみ集中し、南北方向の溝や大形の土坑、柱穴等を検出した。

東半では遺構は皆無である。土質は水簸されたような細かい粒子のシルト層であり、第2面との境界が明確でない。第2面に続き、水田などに利用されていたか、常に湿地状で居住に適さない地域と考えられる。

第3面は遺構・包含層ともに含まれる遺物の時期から、9世紀中頃から後半の遺構面と思われる。ただし、69土坑からのみ、7世紀かそれ以前の時期を示す資料が出土することから、69土坑はやや先行する遺構と言える。

第2面と第3面は標高差がほとんどないことや、時期的にはほぼ同一であることからおおむね同一期に属する遺構面を2回に分けて検出したと考えられる。

[45・53・63溝他] 45溝は調査区の西側、Y = -36240付近に西端をもつ南北方向の大きな溝である(図18)。幅は最大部で2.5m、深さ0.15mをはかる。

53溝はその東に位置する幅2.2m、深さ0.3mの南北溝である。63溝は53溝よりさらに東に7m離れて存在する南北溝である。幅0.8m、深さ0.1mをはかる(図18)。53溝・63溝は主軸の方向がやや北東-南西にふるが、その角度がほぼ同じであること、両溝間には掘立柱建物柱穴になる可能性をもつ大形土坑が存在することから、建物の区画・排水などの機能をもつ溝の可能性はある。

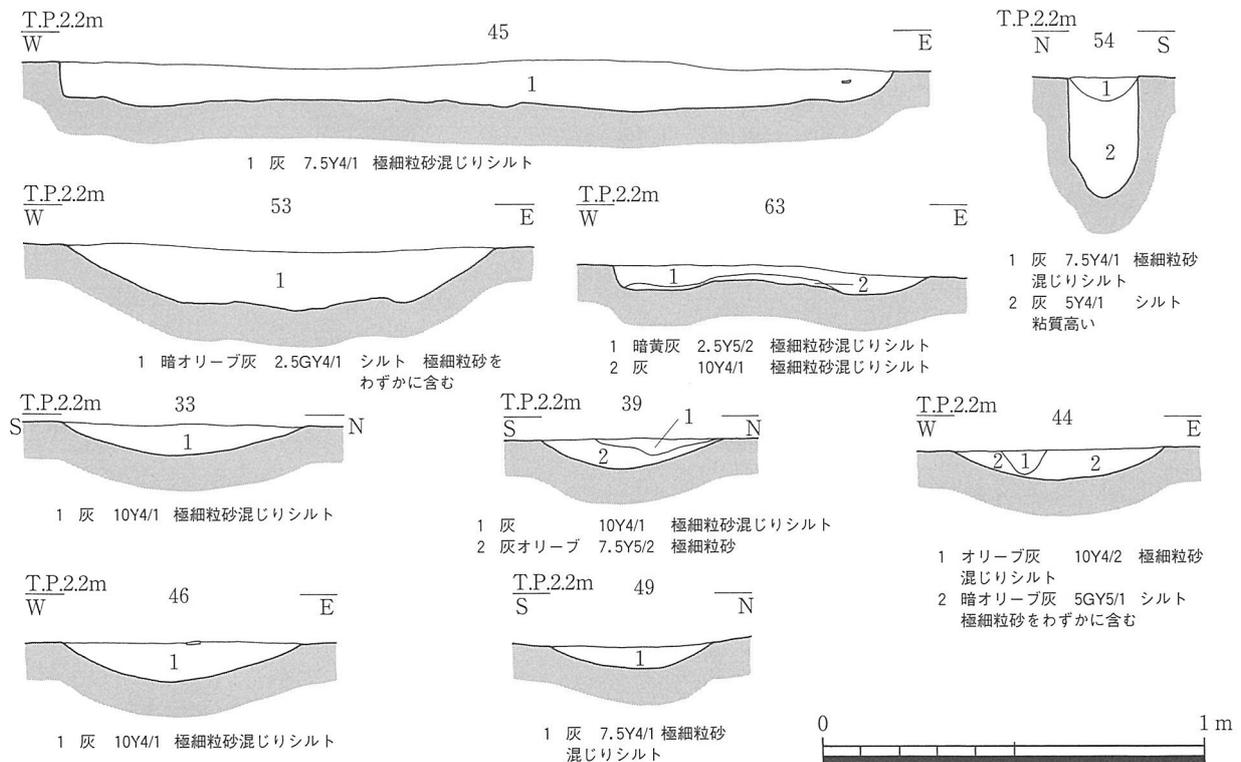


図18 第3面遺構断面図 (S = 1/20)

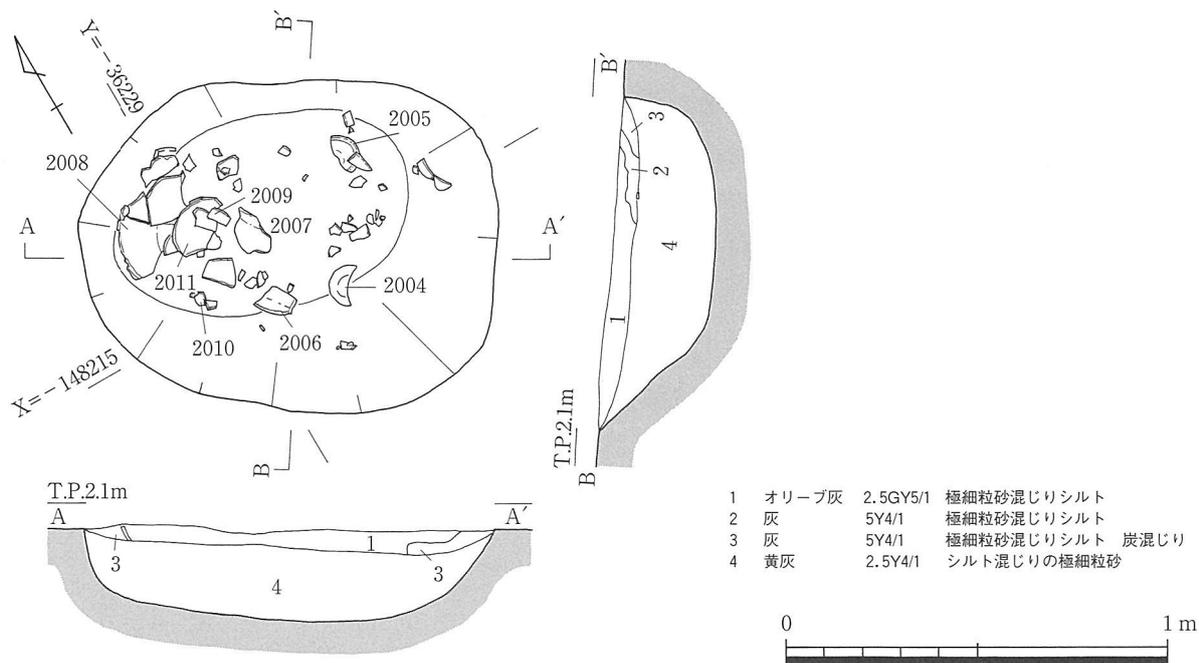


図19 69土坑平・断面図 (S = 1/20)

〔69土坑〕 調査区の中央付近、63溝の西側で検出した大形の土坑である。1.1m×0.9mの長円形をなし、長軸の方向は北西－南東である。深さ約0.3m、断面逆台形をなす(図19)。埋土は何層かに分層でき、埋土中に遺物を含むことから短期間に埋没したのではなく、徐々に堆積した可能性が考えられる。

この土坑から須恵器杯、土師器杯、土師器鍋などの土器が出土した。完形を保って出土したものはわずかだが、全形を復原できうるものが数個あり、土師器鍋は土器を半裁したような形で、底部を西にむけて出土した。このことからこの鍋は意図的に埋められたとも考えられるが、それ以外の土器は投棄されたように一面に散乱していた。鍋の上半分を半裁してから埋めたとは考えられず、土坑が後に削平され、本来の高さが失われたと考えられる。

出土した遺物で須恵器杯の型式や、土師器杯は体部内面底部に放射線状の暗文を巡らす。口縁部にも1段の放射線状の暗文を巡らす特徴などから、この土坑は7世紀代の遺構と考えられる(図27)。

ただし、1点だけ古墳時代に相当する可能性もみられる、須恵器で脚台付壺の脚部と思われる破片が出土している。

第5面から第2面を通じて、7世紀代以前を示す遺構は唯一である。また、周辺の調査区でも古代の遺構・遺物は9世紀中頃から10世紀代を示しており、7世紀まで遡る資料は皆無である。今回7世紀代の資料を検出したことは意義深い。

すなわち、きわめて局所的にだが、7世紀にも集落などがこの周辺で形成されていた可能性が高まった。検出された中央部の69土坑から63溝のあたりは東西に比べて、やや地表高が高くなって微高地を形成する。従って、古い時期の遺構が残ったが、それ以外にも、もっと多くの当該期の遺構が周辺にあったとも考えられる。その後、後世の削平を受けたとみるのが妥当であろうか。

〔大形土坑(55・57・59～62・67・68)〕 調査区の中央よりやや西寄り、53溝と63溝に挟まれた区画で大形の土坑数基を検出した。

これらの土坑(60～62など)は、直径0.4～0.5m、深さ0.2～0.3mの平面円形ないし長円形のものが多く、断面はU字状を呈する。60土坑や62土坑は柱痕をもつことより、柱穴と判断できる(図20)。た

だし、柱材は検出されていない。

これらの大形土坑は東西約3m、南北約2mの間隔で位置する。このことより、大形土坑を柱とする掘立柱建物が構成される可能性が高い。が、調査区の南北幅が狭いため東西、南北各1間にあたる柱穴しか検出できず、断定するには至らなかった。なお、これらの大形土坑は2、3のやや小形の土坑と切り合い関係を有する。

また、45溝より西側でもやや大形の土坑33・39・44などは下に図示しなかったが、やはり建物柱穴になる可能性が高い。

第3面西半の遺構は、いずれもわずかであるが遺物を含み、9世紀中頃から後半の時期にほぼ限定される。包含層中の遺物も同じであり、この時期に限定される遺構面と捉えてよいだろう。

東半は中世後期の土器や瓦、近世陶磁器などを含むことより、かなりの長期間継続使用されていたと考えられる。

d. 第2面 (図15、写真図版9)

遺構は東西方向の畦畔を除いては、西半に集中してみられた。中央付近で東西の畦畔に交差する南北

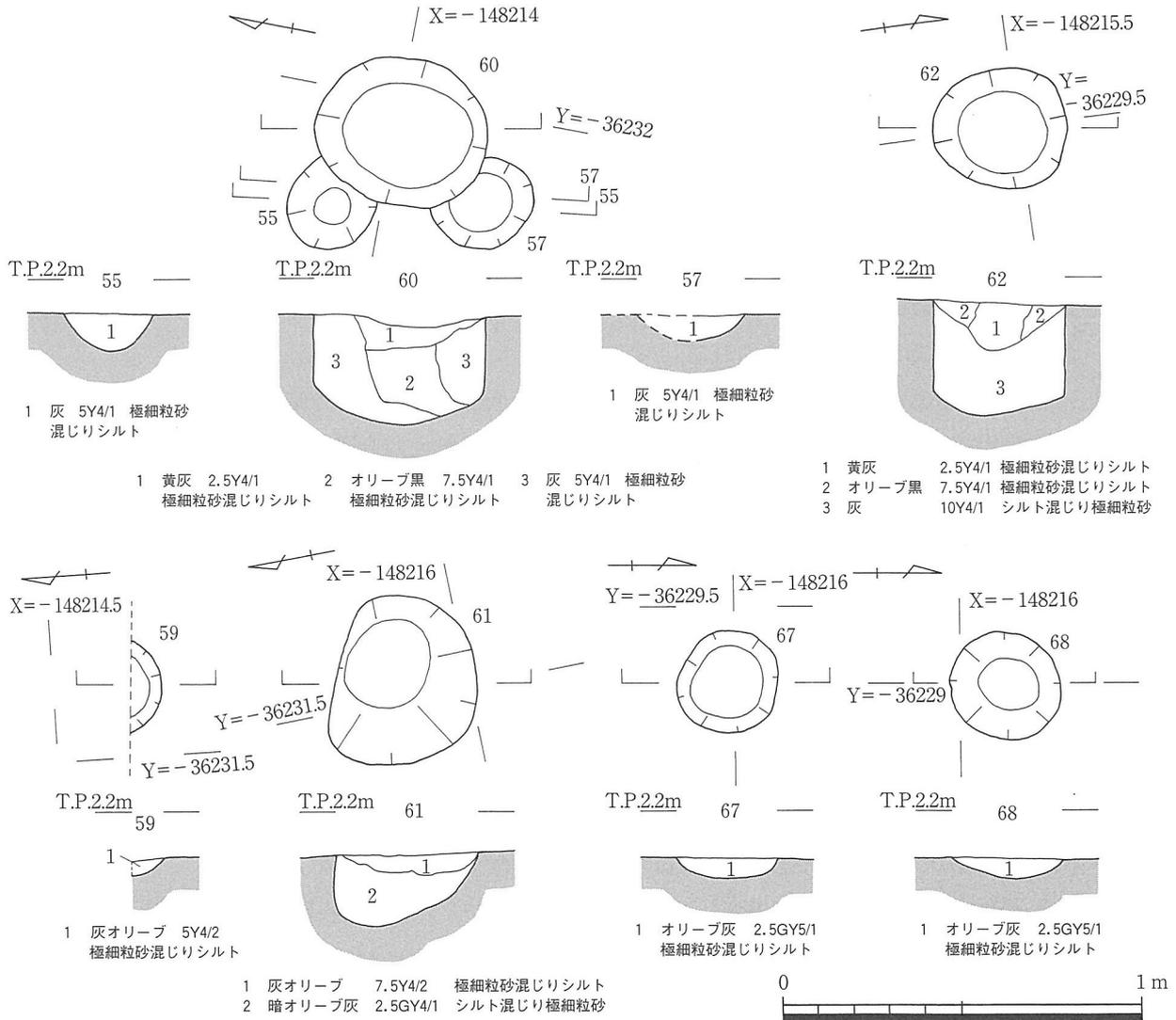


図20 大形土坑平・断面図 (S = 1/20)

の大畦畔、それより西で円形の井戸1基、大形の土坑や柱穴数基、東西方向の溝などを検出した。また、第5面で最終確認した井戸ももう1基の井戸との切り合い関係や遺物の時期から、最終的にはこの面の遺構と判断できるので、ここで説明しておく。

第2面の遺構・包含層中の遺物とも第3面と大差なく、9世紀中頃から後半の遺構面と思われる。

〔23畦〕 Y = -36230付近で幅0.7mの土の締まった箇所を検出した。高さはほとんどなかった(約0.1m)が、調査区の南北を通ること、これより約7m離れた箇所でも同様の南北の遺構を検出し、この二つをつないで交差する、東西方向の帯状の痕跡を検出したことから畦と判断した。東西の畦畔は20m以上の長さを持ち、東端はY = -36218付近まで伸びる。

〔柱穴(4~6)、土坑(10・17・22・29・25)他〕 23畦より西側で大小の土坑や、東西方向の鋤溝状の溝などを検出した。そのうちでやや大形の遺構については、図に示した(図21)。これらの土坑などのうち、6柱穴など柱痕が残るものもあるが、ほとんどは柱痕をもたず、深さも浅いため、柱穴になるかは判断できない。

〔18井戸〕 X = -148215、Y = -36240の交差する付近で、大形の円形土坑を検出した。掘方を掘り進めていくと、方形の木枠を検出したため、井戸と判明した。

18井戸は直径1.5~1.7mをはかる不整円形の掘方をもつ。第2面検出面より約0.5m掘り下げたところで、板状木製品を方形に組み合わせた井戸枠を検出した(図22)。井戸側は中心が井戸掘方中心よりやや東にずれる。

さらに掘り進めたところ、井戸枠は板を一辺に3~4枚使用しており、板を横組みする。各々の辺の

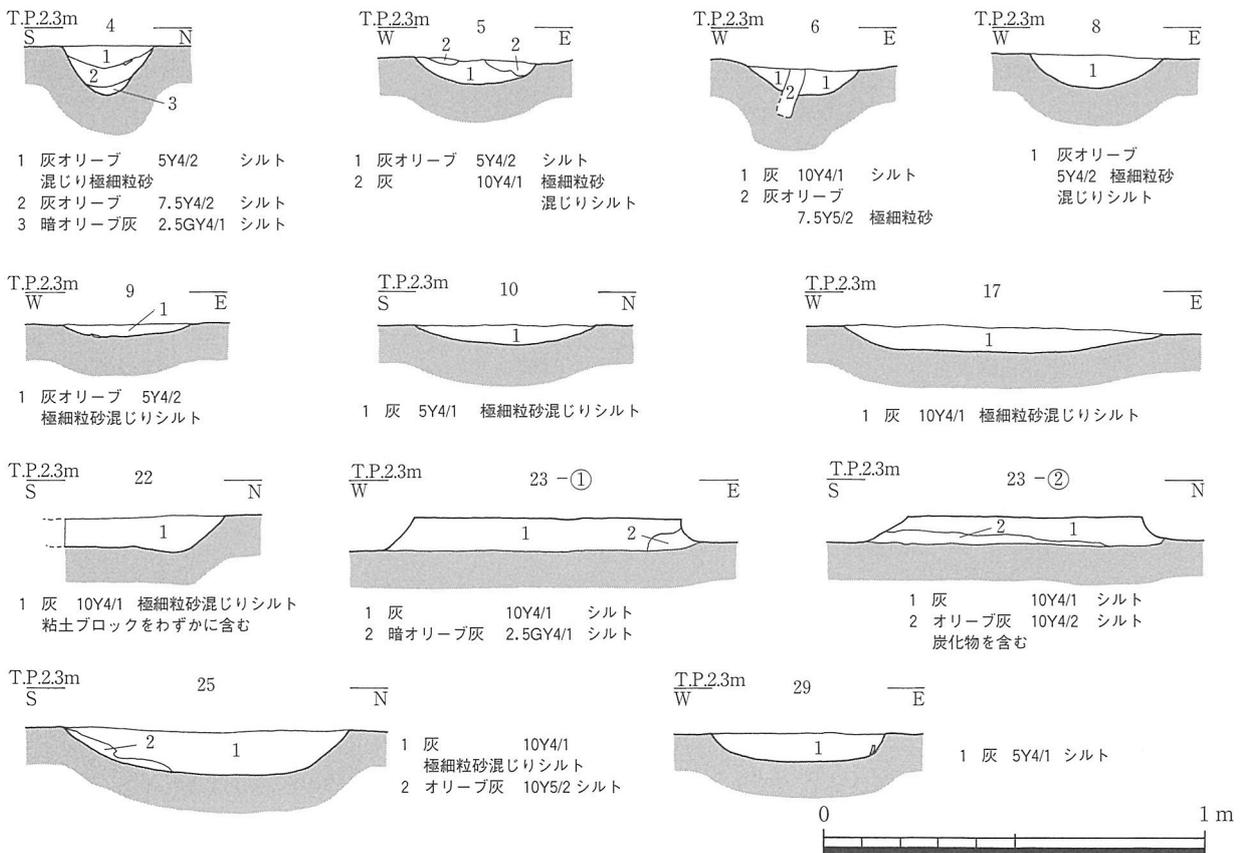
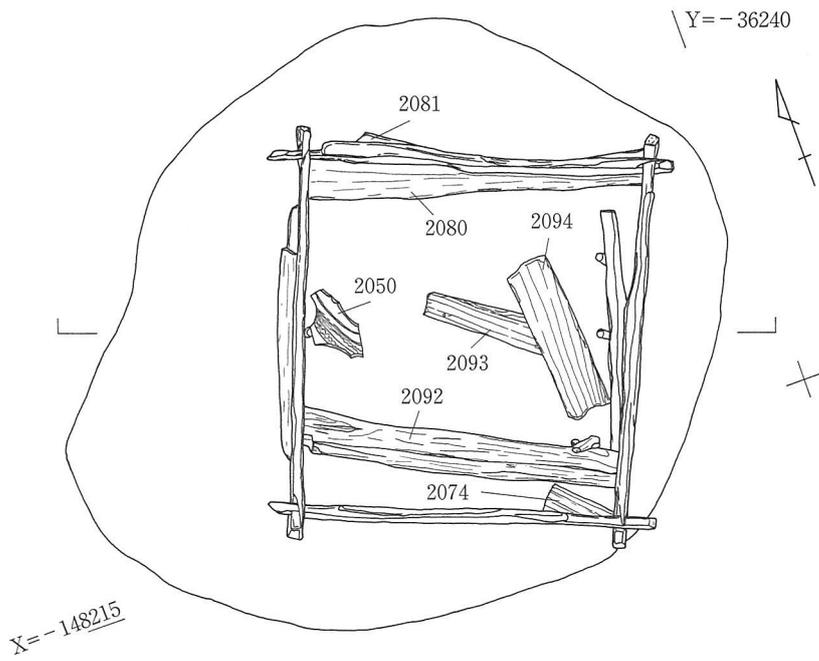


図21 第2面遺構断面図 (S = 1/20)



T.P.2.3m

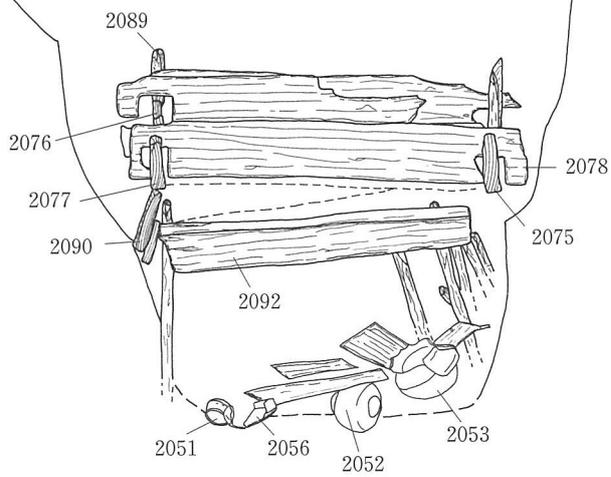
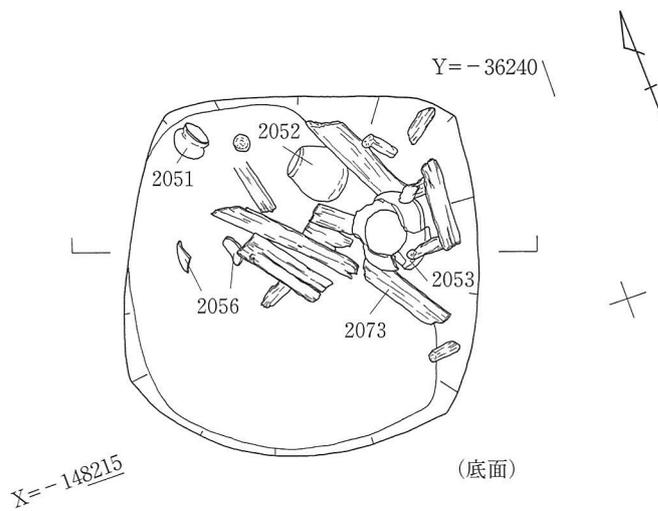
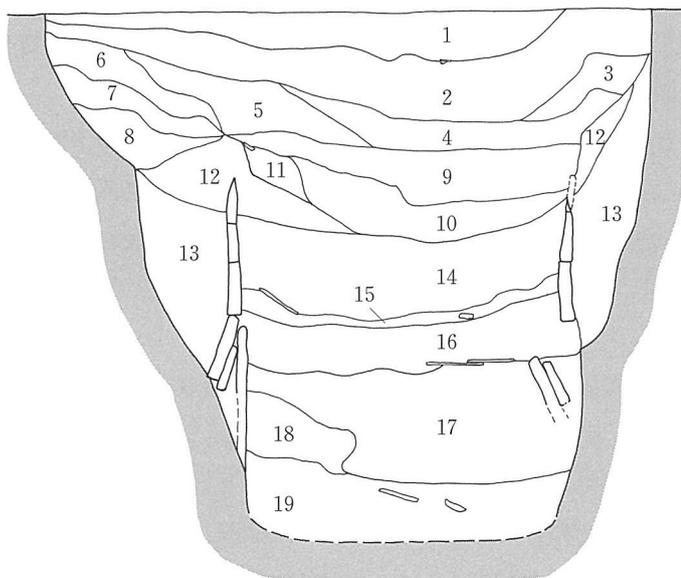


图22 18井戸平・立面图 (S = 1/20)



T.P.2.3m



1	黄灰	2.5Y4/1	極細粒砂混じりシルト
2	灰	5Y4/1	極細粒砂混じりシルト 炭を含む
3	オリーブ黒	5Y3/1	シルト
4	灰	10Y4/1	極細粒砂混じりシルト 酸化鉄を含む
5	オリーブ灰	2.5GY5/1	極細粒砂混じりシルト
6	暗オリーブ灰	2.5GY4/1	極細粒砂混じりシルト
7	オリーブ灰	5GY5/1	極細粒砂
8	オリーブ灰	10Y5/2	極細粒砂 やや酸化鉄を含む
9	灰	N4/0	シルト
10	暗灰	N3/0	シルト 炭を含む
11	灰	N4/0	シルト混じり極細粒砂～細粒砂
12	灰	N4/0	シルト混じり極細粒砂
13	灰	10Y4/1	極細粒砂～細粒砂に7.5GY粘土ブロックをわずかに含む 炭含む
14	灰	7.5Y4/1	粘土
15	オリーブ黒	7.5Y3/1	粘土
16	灰	10Y4/1	粘土 カルシウム含む
17	オリーブ黒	10Y3/1	粘土
18	灰	10Y4/1	シルト混じり極細粒砂
19	灰	10Y4/1	極細粒砂混じり粘土に暗オリーブ灰5GY5/1粘土ブロック含む

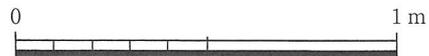


図23 18井戸平・断面図 (S = 1/20)

先端から約10cmで上下左右の板がうまく組み合わさるように、加工を施した蒸籠組の構造をなすことが判明した。(財)大阪市文化財協会が調査した、細工谷遺跡でも8世紀中頃の蒸籠組の井戸が検出されており、こういった板を組み合わせた井戸構造を有する井戸は、奈良時代によくみられる。その他、2004年度当センターが調査した瓜生堂遺跡02-1区でも同様の板を組み合わせた井戸を検出している。

板は長さが1.1m、幅0.15~0.2mであり、井側の大きさは0.9m四方、高さが0.5m程度であった。井側の内側は板留の補強と思われる、直径約5cmの丸杭(1点のみ角杭)が、板と板の交点あるいは辺中ほどの2、3箇所差し込まれていた。杭の長さは1.0m以上あり、井戸の最底部まで到達していたものもある。

井側の最底部は、やはり内側から、補強としてやや厚みのある板材や角材を当てていた。そのうち南北の両辺に使われた角材は、元来は何かの建築部材であった丸太材を半切して再利用したものである。上下に方形のほぞ穴をもち、上下端は削って加工される。二つの材の平らな面を合わせたところ、合致し、本来は1本の丸太材だったことが判明した(写真図版20参照)。これらの井戸側の枠板については、一辺4枚で4辺なので約16枚存在するが、一部を図化、写真で掲載し、以外は大きさを計測して表にまとめた(表1)。

また、井側の内部からは須恵器や板状の木製品などが出土している(図22上の平面図)。

さらに掘り進めたところ、平面形検出面より1.4m下で多量の土器、木製品などの遺物を検出した。その出土状況は図23の上にある平面図で示した。

下層からの出土遺物は、容器などの底部と考えられる隅丸方形の板材や、完形の土師器杯A、須恵器の小形壺E、壺L、壺Qなどである。とりあげて洗浄したところ、土師器杯の底部外面には墨書があった。また、須恵器壺のうち、やや長頸壺の器形を有する壺Lは頸部から上を、最も大きい壺Qは口縁部が意図的に打ち欠かれていた(図28)。土器以外では、金属製の帯金具(巡方)が出土していることが注目される(図29)。

図22・23で示した井戸の基部は、発掘設計上の掘削深度限界であり、諸般の事情により、井戸の最底部までを調査することができなかった。部分的に深さを確認したところ、図化し得た最基部より約0.5m下ではほぼ掘方に達すると予測できたので、この井戸の深さは約2.0mと推測できる。

また、遺構の図化終了面から最底部までの井戸埋積土を一括して採取し、水洗浄したところ完形の須恵器杯Bやほぼ完形の南河内型の土師器甕などが出土した。須恵器の杯は底部外面、高台内に墨の痕跡が認められ、硯に転用されたと推測できる(図28)。最底部で出土した土器は、平城Ⅲ~Ⅳ型式にすべっておさまり、上記の土器と合わせて、一括投棄された可能性が非常に高い。セット関係をなす良好な資料である。

やや時期は下るが、先述のセンター02-1区52井戸出土からも同様のセット関係をもつ土器が出土しており、それらの土器の底部に孔を穿ったり、口縁部を打ち欠く点も似る。井戸に意図的に一部破碎した土器を一括投棄するのは、井戸祭祀としてよくみられる事例である。

また、洗浄した土中からはガラス玉などの遺物は発見できなかったが、モモの核や小動物の骨などの有機遺存体を大量に採取した。その同定結果は第5章にまとめた。

この井戸の中層から最底部では8世紀中頃から後半の遺物が出土するが、上層には9世紀前半代の遺物が含まれる。また、断面を観察しても緩やかに堆積が進行したことが伺える。よって、この井戸は8世紀中頃に構築され、9世紀前半までは存続していたと考えられる。

表1 18井戸枳板計測表

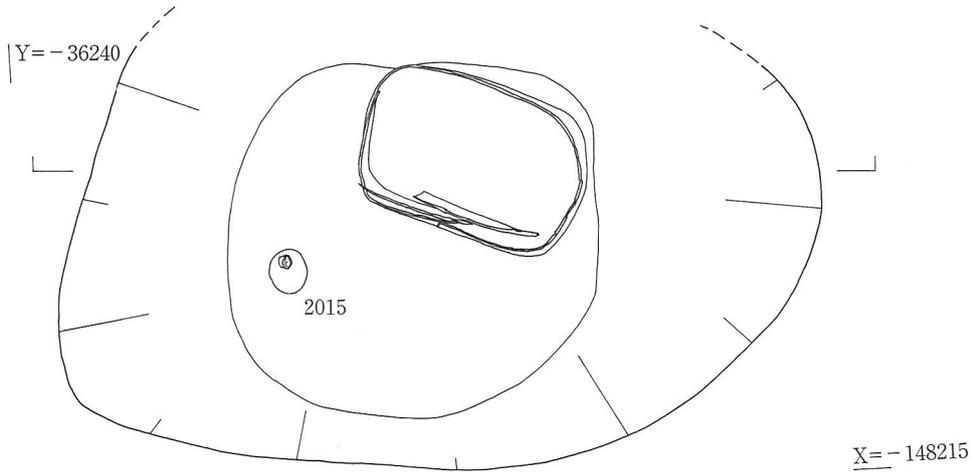
挿図番号	写真図版番号	遺物番号	取り上げの登録番号	取り上げ時の名称	大きさ (cm)			特徴	樹種
					長	幅	厚		
			218	東側第1段	83.0	13.0	3.0	凹部同方向に2ヶ所?	スギ
30	19	2075	219	東側第2段	105.9	15.6	4.7	凹部斜交い	スギ
	20	2091	222	板10	63.0	13.0	2.3	東側4段目裏込め板 2081と同規格	スギ
	19	2089	213	西側第1段	91.5	12.5	1.5	凸部両端?	スギ
30	19	2076	214	西側第2段	96.1	12.6	2.1	凸部両端	スギ
30	19	2077	215	西側第3段	105.2	15.1	4.5	凹部3ヶ所	スギ
	19	2090	227	西側第4段	55.5	19.0	1.2	枳板でない?	ヒノキ
			235	板18	52.0	12.0	4.0	加工不明	スギ
			193	南側第1段				凹部少なくとも1ヶ所	スギ
31	19	2078	193	南側第2段	103.0	15.5	4.1	凹部同方向に2ヶ所	スギ
	20	2092	229	板16	83.0	16.0	16.0	南側4段目裏込め板 丸太半裁、柄穴	スギ
			216	北側第1段	86.0	13.0	2.0	凸部少なくとも1ヶ所	スギ
31	19	2079	217	北側第2段	101.3	14.3	3.8	凹部斜交い	スギ
			224	板13	92.0	13.0	2.0	加工痕	スギ
31	20	2080	234	板17	83.0	16.0	16.0	北側4段目裏込め板 丸太半裁 2092と同一個体(接合)	スギ
31	20	2081	233	板12	62.3	11.2	0.8	穿孔5箇所、刃物痕 孔径4mm 北側裏込め板	ヒノキ

また、この井戸の南側には同規模の97井戸が存在する。97井戸は第5面時で最終確認したため、当初は97井戸を18井戸が切る、すなわち18井戸の方が新しいかと考えていた。が、97井戸はそのほとんどが南壁中に存在したので、壁断面からの確認を行い、第2面の遺構と判断するとともに、両井戸の先後関係の検討を行った。出土遺物からも18井戸と97井戸はほぼ同時期か、97井戸の方が新しく作られた可能性が高い。

〔97井戸〕 18井戸の南側で検出した円形もしくは隅丸方形の井戸である。南半分は土層を観察用アゼの南壁に入っていたため、平面形は北半分の検出にとどまった(図24)。先述のように18井戸との切り合いは不明瞭な点もあるが、97井戸が18井戸より新しいと判断した。

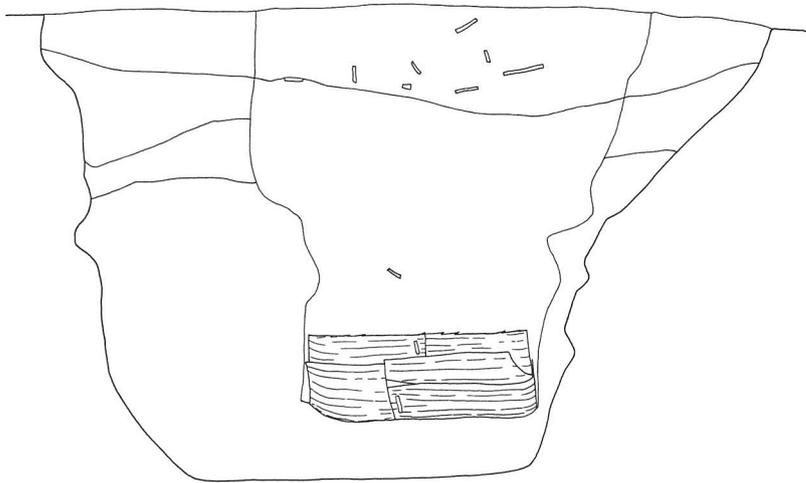
推定直径2.0m、深さ1.3mをはかる。掘方の内側1.0m強が井筒部と想定でき、最底部より、曲物を転用した井筒を1段検出した。曲物は直径40~50cmであり、部分的に欠損し、残りがよくない。上部にさらに曲物井筒が存在していた可能性もある。

上層からは須恵器や土師器の杯などの破片が、また、最底部、曲物井筒北東部からは須恵器の小形の

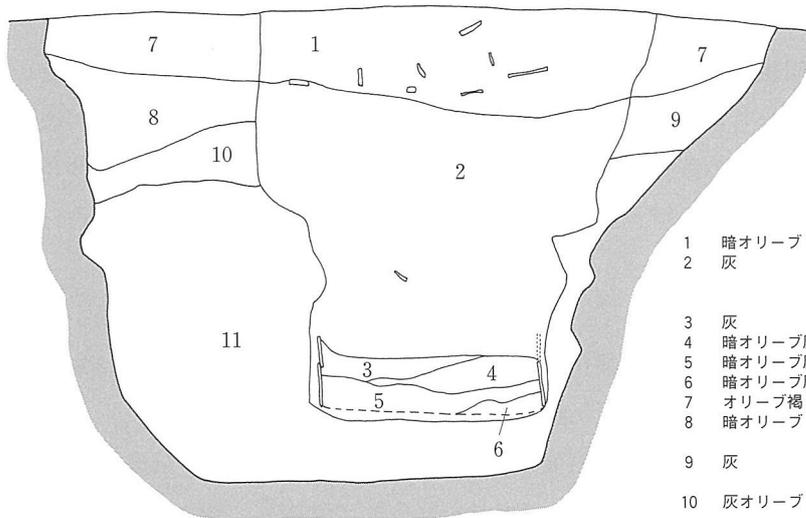


+

T.P.2.4m



T.P.2.4m



- | | | | |
|----|--------|----------|--|
| 1 | 暗オリーブ | 5Y4/3 | 極細粒砂混じりシルト |
| 2 | 灰 | 10Y4/1 | 極細粒砂混じりシルトに
直径5cm未満の緑灰7.5GY5/1
粘土をブロック状に含む |
| 3 | 灰 | 10Y4/1 | 極細粒砂混じり粘土 |
| 4 | 暗オリーブ灰 | 2.5GY4/1 | 極細粒砂～細粒砂混じり粘土 |
| 5 | 暗オリーブ灰 | 2.5GY4/1 | 粘土 |
| 6 | 暗オリーブ灰 | 5GY4/1 | シルト混じり極細粒砂 |
| 7 | オリーブ褐 | 2.5GY4/3 | 極細粒砂混じりシルト |
| 8 | 暗オリーブ | 5Y4/4 | 極細粒砂混じりシルトに
粘土ブロックが入る |
| 9 | 灰 | 7.5Y4/1 | 極細粒砂混じりシルト
細粒砂～礫を含む |
| 10 | 灰オリーブ | 7.5Y4/2 | 極細粒砂混じりシルト
鉄分沈着 |
| 11 | 緑灰 | 7.5GY5/1 | シルト混じり極細粒砂に
灰10Y4/1シルトを
ブロック状に含む |



図24 97井戸平・立・断面図 (S = 1/20)

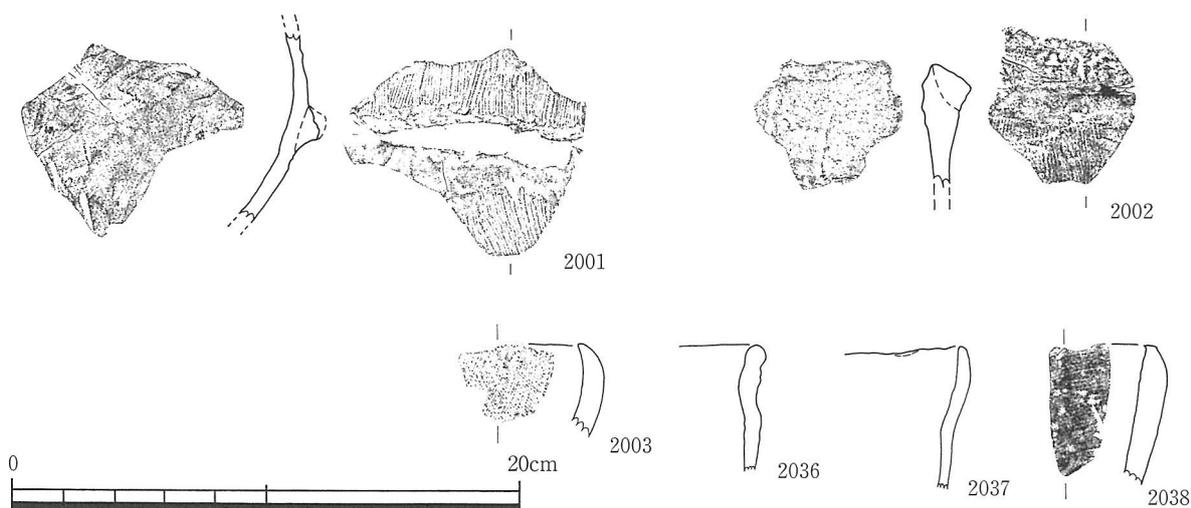


図25 第5～2面包含層他出土遺物実測図-1 (S=1/3)

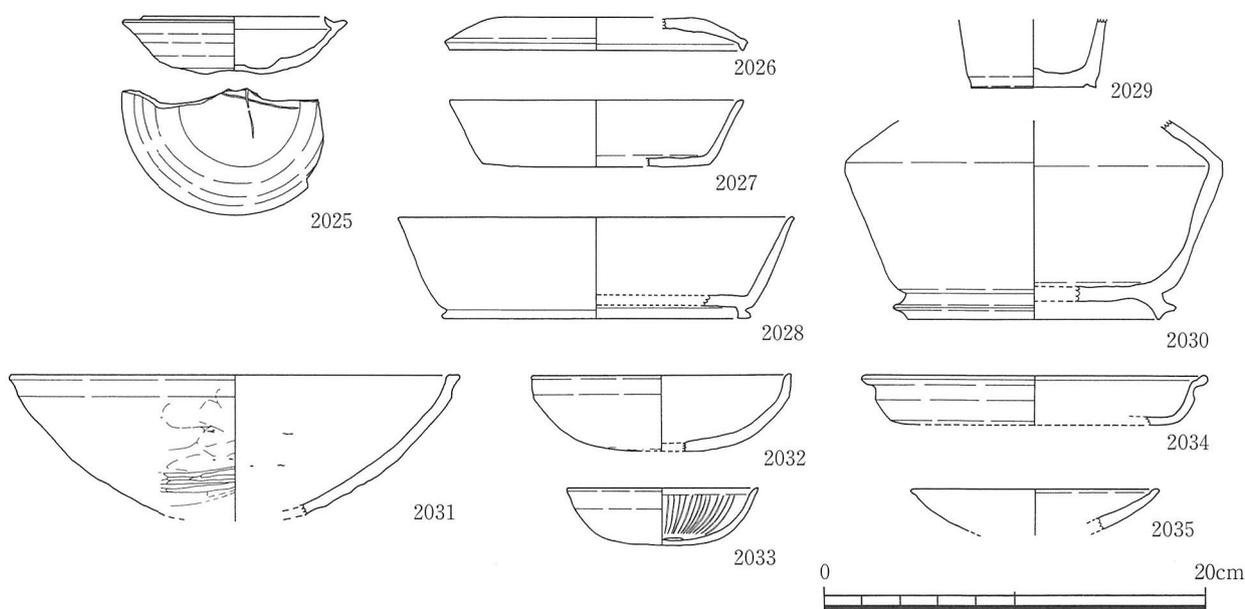


図26 第5～2面包含層他出土遺物実測図-2 (S=1/4)

平瓶が出土した。平瓶はほぼ完形で、正置の状態出土した。

上層の出土遺物から、97井戸はおおよそ9世紀前半の遺構と考えられる。

②遺物 (図25～31、写真図版16～21)

〔第5～2面包含層他出土〕 第5～2面の包含層や側溝から出土した遺物をここにまとめた。包含層中からは一定量の土器や瓦片が出土したが、細片が多く図化できるものはわずかであった。また、この層中から出土した埴輪や中世以降の土器は、各々の所属する時代のところで記述した。

a. 土器 (図25・26)

2001は第2面の18井戸周辺から出土した。須恵質に近いが土師器である。胴部が丸みを帯びた、鍋の体部である。凸帯状に鏝の痕跡が残り、断面は低い台形を示す。外面は、鏝の上下にはタテハケメを施す。内面はナデで、一部にミガキ痕跡が認められる。

2002は第4～3面間で出土した、移動式竈の上端部である。土師質で褐色を呈し、口縁にはタタキ痕が残り、外面にはタテハケを、内面には右下がりのヨコハケを施す。

2026・2027・2029・2030が側溝からの出土。2025・2028が南壁からの出土だが、第2～3面間相当層である。これら以外は包含層からの出土だが、そのほとんどが第2～3面間からである。

2025～2030は須恵器である。2025は杯身で約1/2存。かえりがかなり内傾する。外面に「×」状の線刻をもつ。2026は杯蓋。2027・2028は杯で、2028は高台を有する杯Bである。2029は鉢底部。2030は壺Q底部で、約1/2残存。高台が外に強く張り出す。

2031は第2面の中央付近で出土した土師器杯である。体部外面はケズリ後ナデを施す。2032・2033も土師器の杯で、2032は2031と同じ層位からの出土、2033は第3～2面間からの出土で、口縁端部が平らで、体部内面に放射線状の暗文をもつ。2034も大形の土師器杯である。

須恵器や土師器の器形から、第2～3面間は9世紀前半の下限時期が求められる。

2035は緑釉陶器で、小片だが、皿か小碗であろう。他にもう1片緑釉陶器が第3～4面間より出土している。

b. 製塩土器 (図25、写真図版18)

2003・2036～2038は製塩土器口縁部で、いずれも第2～3面間からの出土である。

2003は口縁部が内傾する器形が、後者3点とやや異なる。内面に細かな布目をもつ。

2038は内面に細かな布目をもつ。2037は外面にハケ？状の痕跡をもつが剥離が著しく、詳細は不明である。2036は内外面ともナデ。4点とも体部の凹凸が著しく、口縁端部は水平には整形されず、がたがたである。

c. 金属製品 (図29、写真図版18)

挿図の関係上、金属製品(2072)のみ図29に掲載した。

2072は第5面包含層以下からの出土である。扁平な断面をもつ鉄製品で、先端は欠損する。錆が著しい。刀子になる可能性がある。現存長7.9cm、最大幅1.4cm、厚さ5mmである。

〔第3面69土坑〕 大形の土坑より出土した遺物で、一括性の高い資料である(図27)。

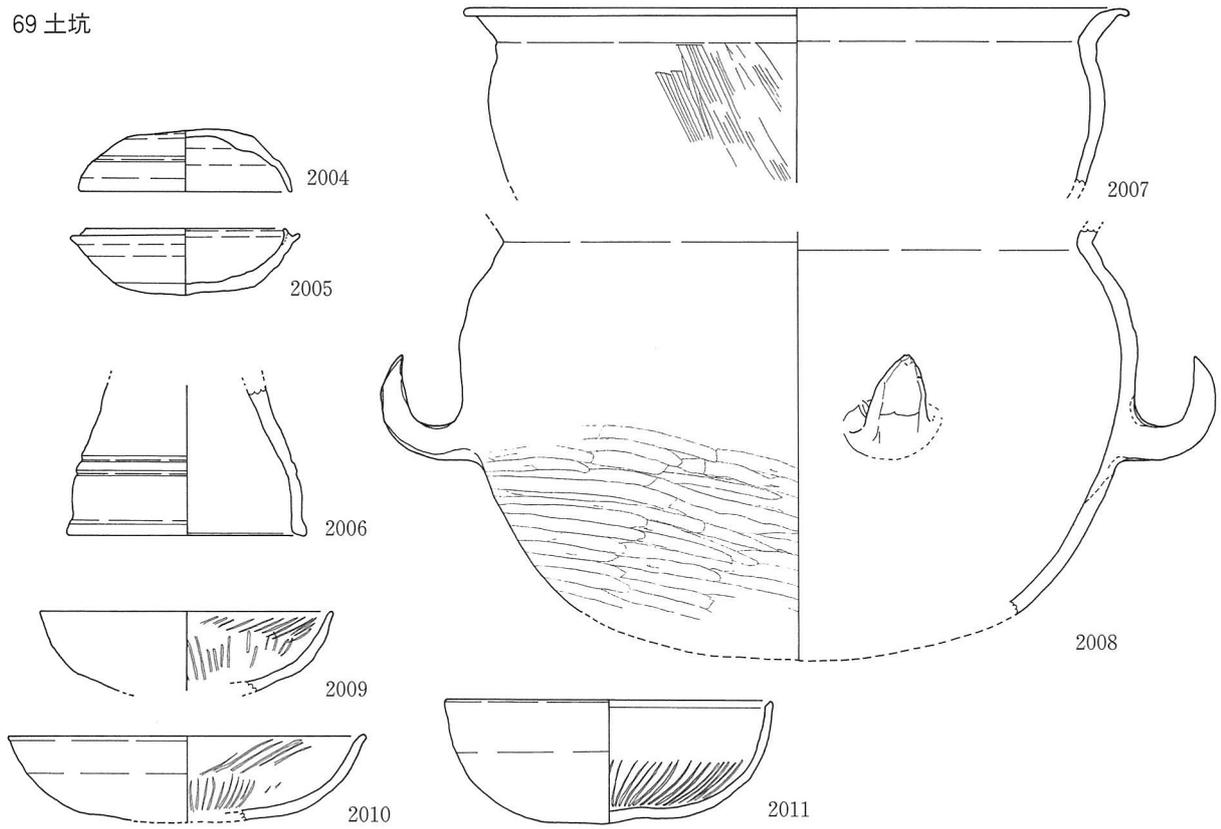
2004は須恵器杯蓋、2005は須恵器杯身でどちらも完形であった。口径10.5～11.0cm、器高3.5cm程度で、体部外面の稜線は鈍くなっている。

2006も須恵器だが、あまり類例をみない遺物である。小形脚付壺の脚部かと推測する。底面近くはややふくらみを持ち、その部分に2条の沈線を廻らす。沈線より上部はほぼ直線的にすぼまる。底部内面に自然釉が付着することから、底部を上にし焼成されたと考えられる。69土坑出土中では、6世紀に遡る可能性も一部考えられる遺物である。

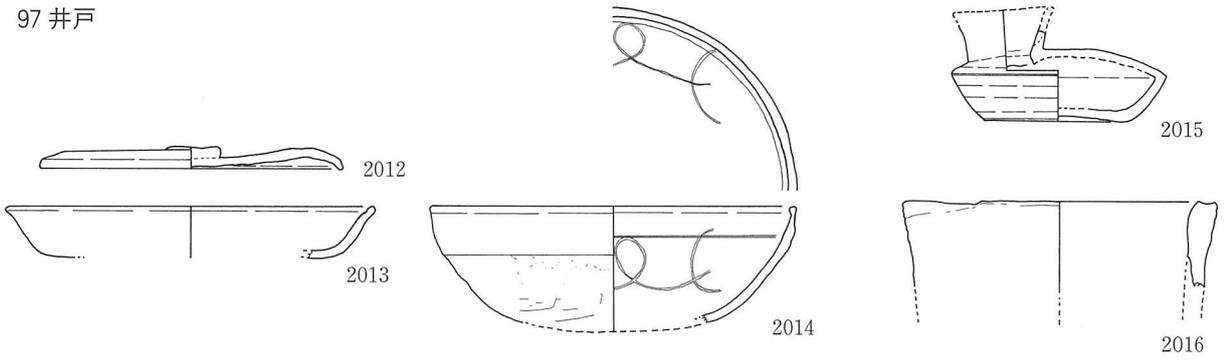
2009～2011は土師器である。2011は杯Cで、完形である。体部内面下半に1段の放射状暗文を巡らす。外面はヘラミガキで、暗文はみられない。口径17.1cm、器高6.5cmと大形である。2009・2010は土師器杯Aである。2011に比べると口径に比して器高が浅い、皿に近い器形をとる。また、体部内面の暗文が2段であることから、2011より新しい事が分かる。

2007は甕で、口縁端部を細くつまみあげ、外に開くように終わらせる。体部外面はタテハケ、内面はナデで、内面には炭化物が付着する。2008は鍋で、底部及び口縁部を欠損する。土坑の北西端に口縁を向けて横置されており、半裁されたように上位分はなかった。把手は体部に平行するように屈曲する。

69 土坑



97 井戸



23 畦

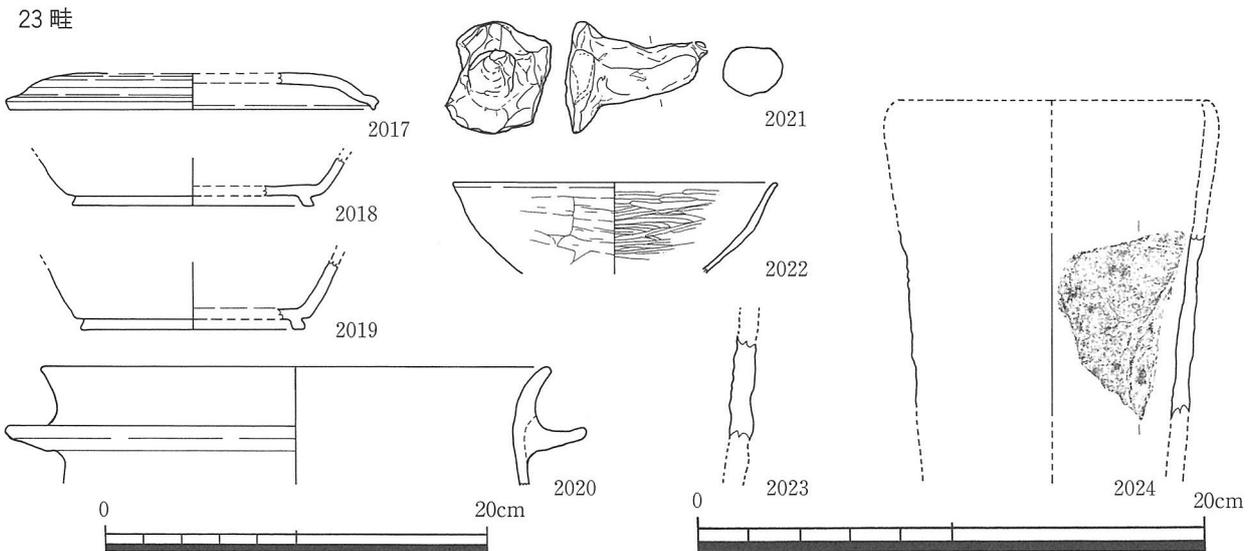


图27 第5~2面遺構出土遺物実測図 (S=1/4・1/3)

体部外面下方には右下がりのヨコケズリを、内面はナデを施す。

69土坑の遺物は2006のみが6世紀代、それ以外は7世紀前半から中頃を示す遺物で、出土遺物からみて本調査の中で最も古い様相を示す遺構といえる。

〔第2面97井戸〕 18井戸と切り合い、曲物を井戸枠とする井戸である。南半分は土層観察用の壁に含まれていたため、2012～2014は南壁をはずした際に出土した。従って、厳密な出土位置を特定できないが、掘方上層からの出土である。2015のみが最下層の掘方内、曲物井筒の北東部より出土した（図24、写真図版12参照）。

a. 土器（図27、写真図版16）

2012は須恵器杯B蓋で、口径16.0cmをはかる。直径約3.0cmの平坦なつまみをもつ。

2015は須恵器平瓶。体部の最大径が11.3cm、現存高が5.1cm、推定高が6.0cmと小形である。口縁部から頸部の約半分を欠損する。瓶部の上半には自然釉がかかる。

2013は土師器皿Aで、口径19.2cm、器高2.7cmと大形の皿Aである。底部外面にわずかにケズリの痕跡が認められる。

2014は土師器碗もしくは鉢で、口径19.2cm、器高6.2cmをはかる。体部外面下半にはケズリを、内面はハケ状工具でナデの後、ミガキ、さらに下半にらせん状暗文を巡らす。

b. 製塩土器（図27、写真図版20）

2016は製塩土器口縁部である。淡黄橙色でほぼ垂直に伸びる筒状の器形をもち、内外面ともにナデを施す。

97井戸の遺物は最下層出土の平瓶などは8世紀に遡る可能性をもつが、上層の遺物からは下限が9世紀初頭～前半となる時期が考えられる。

〔第2面23畦〕 調査区の中央を南北に通る畦である。土器、製塩土器などが出土した（図27、写真図版18）。

a. 土器

2021は土師器の甑把手であり、先端部がわずかに欠けるが、長さ8.0cm弱である。

2017は須恵器杯B蓋。2018・2019は須恵器杯Bの底部。2022は黒色土器A類碗で、23畦中では最新時期を示す。2020は土師器の罌釜口縁部である。

b. 製塩土器

2023・2024はともに製塩土器の胴部と考えられる。2024は内面にきわめて細かい布目圧痕がある。

〔第2面18井戸〕 調査区の西半で検出した蒸籠組みの井戸側をもつ井戸である。直径1.5m以上で深さも2m近く掘削したため、多数の遺物の出土をみた。遺物は上層と井戸枠の途切れたところ、掘方最下層の3箇所主に出土する。

a. 土器（図28、写真図版16・17）

2039～2045までは上層よりの出土である。2039は高杯杯部と思われる。口縁端部を内側に巻き込み、杯部内面には放射線状に暗文を巡らす。口縁付近にらせん状暗文はみられず、また、見込み部分も失われているため、暗文の有無は不明である。2040は土師器皿。内面に1段の放射状暗文を巡らす。

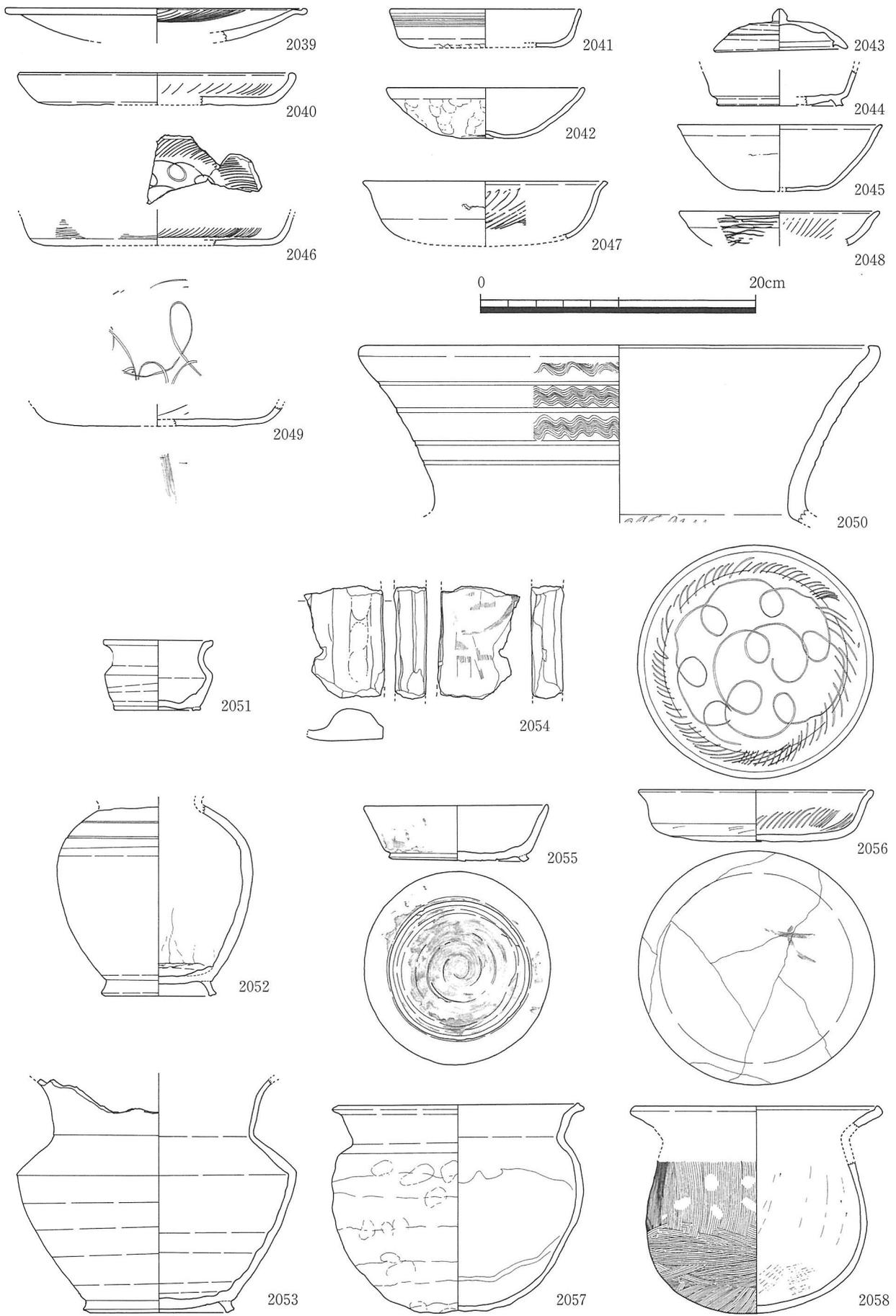


图28 18井戸出土土器実測图 (S = 1/4)

2043は須恵器杯蓋で、径が9.6cmと小さい。宝珠型のつまみをもつ。2044は須恵器杯Bで口縁部を失う。

2042は土師器椀で、口径14.4cm、器高3.8cmをはかる。底部や外面には強いユビオサエにより指頭圧痕が残る。2045は黒色土器A類椀で、口径14.9cm、器高4.9cmをはかる。高台をもたない。内外面とも剥離が著しい。

2050は方形木井戸枠内で出土した。須恵器大甕の口縁部で、4条の沈線とその間に3段の波状文を巡らす。頸部内面には整形時に頸を絞った痕跡が残る。

2046～2049までは井戸枠除去後、最下層までの掘削中に出土した。2046は黒色土器B類皿で、底部と体部のわずかのみ残る。内面見込みにはらせん状の、体部内面下半には放射線状の暗文がみられる。体部外面も下半までミガキがみられる。

2047～2049は土師器杯で、いずれも灰オリーブ色を呈し、小片である。2047は口径17.6cmと大きい。体部内面に放射状暗文をもつ。2048は口縁部がやや内傾する。体部内面には1段の放射状暗文をもつ。2049は底部のみの出土で、見込みにはらせん状の暗文を、また、外面には墨か煤かによる一文字状の痕跡が残る。

以下の遺物は井戸掘方最下層より出土した、一括性の高い遺物である。

2054は移動式竈の内面突帯付近の一部で、基部に近い部分と思われる。厚さ1.2cmの体部に、同じく厚さ1.2cm程度の突帯を縦方向に貼り付ける。内面にはタテハケメが残り、曲線状に黒い痕跡が残るが、これは墨書でなく、煤のこすれと思われる。

2051～2053はすべて須恵器壺である。2051は壺Bと呼ばれる小形の壺で、完形である。口径8.0cm、器高5.2cm、底径6.0cm。左回りの回転台成形だが、底部外面の調整などは粗雑で、厚みがあり、全体に不器用な作りである。

2052は、体部径に比して器高の高い壺Lの体部から底部で、頸部から上は意図的に打ち欠かされている。現存高14.1cm、底径7.7cmをはかる。高台は外方にハの字状に張り出すが、端面や底面の作りも粗雑である。内面底部も成形後の調整がきれいなになされず、全体的に粗雑な作りである。

2053は、壺Qである。口縁部が短く外反し、体部の最大径が中心より上方にある。口縁部端部がやはり花卉状に打ち欠かされていた。体部最大径が20.0cm、底径が11.0cm、現存高17.2cmをはかる。底部には高台の貼り付け痕が明瞭に残る。底部内面には自然釉のたまりがみられる。壺3点はいずれも平城Ⅲ～Ⅳ期前後に相当する。

2055は須恵器の杯Bで完形である。口径13.3cm、器高4.1cm、底径9.6cmをはかる。器形はひずみが大きく、正円形とはならない。口縁は外への傾きが強く、口縁端部は丸くおさめるなど、新しい様相をみせる。が、焼成がよく、全体に器壁が厚い事から平城Ⅲ期前後におさまると考える。

外面底部一面に丸く、また側面の一部に墨が飛沫して付着しており、硯に転用されていた事が分かる。ただし、底面はさほど摩滅していないので、硯として使用されたのは短期間であろう。

2056は土師器杯で、ほぼ完存していた。にぶい黄褐色を呈し、口径16.9cm、器高3.8cmをはかる。口縁部は屈曲して、外に張り出す。口縁端部は丸くおさめる。外面はナデの後ヘラケズリを施す。内面はナデの後、体部に1段放射線状の暗文を、見込みには2周する、らせん状の暗文を巡らす。

外面底部に墨書による文字が認められた。文字は2本の線を交差させており、「七」もしくは「入」と読める。

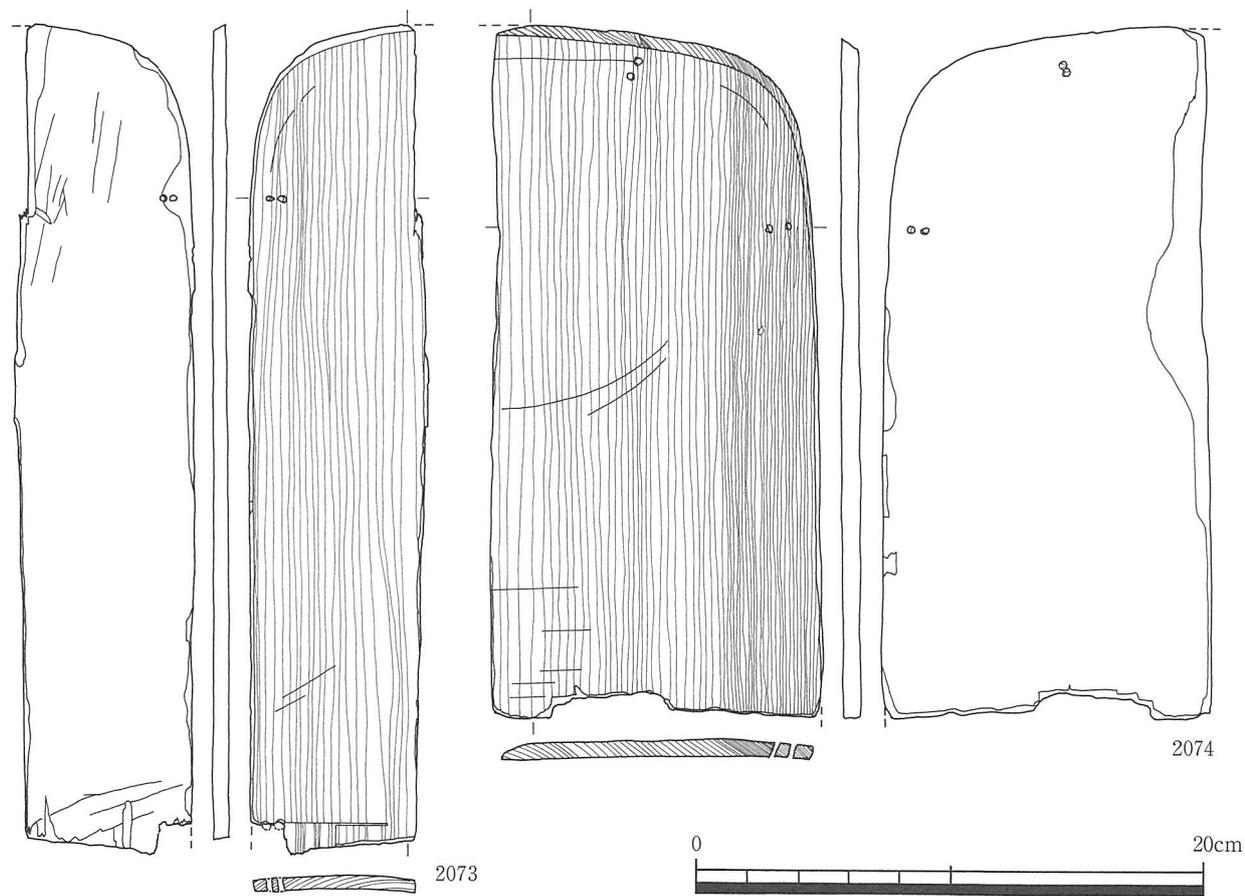
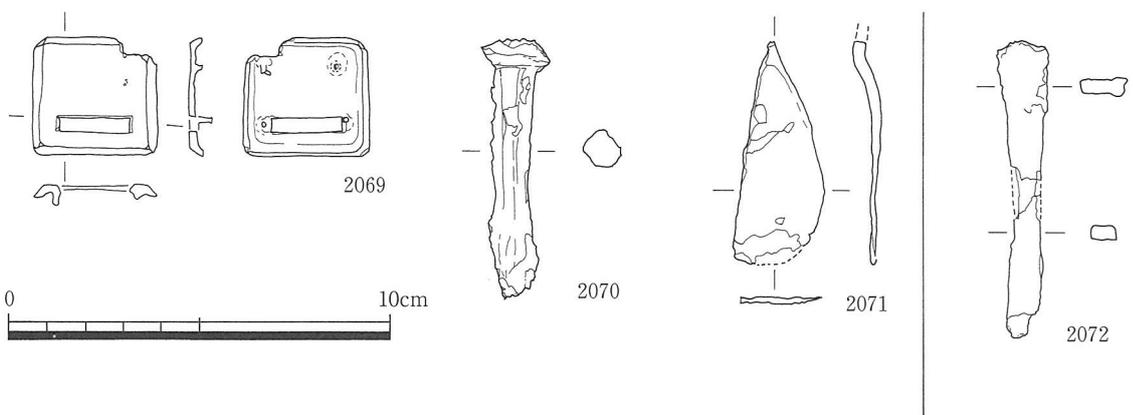
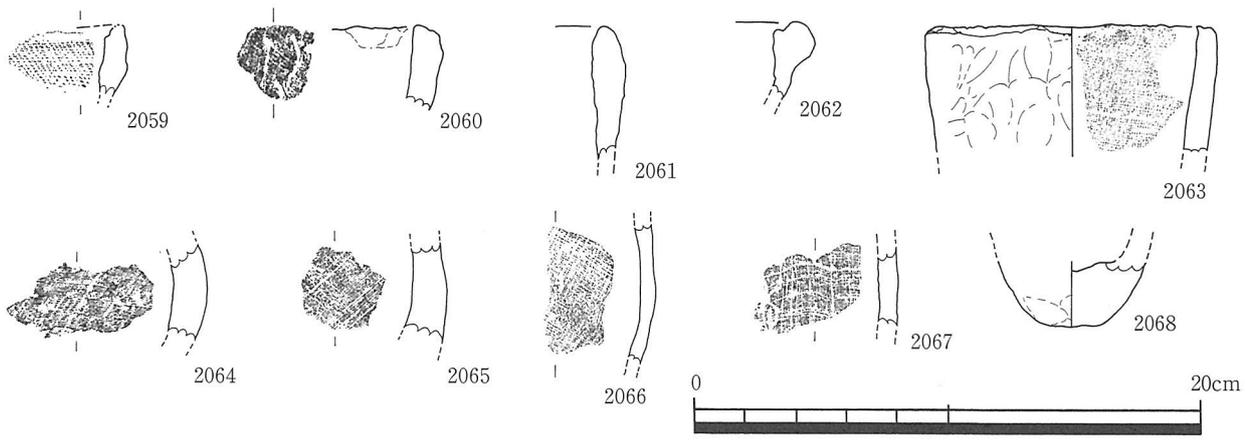


図29 18井戸他出土製塩土器・金属製品・木製品実測図 (S = 1/3・1/2)

2057・2058は土師器甕である。このうちの2057は南河内型の甕で、ほぼ完形である。口径17.4cm、器高15.5cmをはかる。口縁部は短く端部は平らである。体部外面は粘土紐の継ぎ目を指でナデ消すが、指頭圧痕が残り、凹凸が著しい。外面は口縁部から底部まで均一に煤が付着する。体部内面はナデ。

2058は体部はほぼ残るが、口縁部はごく一部のみの出土である。口縁部は内側に巻き込む。体部は外面上半がタテハケ、下半がヨコハケと斜め方向のハケ、内面がケズリの後、底部にハケ状工具によるナデが認められる。外面には一面に煤が付着する。

18井戸の土器は最下層の土器群が8世紀中頃から後半におさまる。上層の土器の下限は9世紀初頭～前半頃と考えられる。この井戸の開始と廃絶の時期を示すといえるだろう。

b. 製塩土器 (図29、写真図版18)

18井戸中より、製塩土器が20点弱出土した。いずれも小片で、出土は上層から方形木枠の井側内まで限定されるようである。部位の分かるものなど、10点を図化した。

2059～2063は口縁部片である。口縁端部は未調整状で、体部からほぼ垂直に伸びる、筒状の器形をなすと思われる。内面に布目の残るものと、ナデのものがある。最も大きな2063は外面に指頭圧痕が残り、内面は細かな布目をもつ、玄界灘周辺に多くみられる製塩土器である。

2064～2067までは胴部。前2点は器壁が厚く、やや器形が丸みをもつ。後2点は2063に近いタイプである。2067などは布の合わせ目跡が残る。2068は内面に布目痕をとどめる底部で、外面には火を受けた痕が残る。底部の出土は珍しい。

古代の焼塩用製塩土器は、(財)東大阪市文化財協会45次調査でも一定量出土している。畿内では8世紀後半の時期を中心にして増加し、河内平野中部でも流通する。本遺構でのあり方は近畿地方での製塩土器の流通、消費の一般的傾向と合致する。

c. 金属製品 (図29、写真図版18)

金属製品は10点弱出土しているが、そのうち遺存状況の良い4点を図化した。

2069・2070は18井戸上層、2071は18井戸下層からの出土である。

2069は帯金具の巡方の表金具である。やや横長の矩形で、長さ3.1cm、幅3.3cm、材の厚さ2mmをはかる。下寄りに長方形のスカシ孔を持ち、周縁を面取りする。裏面の四隅には鋌足がつく。材質は銅か。(財)東大阪市文化財協会の第45次調査でも同様の金属製巡方が出土している。

2070は鉄釘で、錆が激しいが、頭は方形もしくは菱形である。長さ6.9cm、脚幅1.0cmで、脚の断面は正方形になる。

2071は薄い滴形の板で、最大長5.9cm、最大幅2.2cm、厚さ3.5mmをはかる。滴の尖った先端は失われているが、細い幅で更に伸び、やや湾曲することから匙になる可能性もある。

d. 木製品 (図29～31、写真図版19～21)

2073・2074は18井戸の井戸枠内より出土した。曲物・折敷などの容器底板にあたると思われる隅丸長方形の板である。

2073は残存長32.7cm、残存幅7.0cm、厚さ0.6cm。2074は残存長27.4cm、残存幅12.9cm、厚さ0.7cmをはかる。どちらも下方及び左右の一部は欠損する。角を丸めた円弧の終点付近に、2073は1箇所、2074は2箇所穿孔がみられる。どちらも平行する2つの小孔をもつ。小孔は、おそらく底板と側板を結合させるためのものであろう。

大きさ、板の材質、穿孔の箇所などから、両者は同一個体と考えられるが、それぞれの割れている箇

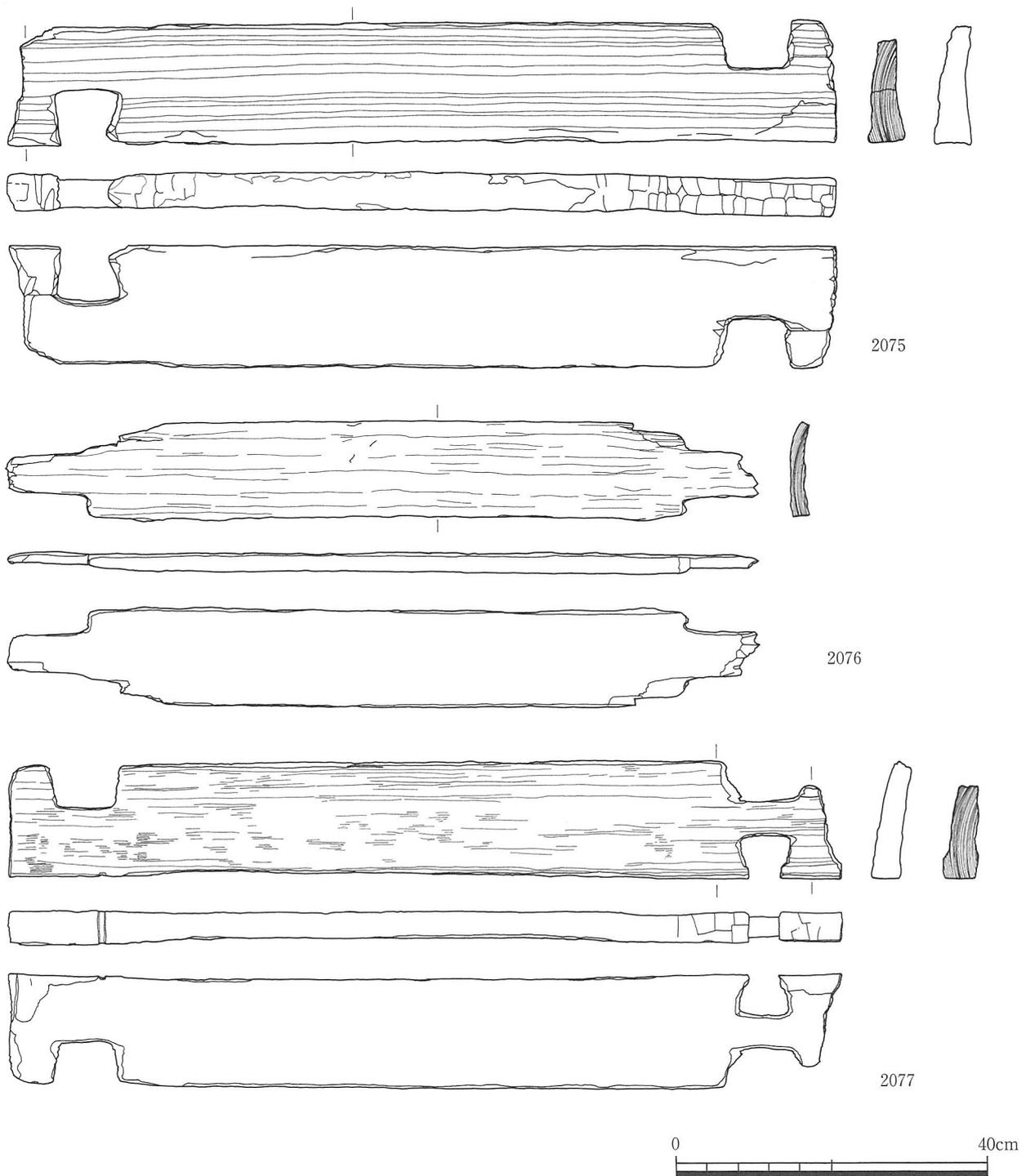


図30 18井戸枳板実測図-1 (S=1/8)

所に接点は見いだせなかった。間に幅10cm程度の板材が入ると考えられるが、該当する板材は出土していない。側板も不明である。ただし、両者は出土地点が異なり、2073が井戸最下層から出土したのに対し、2074は井戸側検出時に枳板の4段目（最下段）の井戸枳内より出土している（図22・23参照）。

同様に端に穿孔をもつ板2093・2094が井戸の井側内から出土している（図22）。2093は残存長約34cm、幅12cm、厚さ6cm。2094は残存長34cm、幅20cm、厚さ3cmをはかる。2093と2094は規格が似るため同一個体の可能性もある。2093は1箇所の、2094は3箇所の穿孔をもつ（写真図版21）。容器底板の一部と考えられる。

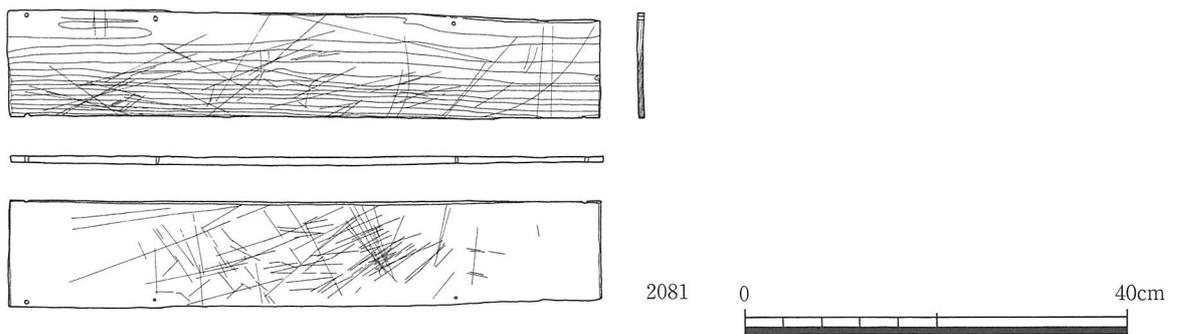
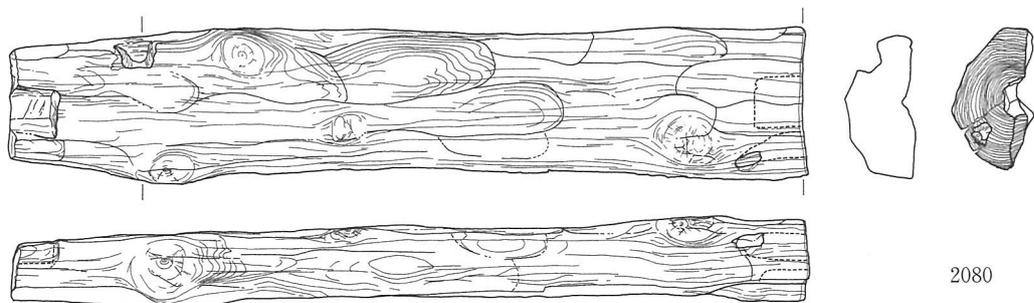
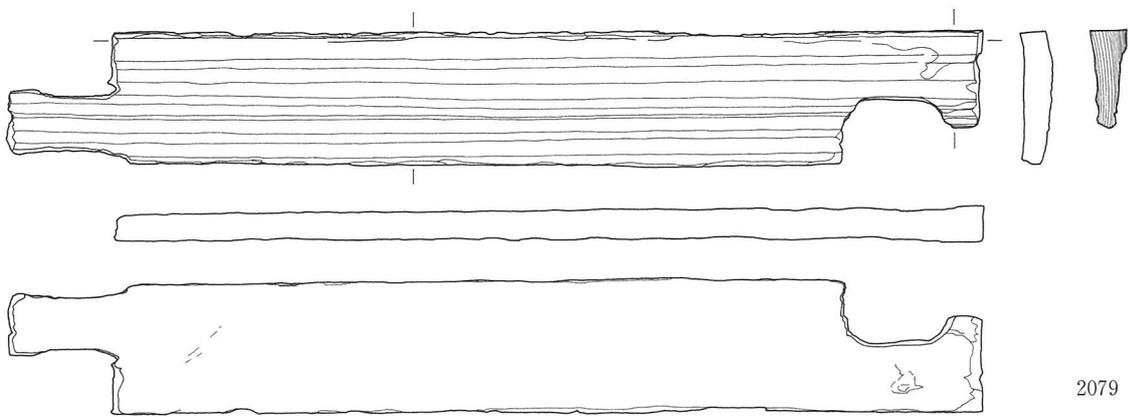


图31 18井戸枳板実測図-2 (S = 1/8)

2075～2081は蒸籠状に板を組み合わせた、18井戸の枳板である。18井戸は一辺に3～4枚の板を使用し、それらを方形に組み合わせていた。組み合わせるために板の両端に凹凸状の加工を施しているのが、特徴である。枳板の一部しか図化・写真掲載できなかったため、各板の大きさや特徴は表にまとめた(表1)。

2075は東側の上から2段目の枳板である。長さ約1m、幅約15cm、厚さ約5cmで、両端に上下互い違いになるよう、凹状の約10cm四方の切れ込みをもつ。枳板を順番に並べていき、1段目と2段目、あるいは2段目と3段目の切れ込み間に南北の枳板を通す仕組みである。板は鎌などで加工されたものか、表裏面や特に側面に加工痕が認められる。

2076は西側の上から2段目枳板である。厚さが約2cmと他の枳板に比べ、やや薄く、板全体もやや収縮している。両端は長さ12cm、幅5cm程度の凸状に加工される。

2077は西側の上から3段目枳板である。2075と同じく、上下互い違いに凹状の切れ込みを入れる。ただし、左端は下方に切れ込みが入り、上部は平坦な面ままであるのに対し、右端は上方・下方それぞれに切れ込みが入り、H形を呈する。

2078は南側の上から2段目枳板である。同じ方向に凹状の切れ込みをもつ。南側の上から1段目は欠損が激しかった。

2079は北側の上から2段目枳板である。上下互い違いに切れ込みを有する点は、2075・2077などと同じであるが、西側が凹状、東側が凸状になっている。

2089は西側の上から1段目枳板である(写真図版19)。欠損していたが、おそらく両端は凸状に加工されていたと思われる。

2090(写真図版19)は西側の上から4段目枳板として取り上げたが、大きさ(長さ55cm程度)からみて、むしろ2091や2081のような最下段の基礎材と考えた方が良からう。

2080・2081は枳板の最下段に内側から当てられていた、井戸枳設置のための基礎材であろう。

2080は北側4段目枳板の内部から当てられていた丸材である。丸太を半裁して平らな面を下にして据え置かれていた。長さ83cm、直径16cmをはかる。樹皮をはいで、丸太部分に斧状の工具によるケズリ痕跡がみられる。先端をやや尖らせる。上方は材木の中心と外方に各1箇所、下方も中心と外面各1箇所の計4箇所に長方形の穴をもつ。穴は長辺7～8cm、短辺4cm程度で貫通しない。井戸側を構築するのに、この穴を使っていた形跡は検出状況からみてとれなかった。従って、元来建築部材などとして穴の加工をもつ丸太材を転用して使用したと考えるのが、妥当であろう。

2092(写真図版20)は南側最下段枳板の内部から当てられていた丸材である。丸太を半裁してあることや、大きさも2080とほぼ同じであることから、両者の切断された面同士を合わせたところ、全く一致した(写真図版20)。従って、2080と2092は1本の丸太を切断して使用していることが判明した。2092も外面や中心などに数箇所穴を有する。

2081は北側最下段枳板の外部に沿って当てられていた板材である。長さ62.3cm、幅11.2cm、厚さ0.8cmの長方形の板材で、片面には刃物などによる傷跡が多数残る。長辺の端に5箇所の小孔がみられる。また、側面にも4箇所の木釘穴痕跡が認められる(写真図版20下参照)。何枚かの同規格の板をつないでいたと思われる。2080同様転用材であろう。

2091(写真図版20)は東側最下段枳板の内部から当てられていた板材である。長さ63cm、幅13cm、厚さ2.3cmと大きさ、材質とも2081に似る。

2081と2091も元来は複数の板をつなぎ合わせて作られた製品を、井戸枠設置の基礎材として転用されたものであろう。

2075～2079・2081・2089～2091の18井戸側材はすべて板目取りで作られている。また、すべて厚さも均質で丁寧な加工が施されていると言える。

2095（写真図版21）は、井戸枠板を内側から支えていた杭である。枠板の四隅、交点やその中間点数個所を、長さ約1 mに及ぶ杭を垂直に差し込んで支えとしていた。その多くは取り上げ時に欠損した。

e. 石（写真図版18）

3点とも18井戸の上層より出土した。

2086は小形の直方体の石で現存長6.5cm、幅・厚さ2.4cmをはかる。側面4面を面取りされており、上面の一部は斜めに面取り加工されている。一面のみ、斜行する上下端2箇所に断面三角形となる切れ込みを施してある。石錘などの加工途中品であろうか。目の細かい砂岩である。

2087は結晶片岩の扁平な石である。現存長約14cm、幅約7 cm、厚さ3.5cmをはかる。2088は現存長15 cm、幅・厚さ約6 cmをはかる。花崗岩質である。

2087・2088は自然石と思われる。ただし、遺構の状況からも自然石を入手するのは難しく、やや離れた場所からもたらされたと考えられる。

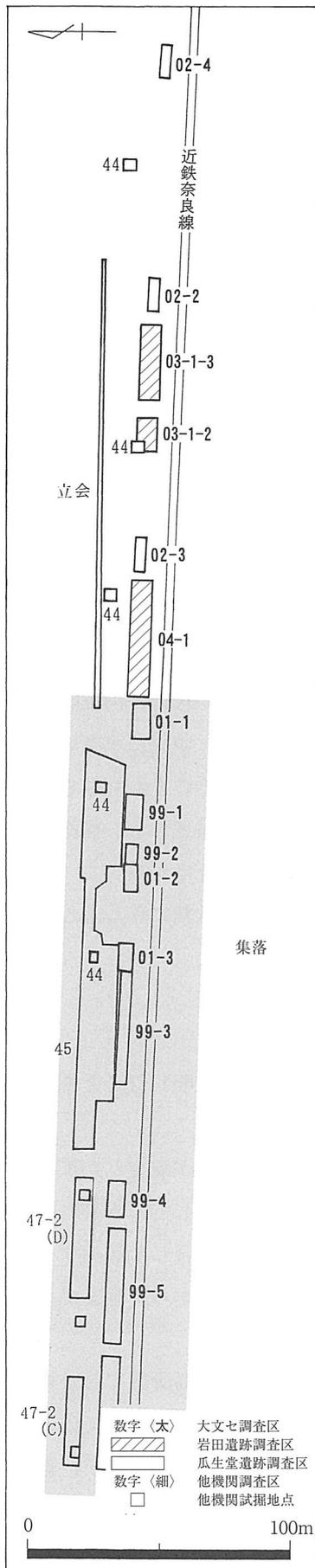


図32 中世遺構面全体図 (S = 1/2500)

3) 中世以降

①遺構 (図32)

中世については、既往の瓜生堂遺跡の調査で、岩田04-1区の西側に近接する01-1区までは集落域が存在することが明らかになっている。中世集落域は広範囲にわたり、その時期も平安時代末から15世紀後半までと長期間にわたって、小規模な集落が点在し、その場所も移動することが判明している。隣接する瓜生堂遺跡01-1区をみると、中世でも主に13世紀の遺構・遺物が検出されている。

また、04-1区東側の瓜生堂遺跡02-3区以東では、畦畔や島島などが検出されており、生産域と位置づけている。

従って、今回調査する04-1区の中で、集落域と生産域の境界が存在するはずであり、この境界を検出し、中世集落域の範囲を確定することが、今回の調査の大きな目的の一つであった。

しかしながら、04-1区の古代～中世相当の遺構面では、主に平安時代前半の集落と考えられる遺構が検出され、中世期と断定できる遺構は皆無である。機械掘削を行った際、調査区西南部で微高地を検出、この高まりとベースとなる層に中世から近世期の遺物が含まれていたため、これを中世以降面と認識して、第1面とした。しかし、遺物の含有量も少なく、そのほとんどが細片である。

これらのことから、04-1区においては中世集落域はほとんど存在せず、集落の範囲は01-1区ではほぼおさまると考えるのが妥当であろう。では、生産域に含めるかという点第2面の東半で検出した畦畔などが相当する可能性もあるが、明確な時期決定の決め手を欠く。そこで、あえて生産域には含めず、遺構の希薄な地域として捉える。

第1面の詳細については、以下でみていく。

a. 第1面 現地表から約0.7m下までは、近現代の盛り土で覆われていることが確認調査等で判明していた。そこで、下層を注意深く観察しながら、重機によって盛り土を除去していくと、調査区中央から西半の約10m強の範囲で、中心より南側で島状の高まりを検出した (図33)。

高まりは平坦面との差は20cm程度で、当初は島島になるかと想定したが、断定できなかった。調査区中央より東側でも若干の微高地を形成しており、自然地形の高まりとみなした。

やや酸化し、砂礫を含む淡褐色シルト層をベースとし、高まり

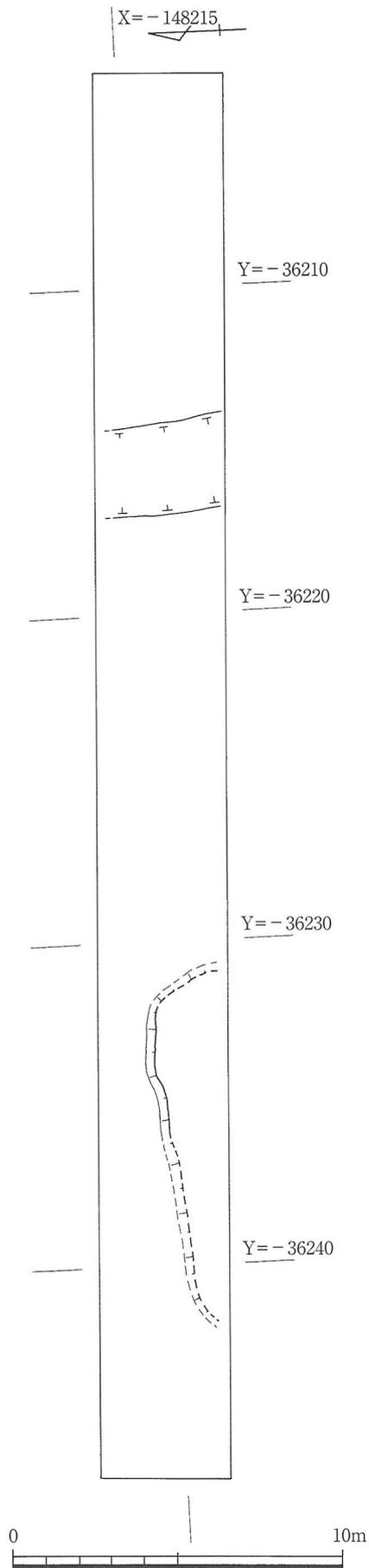


図33 第1面平面図 (S = 1/200)

部分はこの層が攪拌を受けている。層中には中世の瓦器や瓦質土器、土師器、瓦、近世陶磁器の細片が含まれている。よって、第1面は中世以降、近世に至る遺構面と判断した。

②遺物 (図34)

〔第1～4面間出土〕 土器は2点のみ実測したが、これ以外にも瓦器や瓦質土器、平瓦、染付磁器などが出土している。

2082は国産の天目茶碗で、口径11.7cmと小ぶりである。

2083は染付磁器碗である。口径7.2cm、器高5.7cm、底径3.8cmをはかる。筒状の体部をもち、体部外面に2段の宝珠状の文様を、内面見込みにも同じ文様が1つ入る。高台にも1条の線文が入る。18世紀後半以降の所産と考えられる。

2084は側溝からの出土であるが、第1～3面に相当する。2084は板状木製品で、長さ7.9cm、最大幅4.0cm、厚さ8mmをはかる。一端は丸く加工され、もう一端は長さ2～3cm、幅4mmの切れ込みが3箇所入り、4本の櫛の歯状をなすが、1本は欠損する。

2085は第1面上面からの出土。半円形の板で、円板が割れたものでなく、半円形で、周縁を面取りする。中央に小さい孔を穿つ。表面は3本の線が筆状のもので描かれ、その上からさらに緑色に着色される。裏面も端部が緑色塗料が塗布される。側面には2箇所の釘穴をもつ。直径6.9cm、厚さ0.9cmをはかる。

2点とも用途は不明である。2084は下駄箱に差し込む鍵に形状が似る。

(3) 小結

岩田遺跡の2004年度の調査を通じて、判明したことを簡単にまとめる。

1999年度から2002年にかけて当センターが調査した瓜生堂遺跡の01-1区より東の調査区は、遺跡範囲としては本来岩田遺跡に属するものであった。そこで、両遺跡を総合して記述する。

今回の調査は、調査対象時期が主に古代から中世までであったが、以下簡潔にまとめる。

古代 瓜生堂遺跡のこれまでの調査で、局所的にしか検出されていない古代の集落を検出した。岩田遺跡としては、古墳時代より新しい時期の遺構はほとんど確認されておらず、貴重な検出例である。

しかも、古代の遺構の中には7世紀から8世紀代の遺構を含む。

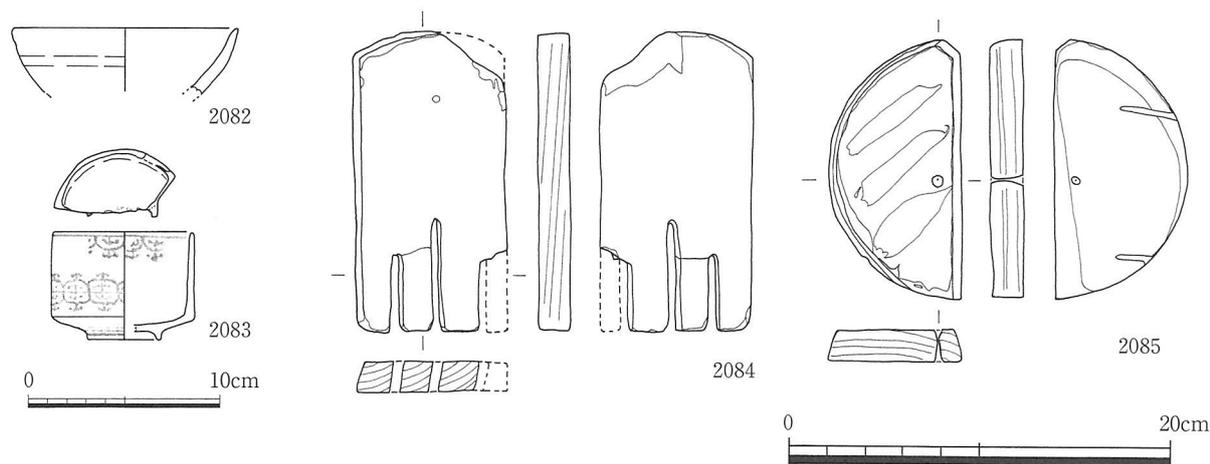


図34 中世以降遺構面出土遺物実測図 (S=1/4)

瓜生堂遺跡北東部の古代集落 (01-1区・45次区) では、9世紀後半から10世紀を主体とすると考えられていたため、それに先行する集落の存在が明らかになったのは大きな成果である。

また、遺物についてみると、第2面で検出した18井戸の最底部より出土した、8世紀中頃から後半を示す土器の一群は一括性が高く、平城Ⅲ～Ⅳ型式の中河内における良好な資料となりうる。18井戸からは土器の他にも金属製の帯金具 (巡方) や匙状の金属製品も出土しており、これらを所有することから、この集落の性格が単なる農村にとどまらず、官人層に関連した居住地や施設などの存在も考えられる。

同様に、第3面の69土坑出土の土器も一括性が高く、7世紀代の資料として貴重であろう。

中世 中世におけるこの地域の集落域が、04-1区まで及ばず、その西で途切れることが判明した。岩田遺跡の南端部においては、中世期の生活痕跡は希薄であることがわかった。

近鉄奈良線の立体交差化にともなう発掘調査として、八戸ノ里駅から若江岩田駅間で行ってきた一連の瓜生堂遺跡・岩田遺跡の調査は、この04-1区の調査をもって一応の終了をみた。東西約1kmにわたる調査によって、遺構を検出した以外にも連続した地層の堆積状況なども判明したが、それについては第6章のまとめの部分に譲りたい。

〈参考文献〉

- (財) 大阪市文化財協会 1999 『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- (財) 大阪府文化財センター 2004 『瓜生堂遺跡1』
- (財) 大阪府文化財センター 2004 『瓜生堂遺跡2』
- 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会編 1996 『古代の土器4 煮炊具 (近畿編)』
- 近藤義郎 1984 『土器製塩の研究』 青木書店
- 近藤義郎編 1994 『日本土器製塩研究』 青木書店
- (財) 東大阪市文化財協会 1999 『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』
- 日本塩業大系編集委員会編 1978 『日本塩業大系 史料編 考古』

第3節 2003年度の確認調査

(1) はじめに

瓜生堂遺跡2002年度の調査では、T.P. -2.0m~-1.3mの深度において、層厚20cm~50cmの弥生時代前期包含層が検出されている。この層は東に向かって高くなり、02-4区では、前期水田が存在する可能性が指摘された。また、02-4区第6面では、12世紀頃の水田に関連する小溝が検出された。若江岩田駅から東は、周知の遺跡の範囲外であったが、02年度の調査結果から、遺跡の範囲がこの付近にも広がると予測されたことから、その範囲を確認し、埋没深度のデータを目的とした確認調査を行うこととなった。

調査は、岩田遺跡03-1-2・3区の調査終了後、平成15年11月26日から平成16年2月27日の間実施した。

若江岩田駅の東側、花園駅までの約600mの間に、3.2m×8.0mの調査区を3箇所設定、鋼矢板を打設した後、盛土・旧表土層を重機で除去し、GLから-5.0m付近まで調査を行った。

調査名は「岩田遺跡隣接地確認03-1」、各調査区名は、西から確認03-1-1区、確認03-1-2区、確認03-1-3区とした(図35)。

当該地区の東には、10世紀以降に天井川化したとされる古玉串川が北流し、玉串川はさらに吉田川と菱江川に分流する。また、西の若江岩田駅付近は、「小阪合分流路」から分岐した「萱振分流路」が推定されており、後背湿地特有の複雑な堆積環境下に立地している。しかし、調査区が小規模なうえに、相互に100m前後の距離があるため、層序・遺構面の認識は調査区ごとに完結させた。

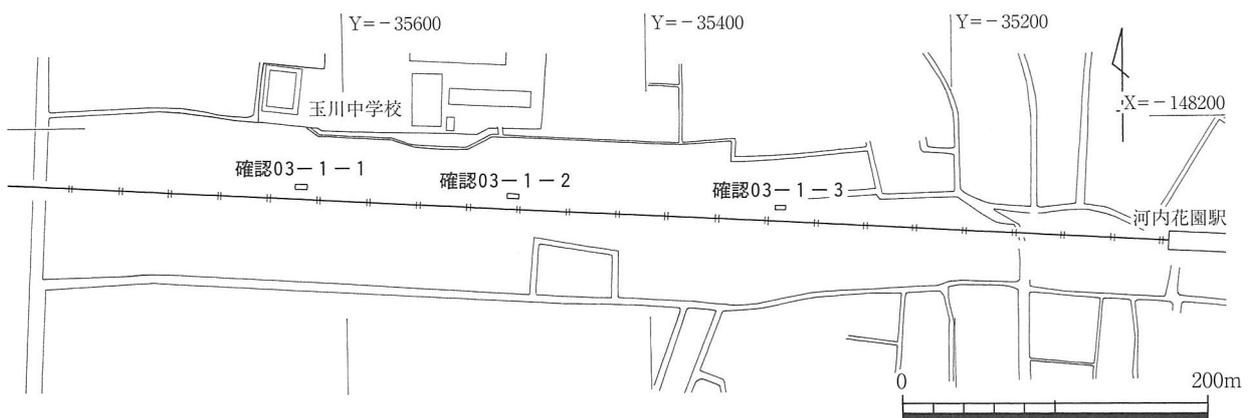


図35 確認調査区位置図 (S = 1/5000)

(2) 03-1-1区 (図36、写真図版13)

1) 基本層序

第1層 T.P.3.9m~2.7m。細粒砂・中粒砂を含む青灰色~黄褐色砂質シルトの作土層で、12層に細分できる。層上部には鉄分やマンガンの沈着が顕著で、層界には砂粒やシルトのラミナの薄層を挟在する。各層は平均層厚10cm、ほぼ水平な堆積状況を示す。下部には、島島状の高まりが見られる(1-8層~1-10層)。

出土遺物はなく各層の時期を特定するまでには至らない。

第2層 T.P.2.7m~2.2m。第1層との層界には細粒砂~中粒砂の薄層が堆積する。3層に細分できる。2-1層上面からは、東西方向の小溝群を検出した。溝は複雑に重複する。2-1層の下部は粘土質シルト~極細粒砂層で不明瞭ながらラミナが見られる。2-3層は比較的明瞭なラミナが見られる細粒砂層で、西側に向かって粘土質シルトに側方変化する。溝および層からは遺物が出土しなかった。

第3層 T.P.2.5m~2.1m。細粒砂・中粒砂を少量含む暗緑灰色粘土質シルト層。層上面は西に向かって下がる。2層に細分できる。下層は粘性を帯び、中粒砂や粘土の小ブロックを少量含む。

第4層 T.P.2.1m前後。暗緑灰色粘土質細粒砂層で、2層に細分できる。層の下面は、下層流路廃絶面窪みの影響で凹凸が見られる。

第5層 T.P.2.0m。流路内堆積物を一括する。2層に大別される。上層は、緑灰色粘土質極細粒砂で、西に向かってシルトに変化する。下層はラミナが顕著な中粒砂~粗粒砂層。流路底面は、T.P.0.9m。遺物は全く出土しなかった。

第6層 T.P.2.0m~1.3m。灰色粘土質シルト層で、2層に細分できる。上層は灰色を、下層は暗オリーブ灰色を呈す。層中には、未分解の植物遺体の薄層を多数挟在する。粘性を帯びたシルトと中粒砂~細粒砂の互層となっている。トレンチの中央では中粒砂が卓越する。層の下面は緩やかに東に向かって下降する。

第7層 T.P.1.3m~0.8m。2層に細分できる。上層は灰色粘土からなる。踏み込み状の凹凸が見られた。下層はオリーブ灰色シルト質粘土からなる。どちらも未分解の植物遺体を含む。

第8層 T.P.1.0m~0.2m。暗オリーブ粘土質シルト層で、7層に細分できる。上面には細粒砂~中粒砂で埋まった小ブロック状の窪みが見られる。全体に粘性を帯びた水平堆積層で、層中には、未分解の植物遺体やシルト~細粒砂のラミナの薄層を多数挟在する。遺物は全く出土しなかった。

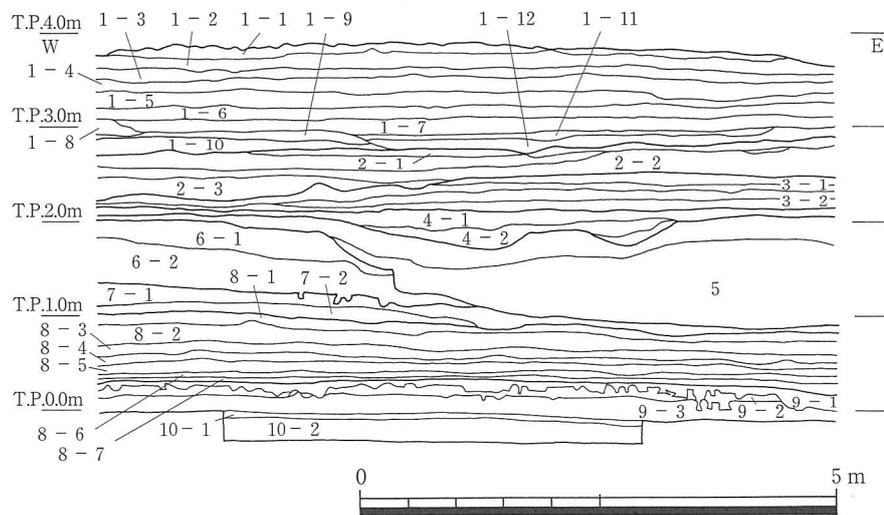
第9層 T.P.0.2m~0m。3層に細分できる。9-1層は、中粒砂を含む黒色シルトの土壌化層で、やや粘性を帯びる。地震による変形構造が見られた。9-2層は暗緑灰色砂質シルトで、浅黄色細粒砂をブロック状に含む。9-3層は暗青灰色シルト質粘土層。9-1層と9-2層の層界で、古墳時代後期と推定される須恵器や土師器の細片が数点出土した。

第10層 T.P.0m~-0.3m。下層確認のため、東西5m×南北0.3m×深さ0.4mのトレンチを設けた。2層に細分できる。上層は細粒砂・粗粒砂を含む黒色粘土層で、灰色粘土をブロック状に含む。下部は、極細粒砂~粗粒砂層で、ラミナが顕著にみられる。遺物は全く出土しなかった。

2) 遺構

T.P.0.1m前後の9-2層上面で、小溝、ピット等を検出した(図37・38)。

4本の小溝は、幅30cm 深さ10cm前後で、東西方向に併行し、東端はほぼ揃う。約1.8m隔てた東側



第1層	1-1: 青灰	5BG6/1	シルト・極細粒砂 (グライ化)
	1-2: 黄褐	2.5Y5/3	粘土質シルト 極細粒砂をわずかに含む 若干粘性有り 1-1との層界に鉄分の沈着する薄層が見られる
	1-3: 黄褐	2.5Y5/3	極細粒砂 下部に部分的にラミナが見られる
	1-4: オリーブ褐	2.5Y4/3	粘土質シルト 1-5との層界に細粒砂やラミナの薄層が見られる
	1-5: にぶい黄褐	10YR4/3	粘土質シルト
	1-6: にぶい黄褐	10YR5/3	粘土質シルト 1-5より粘性・しまり有り
	1-7: 褐	10YR4/4	シルト質粘土 比較的均質で粘性有り 1-6との層界不明瞭
	1-8: 暗灰黄	2.5Y5/2	粘土 極細粒砂を若干含む
	1-9: 暗灰黄	2.5Y4/2	シルト 細粒砂を含む 鉄分沈着 鳥島耕土
	1-10: 暗緑灰	10GY4/1	粘土質シルト 細粒砂・中粒砂を多く含む 鳥島耕土
	1-11: オリーブ褐	2.5Y4/3	粘土質シルト 極細粒砂・細粒砂を含む 鳥島間耕土
	1-12: 暗灰黄	2.5Y4/2	極細粒砂 細粒砂・中粒砂を若干含む 若干粘性有り (ラミナ)
第2層	2-1: 細粒砂~粗粒砂 (ラミナ)		
	2-2: 暗緑灰	5G4/1	シルト 粘性やや有り しまり無し
第3層	2-3: オリーブ黄	5Y6/4	細粒砂
	3-1: 暗緑灰	5G4/1	シルト 上部は粘性やや有り 中粒砂をわずかに含む 下部は灰オリーブ7.5Y5/3細粒砂をブロック状に含む
第4層	3-2: 暗緑灰	10GY4/1	粘土質シルト 下部は細粒砂をやや含む
	4-1: 暗緑灰	10GY4/1	粘土質細粒砂~極細粒砂 下部は粘土をやや多く含む
	4-2: 緑灰	10GY5/1	粘土質細粒砂 上部は粘土を、下部は細粒砂をやや多く含む
第5層	流路内を一括	緑灰7.5GY5/1	粘土質細粒砂 上部は粘土をやや多く含む
第6層	6-1: 灰	7.5Y4/1	粘土質シルト 極細粒砂~細粒砂のラミナ薄層や未分解の植物遺体の薄層を挟在
	6-2: 暗オリーブ灰	5GY5/1	粘土質シルト 灰色極細粒砂~シルトのラミナ薄層や未分解の植物遺体の薄層を挟在
第7層	7-1: 灰	10Y4/1	粘土 下部に植物遺体をやや多く含む
	7-2: オリーブ灰	2.5GY5/1	粘土 シルトをわずかに含む 植物遺体を含む
第8層	8-1: 暗オリーブ	5GY4/1	粘土質シルト 植物遺体を含む 細粒砂の薄層が見られる
	8-2: 暗オリーブ	5GY4/1	シルト質粘土 上部はシルトをやや多く含む 植物遺体を含む
	8-3: 暗青灰	10BG4/1	粘土質シルト
	8-4: 暗オリーブ灰	5GY4/1	粘土質シルト 植物遺体をやや多く含む
	8-5: 暗緑灰	10GY3/1	シルト質粘土 植物遺体を含む
第9層	8-6: 暗緑灰	10GY3/1	粘土 シルトを若干含む 植物遺体を含む
	8-7: 暗オリーブ灰	2.5GY3/1	シルト 粘性やや有り しまり有り 植物遺体を含む
	9-1: 黒	10Y2/1	シルト 粘性やや有り しまりやや無し 植物遺体を含む 土壌化層
	9-2: 暗緑灰	10GY4/1	細粒砂 中粒砂を含む 浅黄7.5Y7/3細粒砂をブロック状に含む 植物遺体を若干含む
第10層	9-3: 暗青灰	5BG4/1	シルト質粘土 上部は細粒砂が混じる 植物遺体を含む
	10-1: 黒	10Y2/1	粘土 細粒砂・粗粒砂を含む 灰粘土をブロック状に含む 土壌化層
	10-2: 灰	10Y4/1	極細粒砂・細粒砂 (東) ~中粒砂・粗粒砂 (西)

図36 確認03-1-1区 北壁断面図 (S=1/80)

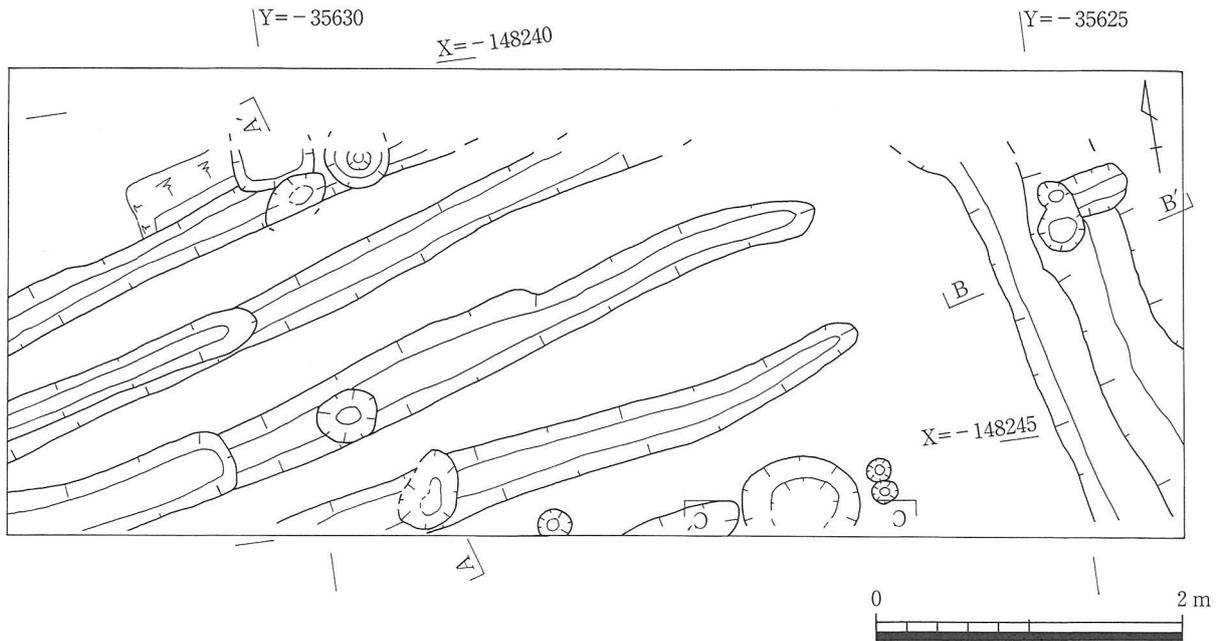


図37 第9-2層上面平面図 (S = 1/50)

には、溝と直交する南北方向の落ち込みが検出された。落ち込みは、深さ20cm、幅3m以上で、2段になって東にさらに下がる。限られた面積の調査区であるが、東西方向の溝は、耕作に伴うものと推定される。

ピットは、掘方がしっかりしているものもあるが、大半が不定形で規則性が窺えないことから、掘立柱建物を構成したとは考えにくい。遺構からは遺物は出土しなかったが、層中の遺物から古墳時代後期の面と考えられる。

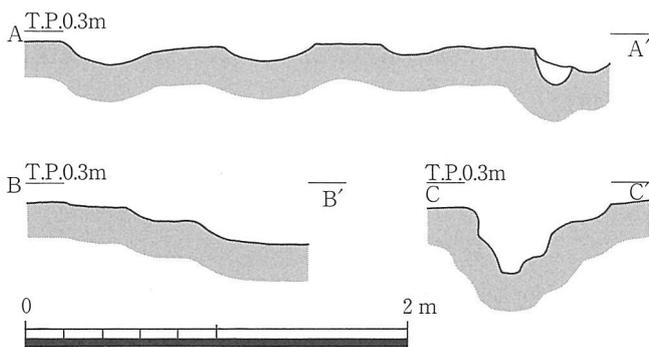


図38 第9-2層上面遺構断面図 (S = 1/40)

(3) 03-1-2区 (図39、写真図版14)

第1層 T.P.4.0m~3.5m。灰黄褐色砂質シルトからなる作土層で、5層に細分できる。各層とも細砂・中砂を多く含む。平均層厚0.2mで、ほぼ水平方向に堆積する。酸化鉄や酸化マンガンが沈着する。1-4層は、島畠状の高まりで、1-5層は島畠間の作土層と考えられる。1-2層からは、体部外面に花文のスタンプを捺印した瓦器浅鉢の細片が、

1-4層からは、近世陶磁器の細片が出土している。全体に遺物点数が少なく、詳細な時期を特定するまでには至らない。

第2層 T.P.3.5m~3.0m。細粒砂を含む緑灰色シルト層で、東側の下部は下層流路廃絶面の窪みに堆積し、若干の凹凸が見られる。4層に細分できる。全体の層厚は、西側で20cm、東側で60cm。2-1層は、上部にラミナが見られる細粒砂~中粒砂層、下部はラミナが不明瞭な粘土質シルト層で、層界は不明瞭。遺物は出土しなかった。

第3層 T.P.3.4m~3.0m。中砂・細砂を少量含むオリーブ灰色シルト質粘土層。鉄分の沈着が顕著

で、ラミナは明瞭には認められなかった。全体に粘性をおびる。層厚は東側で厚く、0.3m～0.4m。遺物は出土しなかった。

第4層 T.P.3.4m～2.6m。トレンチ東側の第6層上面で検出された流路が埋没した後の低地部分を中心に堆積する砂質シルトからなる層で、4層に細分できる。4-1層から4-3層は中砂・細砂を多く含む土壌化層で、4-4層はラミナが明瞭な極細砂～中粒砂層である。4-4層上面では、4-3層を埋土とする、南北方向の幅0.5m前後の溝を1条検出したが、遺物は出土しなかった。4-3層からは、13世紀代と思われる土師器皿の細片と瓦質の鉢の体部片が数点出土した。

第5層 T.P.2.6m～1.8m。第6層上面で検出した流路内の堆積物を一括する。流路は、左岸側約2.8mを検出した。深さは0.9mで、底面はT.P.2.8m。中砂・細砂を主体とし、ラミナが発達している。最上部は攪拌されて土壌化が進行している。また、最下部には、植物遺体を含むシルト質粘土層が形成される。遺物は全く出土しなかった。

第6層 T.P.3.0m～2.8m。中砂を少量含む暗緑灰色粘土層。層厚20cm前後で、東側は流路内に垂れ込む。流路肩部付近は、極細砂・細砂を含む砂質土壌に変化するが、その層界は不明瞭である。遺物は出土しなかった。

第7層 T.P.2.8m～2.4m。暗緑灰色粘土層で、3層に細分できる。上面で流路を検出した。上部7-1層は、極細砂を少量含み、また、径0.3cm～0.5cm大の緑灰色粘土のブロックを含む土壌化層である。土壌化は弱い。7-2層以下は、砂粒を殆んど含まない均質な粘土層で、7-2層と7-3層との間には、緑灰色粘土の薄層（層厚0.2cm～0.4cm）が挟在される。出土遺物がなく、時期を特定することはできなかった。

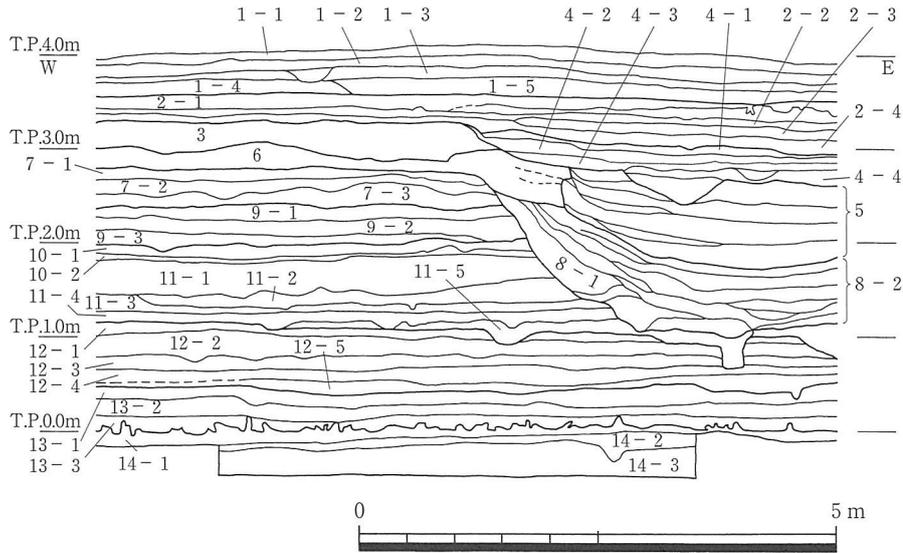
第8層 T.P.2.8m～1.0m。第7層上面で検出された流路内の堆積物を一括する。流路は、第6層上面検出流路の前身河川で、左岸側約3.6mを検出した。粗砂・中砂を主体とし、クロスラミナが顕著である。左岸部では、斜め方向に削り込んで不整合に肩部を覆う8-1層の堆積が見られた。中砂・細砂を多く含むシルト質粘土層で、流路の侵食によって崩壊した河岸部の復旧作業によって形成された可能性が考えられる。最下部には、植物遺体を多く含む粘土・シルト層の堆積が認められる。深さは最深部でT.P.1.0m、深さ1.7m。遺物は全く出土しなかった。

第9層 T.P.2.4m～2.0m。暗青灰色粘土層。3層に細分が可能であるが、各層界は必ずしも明瞭ではない。全体に粘性が強く比較的均質な層である。9-1層と9-2層との層界には、緑灰色シルトの薄層が挟在している。また、9-2層上面を検出したところ、乾裂痕と思われる緑灰色シルトの網目状の割れ目が検出された。9-2層下部には炭酸カルシウムの結核が形成される。遺物は出土しなかった。

第10層 T.P.2.0m～1.8m。暗緑灰色粘土質シルト層。下部に植物遺体の薄層を多く挟在する。ラミナはさほど顕著ではない。遺物は出土しなかった。

第11層 T.P.1.8m～1.2m。暗緑灰色粘土質シルト層で、5層に細分できるが、各層界は必ずしも明瞭ではない。未分解の植物遺体や極細砂の薄層を挟在する。ラミナは顕著でない。遺物は出土しなかった。

第12層 T.P.1.2m～0.5m。暗緑灰色粘土を主体とする。5層に細分できる。12-1層と12-2層の層界は西側で不明瞭となる。未分解の植物遺体と細砂を含む。ラミナは認められない。12-1層上面で幅0.2m、深さ0.2mの溝とその東で溝状の落ち込みを検出した。溝の底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土中には、未分解の植物遺体や炭酸カルシウムの結核が集積する。12-3層以下は、粘性が強い。



第1層	1-1: オリーブ黒	10Y3/1	砂質シルト (細粒砂・極細粒砂を多く含む)	耕土層
	1-2: 灰	7.5Y3/1	シルト質粘土 (細粒砂を含み、若干粘性有り)	耕土層
	1-3: 灰黄褐	10YR3/1	粘土質シルト (砂粒の混入は少ない)	耕土層
	1-4: 灰黄褐	10YR4/2	粘土質シルト	島畠耕土層
	1-5: 灰黄褐	10YR4/2	粘土質シルト (細粒砂・中粒砂混入)	島畠間耕土層
第2層	2-1: 青灰	10BG5/1	シルト・細粒砂	中に中粒砂・細粒砂を埋土とする踏み込み痕あり
	2-2: 緑灰	10GY6/1	シルト	
	2-3: オリーブ灰	5GY6/1	シルト質粘土	
	2-4: 青灰			
第3層	オリーブ灰	5GY5/1	粘土質シルト (中粒砂・細粒砂を僅かに含む)	
第4層	4-1: 青灰	10BG6/1	シルト質粘土 (中粒砂・細粒砂を僅かに含む)	
	4-2: 暗緑灰	7.5GY4/1	砂質粘土 (中粒砂・細粒砂混入する)	耕土層
	4-3: 暗緑灰	7.5GY4/1	細粒砂混じり粘土	中粒砂も若干含む
	4-4: 暗オリーブ灰	5GY4/1	極細粒砂～シルト混じり粘土	下部にシルト・細粒砂のラミナ
第5層	流路内堆積物を一括			
第6層	暗緑灰	10GY4/1	粘土 (中粒砂をわずかに含む)	
第7層	7-1: 暗緑灰	10GY4/1	粘土質シルト (細粒砂一主・中粒砂含む)	
	7-2: 暗緑灰	10BG4/1	粘土	7-3層との層境には緑灰10G5/1粘土の薄層を挟在
	7-3: 暗青灰	10BG3/1	粘土	
第8層	8-1: 暗青灰	5BG4/1	シルト質粘土 (細粒砂・中粒砂含む)	
	8-2: 流路内堆積物のうち、b層を一括			
第9層	9-1: 暗青灰	10BG3/1	粘土 (9-2層との層境には暗青灰10GY4/1シルト質粘土の薄層を挟在する)	
	9-2: 暗青灰	5BG3/1	粘土 (下部に炭酸カルシウムの結核)	
	9-3: 暗青灰	5BG3/1	粘土 (9-2層との層境は不明瞭)	
第10層	10-1: 暗緑灰	7.5GY4/1	粘土質シルト	
	10-2: 緑灰	10G5/1	粘土 (植物遺体の薄層を挟在)	
第11層	11-1: 暗オリーブ灰	5GY4/1	シルト (粘性やや有り、植物遺体を僅かに含む)	
	11-2: 暗緑灰	10GY4/1	シルト質粘土 (下部には極細粒砂と植物遺体の薄層挟在)	
	11-3: 暗緑灰	7.5GY4/1	粘土	
	11-4: 暗緑灰	10G4/1	粘土質シルト (中粒砂を僅かに含む、下部は粘土質に変化)	
	11-5: 暗緑灰	10GY3/1	粘土質シルト (未分解の植物遺体と極細粒砂含む)	
第12層	12-1: 暗緑灰	10G4/1	粘土	
	12-2: 暗青灰	5BG3/1	粘土 (粘性強く、高密度)	
	12-3: 暗緑灰	10GY3/1	粘土 (黒有機質の薄層を多数挟在)	
	12-4: 暗緑灰	10G3/1	粘土 (植物遺体を若干含む)	
	12-5: 極細粒砂・細粒砂のラミナ層 (西側への側方変化しオリーブ灰5GY5/1粘土) となる			
第13層	13-1: 暗オリーブ灰	5GY4/1	シルト質粘土	
	13-2: 暗オリーブ灰	5GY4/1	シルト質粘土 (植物遺体をやや含む)	
	13-3: 暗オリーブ灰	5GY4/1	シルト質粘土 (中粒砂・シルトやや含む)	
第14層	14-1: オリーブ黒	5GY2/1	シルト混じり粘土	中粒砂やや多く含む
	14-2: 暗緑灰	7.5GY4/1	シルト混じり細粒砂	粘性やや有り
	14-3: 暗緑灰	7.5GY4/1	極細粒砂～細粒砂	

図39 確認03-1-2区 北壁断面図 (S = 1/80)

く均質な粘土層で構成される。植物遺体や極細砂・シルトの薄層を多数挟在する。遺物は出土しなかった。

第13層 T.P.0.5m～0.0m。暗オリーブ灰色シルト質粘土層。3層に細分できる。13-1層は、極細砂・細砂から側方変化し、西側ではシルト質粘土となる。植物遺体の薄層や炭酸カルシウムの結核が多く含まれる。また、下方へ向かって粘性が強くなる。遺物は出土しなかった。

第14層 T.P.0.0m～-0.3m。掘削深度限界面で中砂を含む暗オリーブ黒色土層が検出されたため、トレンチ中央部に、幅30cm、長さ5.0mのトレンチを設定し、深さ30cmまで掘削し、層相と下層の確認を行なった。その結果、オリーブ黒色土層の下部は層界が不明瞭で、含まれる砂粒は層下部起源であることから、暗緑灰色砂質シルト層上部が土壌化することによって形成されたことが確認された。土壌化層上部は地震による変形構造が顕著に見られる。土壌化層上面とこれを除去した面で遺構は検出されなかった。

第13層との層界からは瓦質土器の細片1点が出土し、土壌化層除去面からは弥生土器の細片1点が出土した。遺物が少なく時期を特定する事は困難であるが、層の状態が03-1-1区第9層上部土壌化層と酷似していることから、古墳時代後期と推定した。

(4) 03-1-3区 (図40、写真図版14)

第1層 T.P.4.2m～3.7m。細粒砂～中粒砂を含む暗緑灰色砂質シルトの作土層で、若干の粘性を帯びる。7層に細分できる。鳥壘を検出した。1-4層・1-5層と1-7層は、鳥壘の作土層と考えられる。1-5層からは、近世の染付や瓦器、土師器の細片が出土した。

第2層 T.P.3.7m～3.5m。中粒砂を含む暗緑灰色粘土質シルト層で、3層に細分できる。2-1層と2-2層は2-3層の粗砂・中砂を起源とする作土層である。2-3層はラミナが顕著な極細砂・細砂層である。遺物は出土しなかった。

第3層 T.P.3.5m～2.6m。第6層上面検出の流路廃絶後の窪地を中心に堆積する砂質シルト層で、8層に細分できる。3-1層から3-3層までは、中砂・細砂を含む鳥壘間作土層で、3-8層は、鳥壘の作土もしくはベースとなる中砂・細砂を主体とする砂質シルト層である。3-4層から3-7層はシルト・極細砂・中砂のラミナが発達した洪水堆積物である。3-1層から3-3層からは、瓦器の片口鉢や土師器皿や鉢の細片が出土したが、いずれも細片で、図化するまでには至らなかった。

第4層 T.P.3.5m～3.0m。中粒砂を若干含む暗緑灰色砂質シルト層で、2層に細分できる。粘性をやや帯びる。植物遺体を少量含む。遺物は出土しなかった。

第5層 T.P.3.0m～1.7m。流路内の堆積物を一括する。流路は、幅4.2m 深さ1.5mで、最深部はT.P.1.7mに達する。上層は中砂・細砂が卓越し、下部は小礫・粗砂が卓越する。

第6層 T.P.3.0m～2.5m。暗青灰色シルト質粘土層で、大別2層、細別4層に分層できる。いずれも砂粒が混入される土壌化層であるが、土壌化はさほど顕著ではない。上面では流路を検出した。上部2層は中粒砂・細粒砂が主体をなし、下部2層は小礫・粗粒砂が主体となる。出土遺物がなく、時期を特定することはできなかった。

第7層 T.P.3.0m～1.2m。第6層上面で検出された流路内の堆積物を一括する。流路は、第3層検出流路の前身河川で、幅4.2m、深さ1.8mで、最深部はT.P.1.2mに達する。最下部は未分解の植物遺体や炭酸カルシウムの結核を含む粘土質シルト層(7-5層)で、流路底面は平坦である。左岸部に

は、細砂・粗砂を含む暗緑灰色砂質粘土層（7-1層）の堆積が認められる。7-1層は、03-1-2区流路8-1層と同様の堆積状況にあり、人為的に形成された層と考えられる。層中からは、13世紀頃の瓦質甕の口縁部が1点出土した。7-2層から7-4層は、小礫・粗砂のラミナが発達している。

第8層 T.P.3.0m~1.2m。第9層上面で検出された流路内堆積物を一括する。ラミナが顕著な粗粒砂~小礫の上層と灰色粘土質シルトの2層に細分できる。流路は、第6層上面流路・第4層上面流路によって、西半部は失われる。遺物は出土しなかった。

第9層 T.P.2.5m~2.0m。暗緑灰色シルト質粘土層で2ないし3層に細分できる。植物遺体の薄層を挟在する。流路の東側最上部には中砂・細砂を含み土壌化が窺えるが、さほど顕著ではない。植物遺体の薄層を含む。遺物は出土しなかった。

第10層 T.P.2.0m~1.9m。暗青灰色粘土層。シルト・極細粒砂を少量含む。植物遺体の薄層を挟在する。

第11層 T.P.1.6m~1.0m。流路の東側の低地部に堆積する、暗緑灰色粘土層で、3層に細分できる。最下部の粘土質シルト層には、炭酸カルシウムの結核が形成される。遺物は出土しなかった。

第12層 T.P.1.9m~1.3m。暗緑灰色シルト層で、3層に細分できる。粘性があり、植物遺体を含む。特に最下部（12-3層）には、植物遺体や炭酸カルシウムの結核が多く含まれる。ラミナは顕著でない。遺物は出土しなかった。

第13層 T.P.1.4m~1.2m。暗オリーブ灰色粘土質シルト層で、下部には未分解の植物遺体や炭酸カルシウムの結核が少量含まれる。層厚は中央部で厚く、周辺部で薄くなる傾向が窺える。特に2流路の西側では、微細な粘土ブロックの混入が見られ、盛土と考えられたが、層界が不明瞭で、平面で検出することができなかった。上部には中砂・細砂が混入し、土壌化が認められるがさほど顕著ではない。暗緑灰色粘土を埋土とする、幅0.4m、深さ0.1mの南北方向の溝を検出した。溝は盛土と推定された部位の東側に位置する。出土遺物がなく、時期は特定できなかった。

第14層 T.P.1.2m~1.1m。暗オリーブ灰色粘土質シルト層。未分解の植物遺体を含む。ラミナはさほど顕著でない。

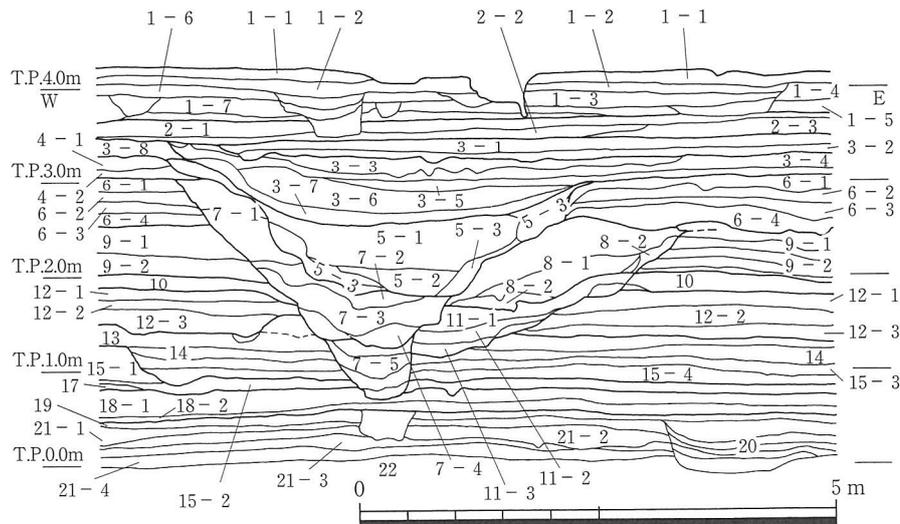
第15層 T.P.1.3m~0.8m。暗青灰色砂質粘土層で、2層に細分できる。15-1層は、極細粒砂~細粒砂を比較的多く含み、ラミナ構造が見られないことややや締まりがあることから、15-2層をベースとして盛土された層と考えられる。15-2層上面とは約0.4mの比高差がある。調査区西端約0.5mの範囲で検出され、盛土部分は南北方向に直線的に延びる。15-2層は、層厚約0.1mで、ほぼ水平に堆積し、ラミナが見られるシルト~細粒砂の薄層を挟在する。遺物は出土しなかった。

第16層 T.P.1.1m~0.9m。第15層の東側の低地部に堆積する、暗青灰色シルト質粘土層で、2層に細分できる。極細粒砂~細粒砂を含む。さほど顕著ではないが土壌化が窺える。

第17層 T.P.1.1m~0.9m。第18層上面に堆積する極細粒砂~細粒砂の洪水層。第15層の形成によって大半が失われ、15-1層が堆積する範囲にのみ残存する。

第18層 T.P.0.8m~0.5m。暗緑灰色シルト質粘土層で、2層に細分できる。18-1層は西側に層厚を増している。上部は極細粒砂や青灰色粘土のブロック含んでいる。18-1上面では、幅0.3m、深さ0.15mの南北方向の小溝が検出された。遺物が出土していないため、時期は特定できなかった。18-2層は層厚を減じながら西方へ下降する。

第19層 T.P.0.6m~0.5m。暗緑灰色粘土質シルト層。細粒砂・細粒砂を少量含む。調査区中央、流



第1層	1-1	暗緑灰	5G3/1	砂質シルト (細粒砂・中粒砂を多く含む)	耕土層	
	1-2	暗青灰	5BG4/1	粘土質シルト (細粒砂・中粒砂含む)	島島間耕土	
	1-3	灰	10Y4/1	砂質シルト (細粒砂・中粒砂多く含む)	島島間耕土	
	1-4	暗緑灰	10GY3/1	砂質シルト (細粒砂・中粒砂を多く含む)	島島上耕土	
	1-5	オリーブ灰	2.5GY5/1	粘土質シルト		
	1-6	暗緑灰	10GY3/1	砂質シルト (細粒砂・中粒砂を多く含む)	島島上耕土	
第2層	1-7	オリーブ灰	2.5GY5/1	粘土質シルト (中粒砂を比較的多く含む)	粘性有り	
	2-1	暗緑灰	10GY4/1	粘土質シルト (中粒砂を多く含む)		
	2-2	暗緑灰	10GY4/1	粘土質シルト (粗粒砂・中粒砂を多く含む)		
第3層	2-3	暗青灰	5GY4/1	極細粒砂・シルト (ラミナ)		
	3-1	青灰	5BG5/1	シルト質粘土 (植物遺体多く含む)	鉄分沈着	
	3-2	明オリーブ	2.5GY7/2	粘土質シルト (中粒砂をやや多く含む)	島島間耕土	
	3-3	灰	7.5Y6/1	シルト質粘土 (中粒砂を多く含む)	島島間耕土	
	3-4	緑灰	10GY5/1	粘土質シルト (中粒砂をやや多く含む)	島島間耕土	
	3-5	灰	7.5Y6/1	粘土質シルト		
	3-6	緑灰	5G5/1	シルトと中粒砂～極細粒砂 (ラミナ発達)	洪水層	
	3-7	緑灰	10GY5/1	粘土質シルト (ラミナ)		
第4層	3-8	青灰	5BG5/1	シルト質粘土 (細粒砂・中粒砂含む)		
	4-1	緑灰	10G5/1	砂質シルト (中粒砂含む)	植物遺体痕	
第5層	4-2	暗緑灰	5G4/1	シルト質粘土 (中粒砂を僅かに含む)		
	1 流路内堆積土 上層は中粒砂・細粒砂が卓越 下層は小礫・粗粒砂が卓越					
	第6層	6-1	暗青灰	10BG3/1	シルト質粘土 (中粒砂・細粒砂を多く含む)	
		6-2	暗青灰	10BG3/1	シルト質粘土 (粗粒砂を多く含む)	
6-3		暗青灰	5BG3/1	砂質粘土 (粗粒砂を含む)	粘性有り	
第7層	6-4	暗青灰	5BG3/1	砂質粘土 (小礫・粗粒砂含む)		
	2 流路内堆積土					
	7-1	暗緑灰	10G3/1	砂質粘土 (粗粒砂・中粒砂・極細粒砂を含む)		
	7-2			シルト・中粒砂 (ラミナ)		
	7-3			小礫・粗粒砂 (ラミナ)		
第8層	7-4			粗砂を含む粘土		
	7-5	暗緑灰	10GY4/1	粘土質シルト (未分解の植物遺体・炭酸カルシウムの結核含む)		
第9層	3 流路内堆積土 小礫・粗粒砂が卓越し、ラミナが発達する上層 (8-1) と暗オリーブ灰粘土質シルトの下層 (8-2) の					
	9-1	暗緑灰	10G4/1	シルト質粘土 (植物遺体を含む)		
第10層	9-2	暗青灰	5BG4/1	シルト質粘土 (植物遺体を含む)		
		暗青灰	5BG4/1	粘土 (シルトを僅かに含む)		
第11層	11-1	暗緑灰	10G3/1	粘土		
	11-2	暗緑灰	7.5GY4/1	粘土		
	11-3	暗緑灰	10GY4/1	粘土質シルト (植物遺体や炭酸カルシウムの結核多く含む)		
第12層	12-1	暗緑灰	10G4/1	シルト (植物遺体を含む)		
	12-2	暗緑灰	7.5GY4/1	シルト (粘性やや有り 植物遺体含む)		
	12-3	暗緑灰	10GY4/1	粘土質シルト (植物遺体や炭酸カルシウムの結核をやや多く含む)		
第13層		暗オリーブ灰	2.5GY4/1	粘土質シルト (細粒砂・中粒砂含む)		
第14層		暗オリーブ灰	2.5GY4/1	粘土質シルト (a層)		
第15層	15-1	暗緑灰	10G3/1	砂質粘土 (極細粒砂・細粒砂多い)		
	15-2	暗青灰	10BG3/1	砂質粘土 (シルト・極細粒砂含む)		
	15-3	暗青灰	10G3/1	シルト質粘土		
	15-4	暗青灰	5BG4/1	シルト質粘土		
第17層				極細粒砂・細粒砂 (ラミナ発達)		
第18層	18-1	暗緑灰	7.5GY4/1	シルト質粘土 (細粒砂を極僅か含む)		
	18-2	暗緑灰	7.5GY4/1	シルト質粘土		
第19層		暗緑灰	5G3/1	粘土質シルト (極細粒砂・細粒砂ブロック含む)		
第20層				シルト～細粒砂・中粒砂 (ラミナ)		
第21層	21-1	暗オリーブ灰	5GY3/1	粘土質シルト		
	21-2	暗オリーブ灰	5GY3/1	粘土質シルト		
	21-3	暗緑灰	10GY3/1	粘土質シルト (植物遺体・極細粒砂の薄層挟在)		
	21-4	暗緑灰	7.5GY4/1	シルト質粘土 (植物遺体の薄層を挟在)		
第22層		暗オリーブ灰	10BY3/1	シルト質粘土 (有機物混入)		

図40 確認03-1-3区 北壁断面図 (S = 1/80)

路とほぼ同じ位置で、幅0.5m、深さ0.3mの南北方向の溝が検出された。シルト・細粒砂埋土とする。遺物が出土していないため、時期は特定できなかった。

第20層 T.P.0.5m～0.0m。調査区東端で検出された流路内堆積物を一括する。ラミナが顕著なシルト～極細粒砂の互層である。

第21層 T.P.0.5m～0.0m。2層に大別される。21-1層は、暗緑灰色粘土質シルト層で、極細粒砂・細粒砂の混入が認められ、有機物を多く含む。土壌化はさほど進行していないことから、非常に短期間にのみ、地表面を形成していたと推定される。21-2層は、さらに2層に細分が可能である。植物遺体の薄層を多数挟在し、またラミナが顕著な極細粒砂～細粒砂層である。

(5) 小結

今回の調査では、各地区ともに複数の土壌化層が検出された。その中には溝などが検出され、人の活動を窺う事ができる面もある。しかし、層は薄く土壌化の進行も顕著でない事から、長期間地表面を形成していたとは考えがたい。03-1-1区では古墳時代後期の溝やピットが検出されたが、ピットの形状は不定形で浅く、建物が復元されるような配置を示すものもなかった。出土遺物も数点のみで周辺での居城域を想定するまでには至らない。各地区からは流路が検出され、流路廃絶後は、徐々に平坦化が進み、さらに上部には、層厚10cm前後の作土層が重層的に形成される。出土遺物が極端に少ない事から、各層の時期を特定する事ができなかったが、東端03-1-3区の流路の位置が高く、第6層上面流路肩部出土の瓦質甕（写真図版15-3003）が流路の一時期を示すとすれば、流路が東に位置を変えながら徐々に上昇していったと推定する事も可能である。

流路出現以前の堆積層は、一時的に地表面を形成する時期があったとしても、常に洪水等の影響を受けやすい不安定な地形環境にあった事をしめしている。

第5章 有機質遺物・遺存体の同定

当遺跡は河内平野の低湿地にあたるため、土器などの無機質遺物以外に木製品・種子・獣骨などの有機質遺物が、井戸や包含層から一定量出土した。このうち木製品については、井戸の枳板や井戸枳内出土のものが大半であるため、第4章の遺構・遺物のところで記述し、その大きさや樹種についても表にまとめた(表1)。樹種の同定については、当センター保存処理室山口主査に依頼した。

それ以外の有機質遺物・遺存体については本章で取り上げる。有機質遺物で残存状況の良いものは、同山口主査に同定を依頼し、結果を表にまとめた(表2)。詳細は表を参照されたいが、種類毎の概要を簡単に以下に記す。

また、出土遺構として18井戸が最も多いが、これは18井戸の最下層で一括投棄されたとみられる土器資料の出土をみたことから、微細遺物の抽出を目的として最下層の土を土嚢袋に採取し、ふるい等による細かな洗浄選別作業を行った結果である。

種子 主に井戸の下層からの出土による。モモの核の出土が最も多く、ついでマクワウリ、ヒョウタンなど食用植物にほぼ限定されることと出土遺構の種類からから、残滓物の可能性が高い。井戸にモモが多いことは、遺構の性格上、常に水にさらされて有機質遺物の残りがよくなるという条件以外に、井戸にモモの核を投げ込む古事記以来の呪術信仰を連想させるものとして興味深い。

動物骨 長さ1 cm程度、厚さ1 mm程度の骨が18井戸最下層より多量に出土した。同定の結果、ほとんどがカエルで、わずかにネズミが含まれることが分かった。カエルの骨の部位は 骨や尺骨、椎骨が多く、小形と大形のものが混じるが、種類を特定はできなかった。個体数を復原することもできなかった。

また、これらの骨が井戸から発見されたことは、食用の残滓を投棄した場合と、井戸に落ちて自然死したものと両方の場合が考えられる。多様な部位が残り、各部位が揃っていれば自然死の可能性が高いが、この場合は判断がつかなかった。

貝 タニシの殻の蓋である。出土が上層の中世から近世の遺構面にほぼ限られる事が特徴で、この時期に食用されていたものと考えられる。

昆虫 側溝からの出土なので時期を限定しがたいが、上層なので中世以降の層位からの出土と考える。ゴミムシ科の昆虫の上翅である。

〈参考文献〉

久保和士 1999 「第10節 動物遺体」『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』(財)大阪市文化財協会

表2 04-1区出土動植物遺体同定表

項目	番号	出土遺構・層位	種類・名称
種子	S-1	97井戸1段目曲物井筒内	モモ核1個
	S-2	18井戸土器25	マクワウリの仲間12個
	S-3	18井戸最下層	モモ核2個、マクワウリの仲間2個
	S-4	18井戸下層	モモ核3個、半分12個、マクワウリの仲間45個、ヒョウタンの仲間14個、カナムグラ1個、炭化米3個
	S-5	第2～3面間(東から10～20m)	モモ核1個
	S-6	97井戸最下層	モモ核1個
動物骨	H-1	18井戸下層	両生類脛骨1個、上顎骨片1個、カエル(小形)脛骨73個、上腕骨7個、カエル頭骨片8個、尺骨32個、椎骨31個、足根骨3個、ネズミ椎骨2個
	H-2	18井戸下層	不明骨3個
	H-3	第2～3面間と第3面遺構群	不明骨1個
魚	Ka-1	18井戸最下層	魚類の鱗1個
貝	Ka-2	第1面精査	タニシ殻の蓋1個
	Ka-3	側溝	タニシ殻の蓋2個
	Ka-4	第1層(茶褐色シルト層)～第3層	タニシ殻の蓋1個
虫	Mu-1	側溝	ゴミムシ科上翅1個

ヒキガエル *Bufo vulgaris* の骨格(背面図)

1. 鼻骨(nasal bone)
2. 前額顛頂骨(frontoparietal b.)
3. 上肩胛骨(supr-ascapula)
4. 上膊骨(humerus)
5. 橈骨(radius)
6. 尺骨(ulna)
7. 腕骨(carpus)
8. 掌骨(metacarpus)
9. 指骨(phalanges)
10. 薦椎=第9椎骨(sacral vertebra)
11. 腸骨=無名骨(ilium)
12. 尾骨(urostyle)
13. 大腿骨(femur)
14. 腓骨(fibula)
15. 脛骨(tibius)
16. 距骨(talus)
17. 踵骨(calcaneus)
- 16と17を合せて跗骨又は足根骨(tarsus)と称す
18. 蹠骨(metatarsus)
19. 足指(趾)骨(phalanges)
20. 坐骨(ischium)
- I-VIII. 第1-第8椎骨(vertebra)

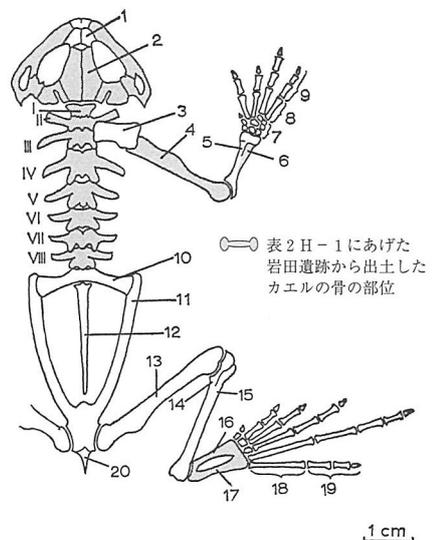


図41 ヒキガエル骨格図

第6章 まとめ

今回の調査によって、近鉄奈良線連続立体交差化に伴うⅠ工区工事区間の発掘調査が一応終了した。八戸ノ里駅から若江岩田駅までの東西約1kmにおよび、瓜生堂遺跡・岩田遺跡の二つの遺跡にまたがる調査となった。

個々の調査区についての報告は、瓜生堂遺跡は『瓜生堂遺跡1』（センター2004）に、岩田遺跡については本書第4章で述べてあるが、両遺跡を通じて広範囲に地層の堆積状況を追うことができるため、この章で今一度まとめたい。

また、遺構に関しては、今回新たに古代の集落域を検出したこともあり、この周辺の古代集落域の展開を考えてみたい。

第1節 層序の比較検討

まず、瓜生堂遺跡・岩田遺跡の全19調査区の南壁断面をもとに作成した基本層序模式図を、調査区の配置通りに並べてみた（図42）。模式図の縦（深さ）は同じ比率であるが、横は調査区の大きさに応じて幅を変えてある。また、同一遺構や鍵層となる層は同じトーンで表現してある。

弥生時代前期は鍵層となる黒色シルト～粘土層が存在するので、地形の高低を追いやすい。西側の99-8区から99-10区ではやや標高が高く、東にいくにつれ次第に下がってくるが中央の99-3区から99-5区では若干だが上昇し、微高地を形成する。その後、再び下降し、99-1・2区など未調査区も含むが、T.P.-2.0m以下まで低くなるようである。

その後、弥生時代中期には、河川の氾濫によってあふれた砂が低いところに堆積する地形の逆転現象が起き、01-3区から99-7区の辺りが地表が高くなる。

その後も小規模な河川の氾濫などを繰り返しながら、堆積は進行する。特に、弥生時代後期末～古墳時代にかけての大規模な河川の氾濫堆積が02-3区から99-3区で見られる。これは小阪合分流路の分岐流路と考えられ、厚いところでは堆積は2mにも及ぶ。その結果、中世は04-1区から99-4区にかけては、T.P.2.0m以上の高さではほぼ平坦となり、そこから東西に向けて徐々に下降する。

各時代の遺構面は、この地形に応じて、微高地に形成される場合が多い。また、個別の遺構をとっても高まりを利用して方形周溝墓を造営したり、低地を利用して水田や溝を形成するなど、自然地形に起因して遺構が作られる、当然ともいえる土地利用状況をみることができる。

本書に掲載した調査区は、古墳時代以下の層序については未調査のため不明である。古代から中世については、01-1・04-1区周辺を頂点として地表高が下がっていく。それで、04-1区では古代・中世の遺構が存在し、03-1-2・3区ではわずかな生産遺構を除いては、検出されないのであろう。

最も東にある02-4区よりさらに東に600～1200m離れる、確認調査の03-1-1～3区についても、同様に基本層序模式図を並べてみた（図43）。

現標高が確認調査区ではT.P.4.0m前後とかなり高い。しかし、その下約3.0mにわたって、中世遺物を含む堆積以降、流路の氾濫などによる砂層が厚く堆積する。そして、弥生時代後期～庄内式期の砂層上層に堆積する層、確認調査では古墳時代後期とする層が、岩田遺跡ではT.P.1.0m前後で検出さ

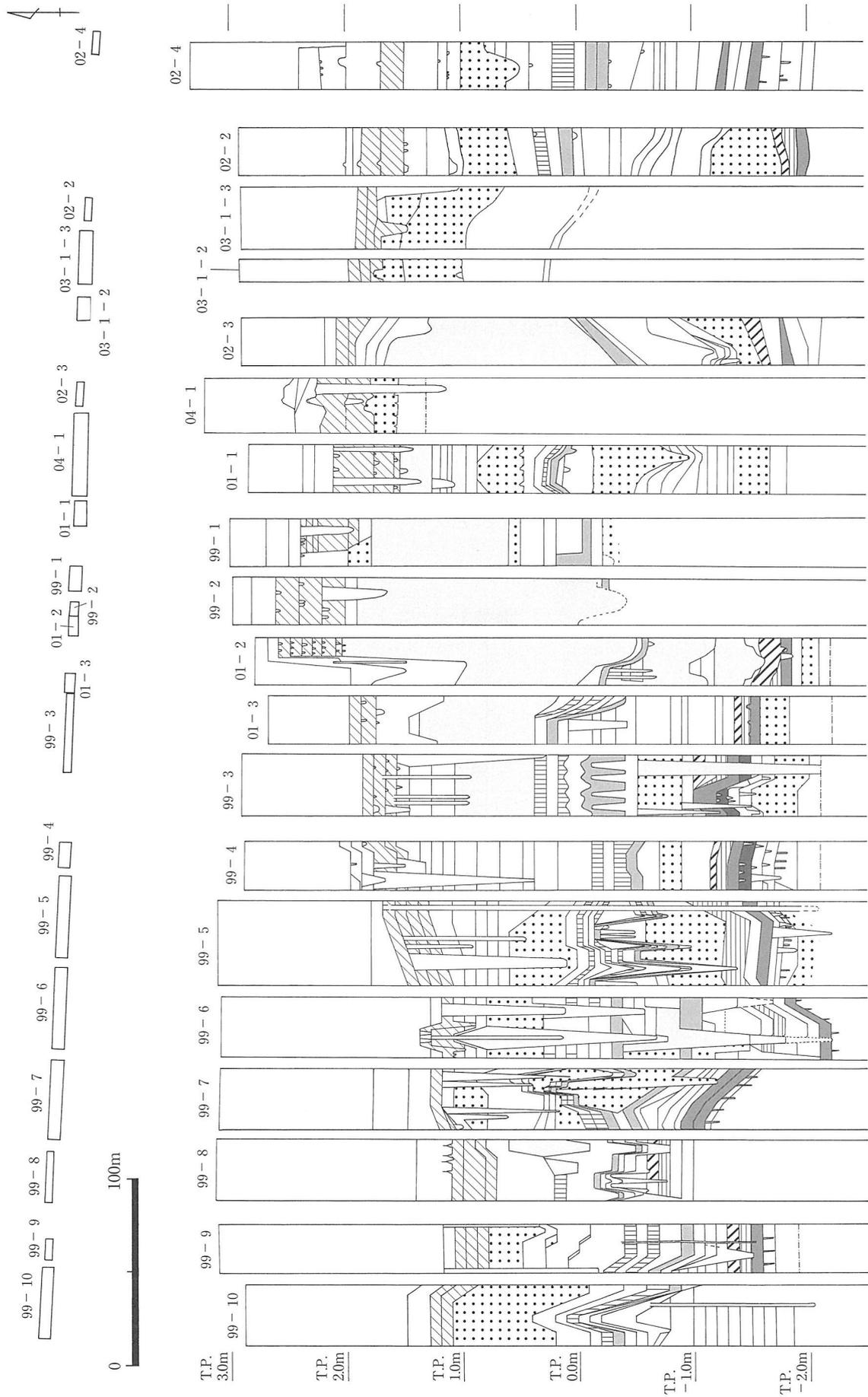


图42 层序比较图一1 (99-10区~02-4区)

れているのに、確認調査区ではT.P. 0 m付近での検出になり、地表高が東にいくと下降する事が分かる。つまり、弥生時代当時の地形としては東にいくほど地表高が低かったのが、古墳時代以降の氾濫堆積により地表高が一気に上昇して、現地表はむしろ東の方が高くなっている様子がみてとれる。

03-1-3区より東に関しても、今後Ⅱ工区工事に伴う確認調査などが予想されるため、更に東に続く層序の検討が可能となろう。今後の調査に期待したい。

〈参考文献〉

松田順一郎 1999 「瓜生遺跡第45次調査地点でみられた堆積環境変遷過程と人間活動の履歴」『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』（財）東大阪市文化財協会

松田順一郎 1999 「瓜生堂遺跡第40次調査地における河川堆積作用の変化」『瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会

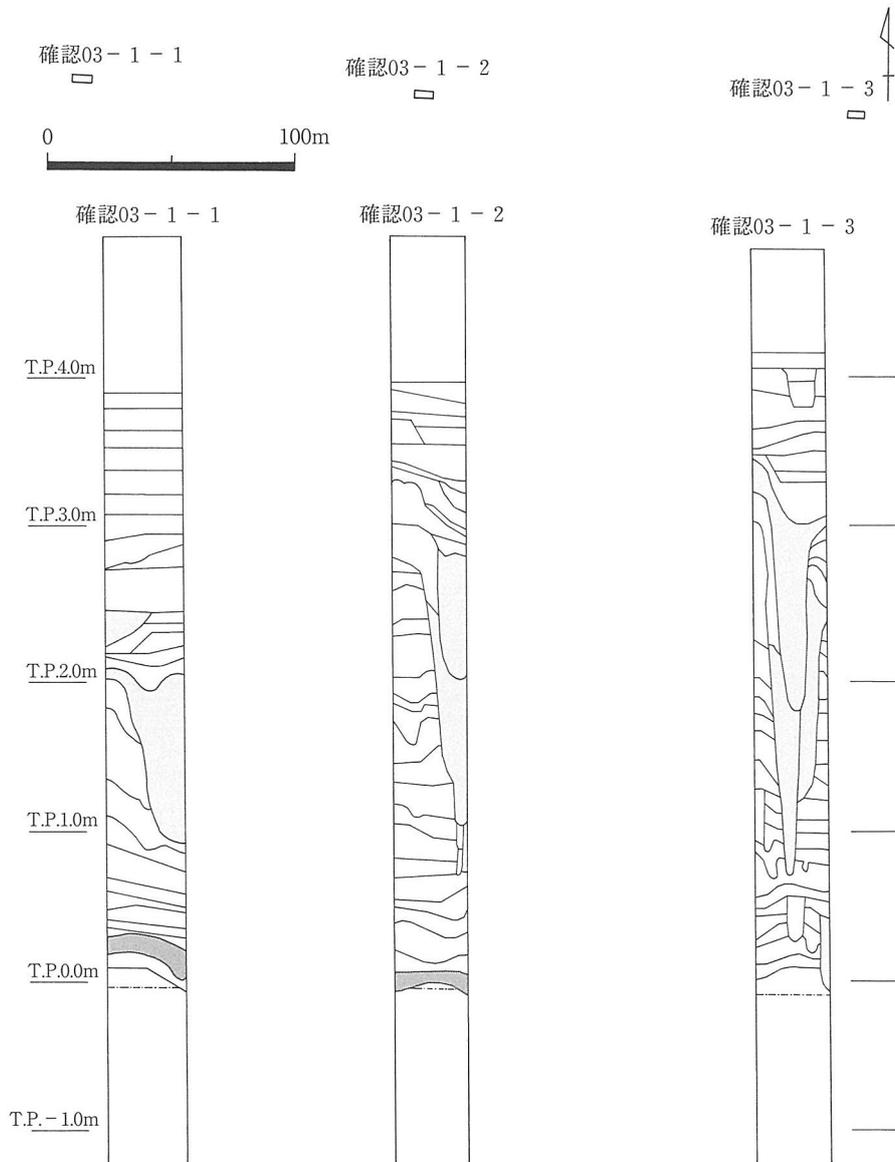


図43 層序比較図-2 (確認03-1-1区~03-1-3区)

第2節 古代集落の展開

04-1区で検出した主要な遺構は古代の集落域である。そこで、岩田遺跡・瓜生堂遺跡、あるいはその周辺の古代遺構についてまとめてみたい。

今回04-1区では上限を7世紀に求められるが、8世紀中頃から9世紀前半の小規模な集落域を検出した。岩田遺跡の既往の調査では平安時代後半の遺物が若干出土しているが、それ以前の明確な遺構・遺物は確認されていない。

また、本地区に最も近い古代遺構としては当センター調査の瓜生堂遺跡99-1・01-2区、東大阪市調査の同45次調査区があげられる(図44)。99-1・01-2区ではわずかに9世紀代の遺構・遺物を検出した。

45次調査区では8世紀初めから前半の溝(自然流路?)と整地層から同時期の遺物が検出されているが、明確な遺構や集落は検出されていない。9世紀になって、井戸が検出され、その後10世紀まで井戸や建物などまとまった遺構が連続して検出されるなど、集落域を形成している。第45次調査区より西では古代の遺構は検出されていないため、集落域の西端はほぼ45次までで限定される。

45次区からの出土遺物には土器の他、施釉陶器、製塩土器、円面硯、貨幣、帯金具(巡方)、墨書土器などが含まれる。その他、この調査区から出土した唐草文軒平瓦が、調査地南方約1kmに所在する若江遺跡出土瓦に類似することから、調査者は当集落を若江寺あるいは若江遺跡と関係ある官人の居住集落と位置づけている。04-1区の調査でも、施釉陶器、製塩土器、帯金具(巡方)や転用硯が出土しており、この説を補強するものと考えられる。

ともあれ今回04-1区で検出した集落遺構は、この集落域の中でも初現段階を示すと言える。

この集落域以外に、瓜生堂遺跡のなかでは2つの集落域が知られている。1つは遺跡中央部、センター調査B・C地区にあたる地域である。掘立柱建物7棟が検出され、8世紀代と報告される。

もう1つはそれより南西、第二寝屋川左岸に位置する集落である。東大阪24・32次調査区が該当する。この集落の時期は8世紀末か9世紀初頭から、10世紀末にわたる、と報告される。

この3つの集落域の関係は時期的には中央の集落域が最も早いことから、中央の集落域が消滅して、北東部・南西部に分散したか、もしくは中央から北東部に移動した、あるいは各々の集落域は独立して関連性をもたない、など様々な場合が想定され、45次調査報告者は明確な結論はだしていない。

中央集落域の南下した地点でも、今年の当センター02-1区で、7世紀前半のものを一部含むが、8世紀から9世紀前半の集落遺構を検出している。また、31・48次でも8世紀から10世紀までの遺構・遺物が検出されている。

集落域として主だったものは3群設定されるが、検出地点が点在しその時期も多期に分かれることを考えると、古代の集落は8世紀代あちらこちらで出現し、各々が独立した形で9世紀以降広がったと考えるのが妥当であろう。

〈参考文献・図〉

金村浩一 1999 「第5章 8 歴史時代のまとめ」『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』(財)東大阪市文化財協会
図44は(財)大阪府文化財センター 2004 『瓜生堂遺跡2』中の図2.01に改変を加え、作図した。

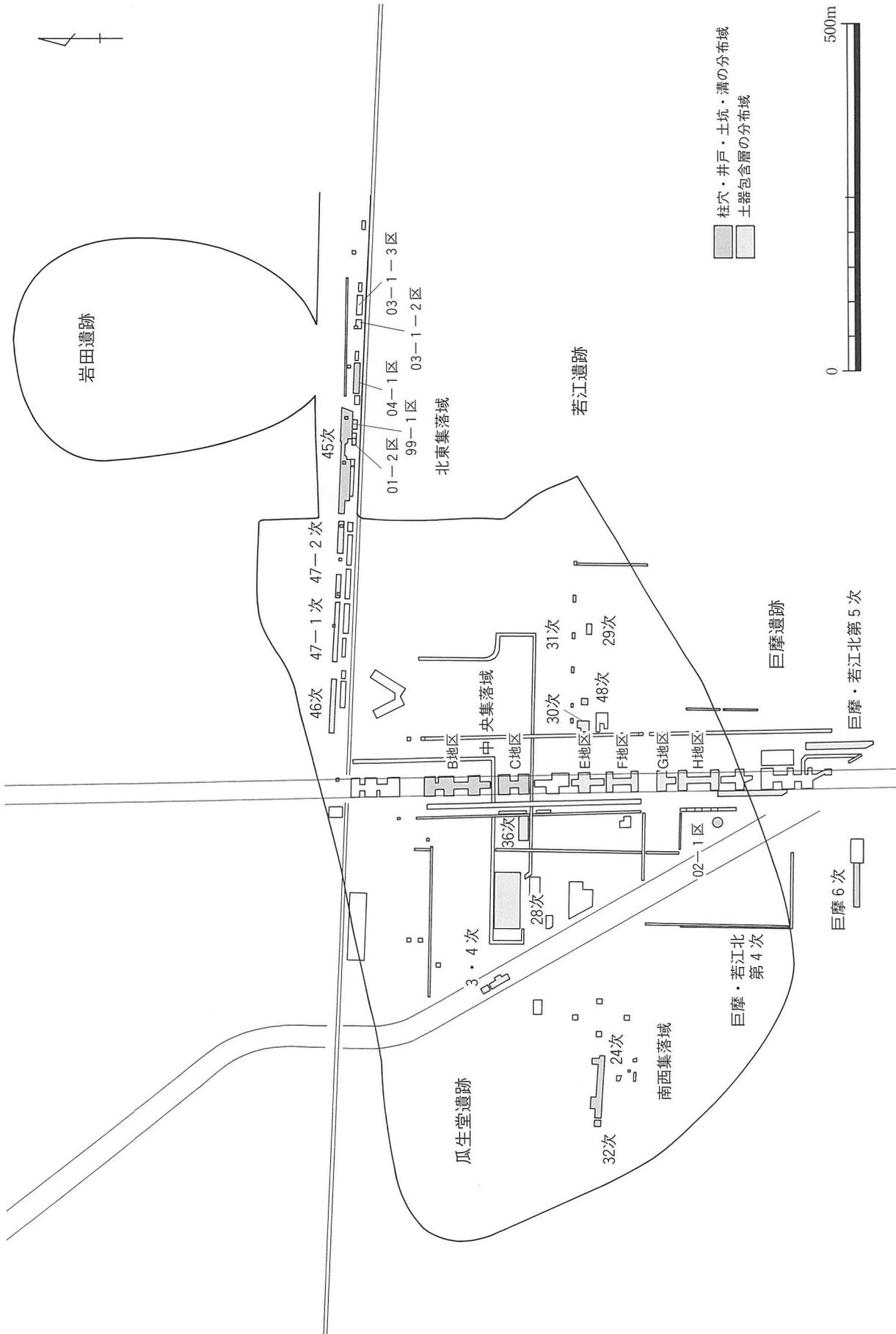
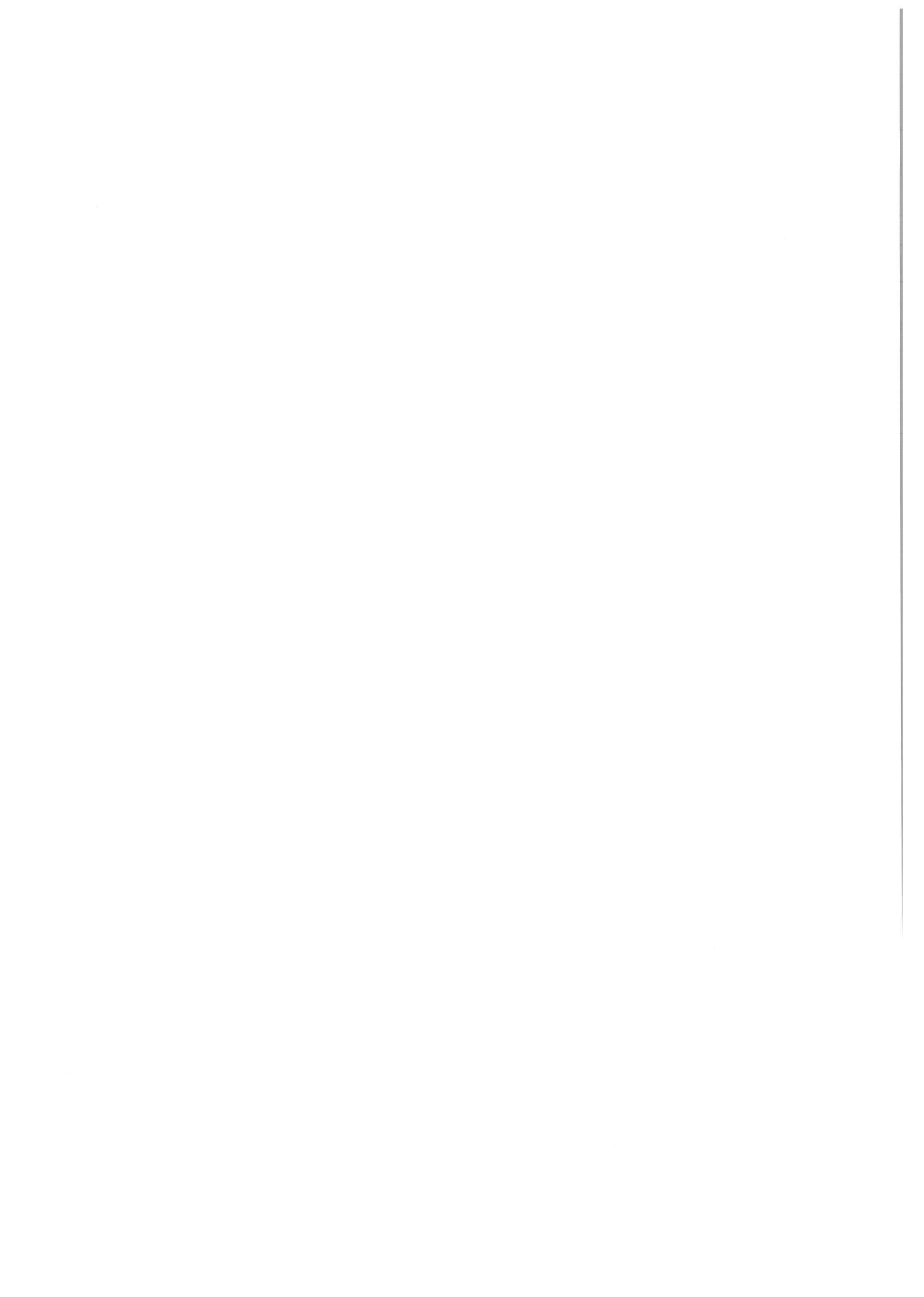
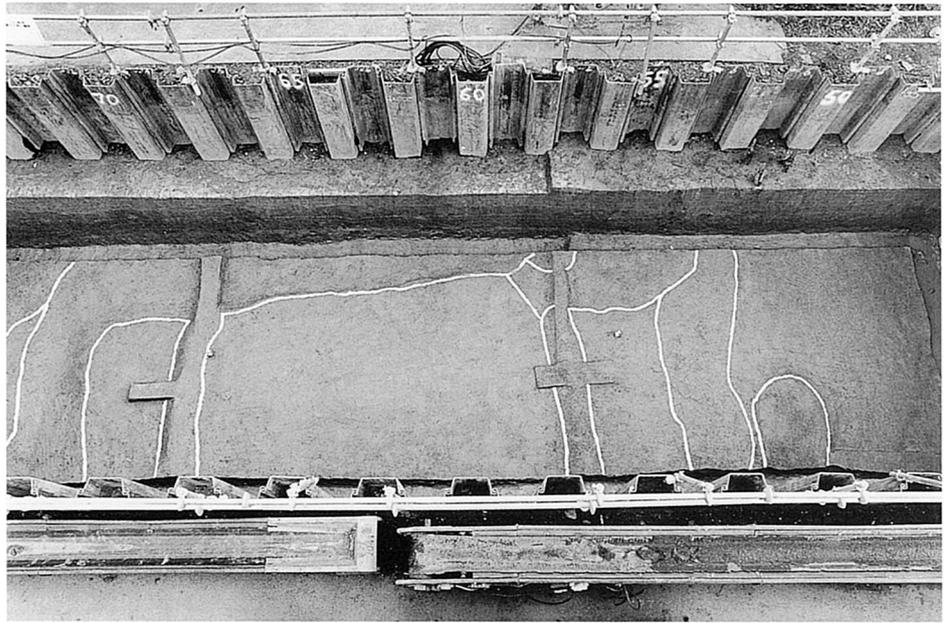


図44 瓜生堂遺跡・岩田遺跡における古代遺構の分布 (S = 1/8000)

写 真 图 版





03-1-2区
第5面 全景



03-1-2区
第5面 13流路断面
(東から)

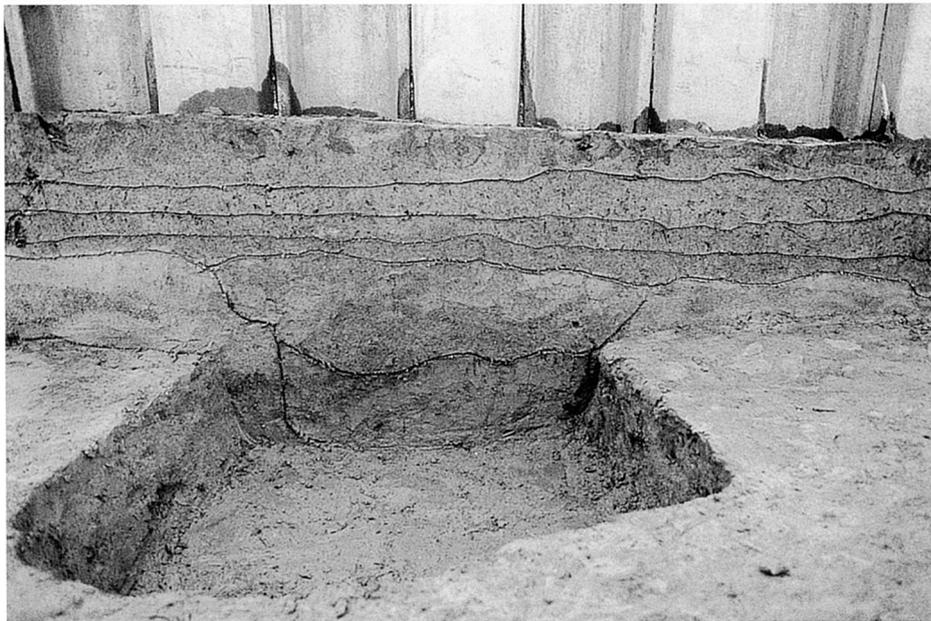


03-1-3区
第5面 全景 (西から)

写真図版2 03-1-3区 遺構



03-1-3区
第4面 西半部 土坑群



03-1-3区
第4面 土坑 検出状況



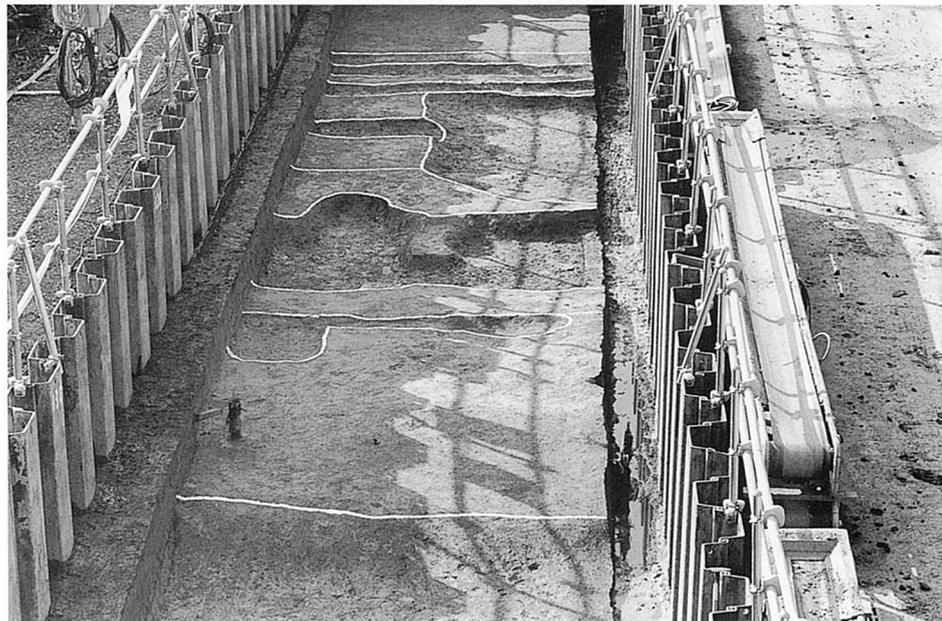
03-1-3区
第4面 土坑内遺物
検出状況 (西から)



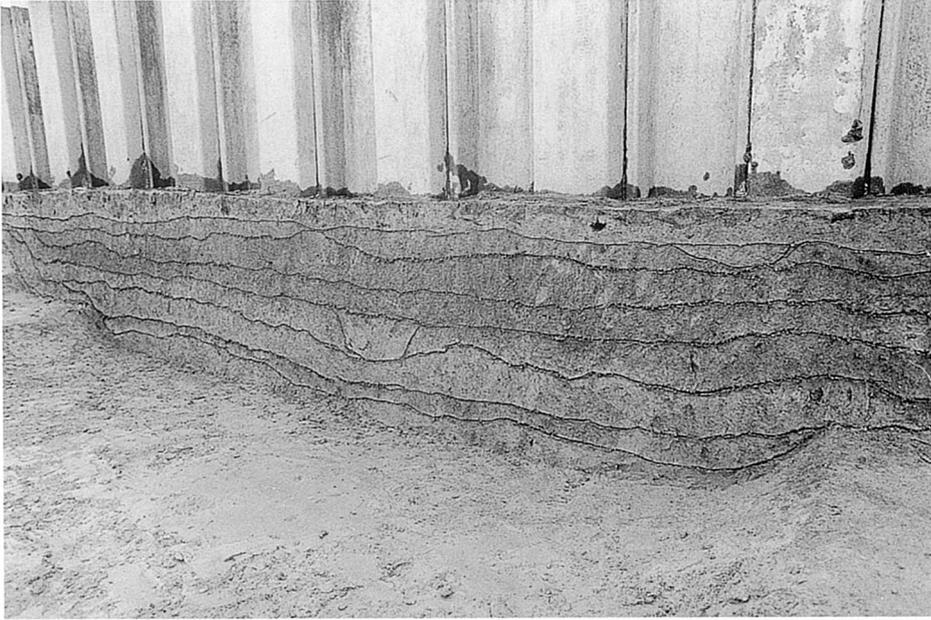
03-1-3区
第4面 ベース層断面
(北から)



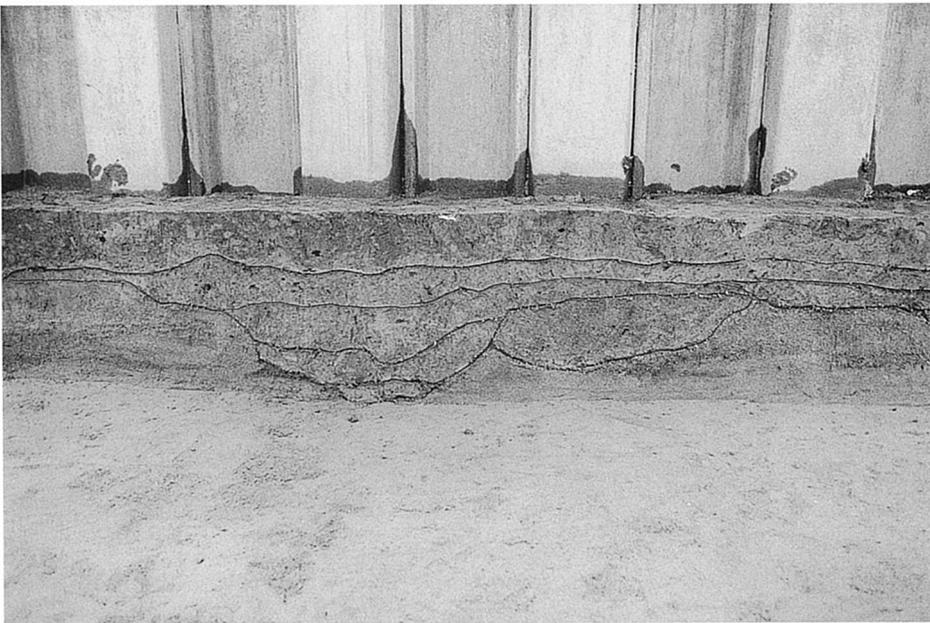
03-1-3区
第3面 島畠 検出状況
(東から)



03-1-3区
第3面 島畠 検出状況
(東から)



03-1-3区
第3面 島島間耕土断面
(北西から)



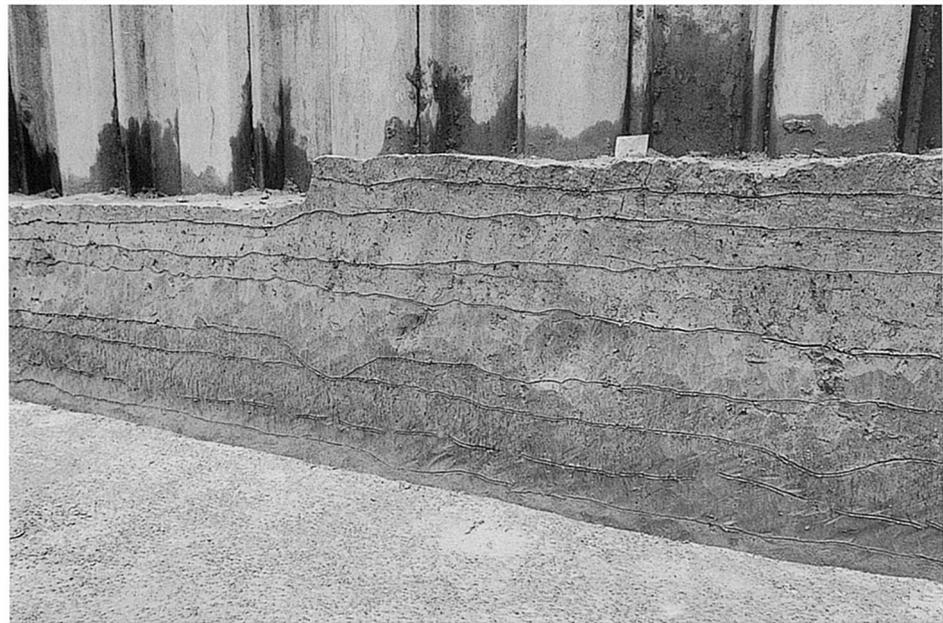
03-1-3区
第3面 8・9溝 断面
(北から)



03-1-2区
第1面 1畦畔全景
(北から)



03-1-2区
第1面 1畦畔断面
(北から)



03-1-2区
南壁断面

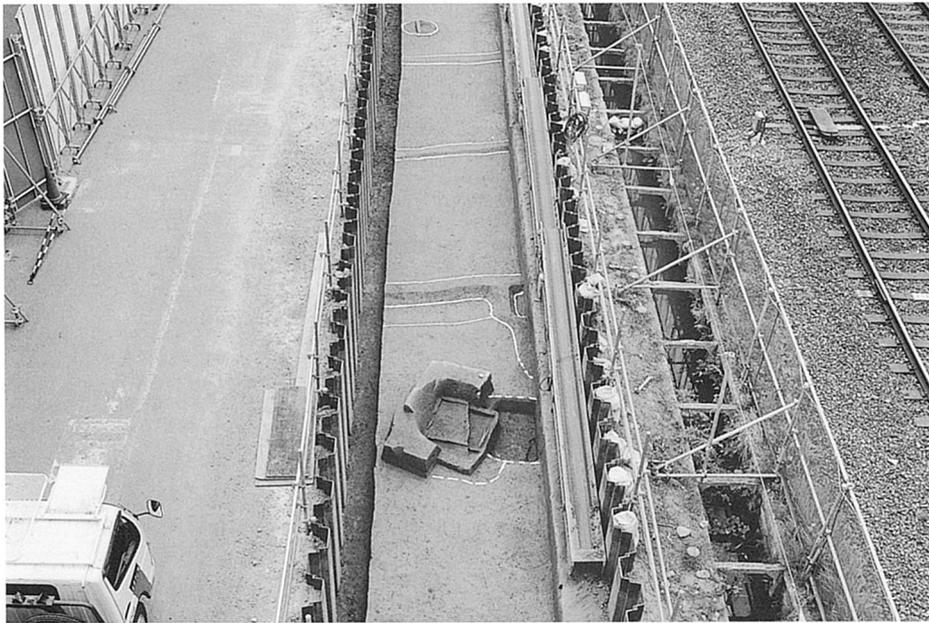


03-1-2区
南壁断面

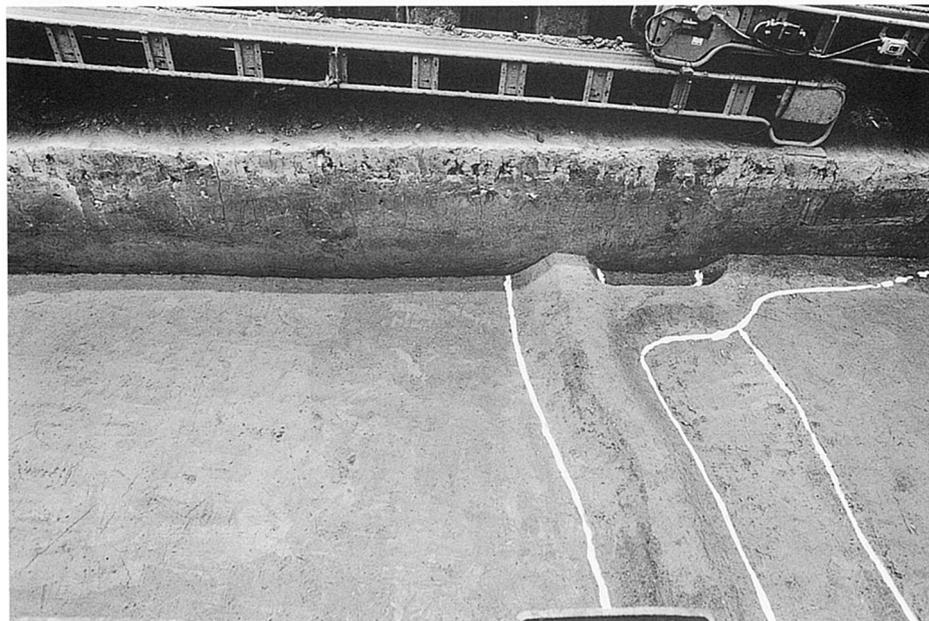
写真図版6 04-1区 遺構



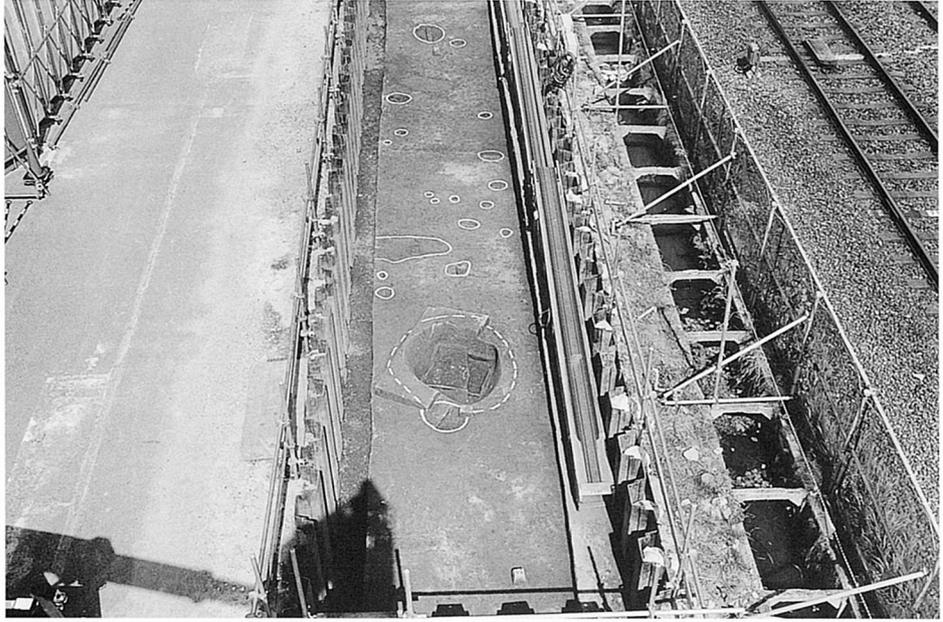
04-1区
第5面 全景 (西から)



04-1区
第5面 近景 (西から)



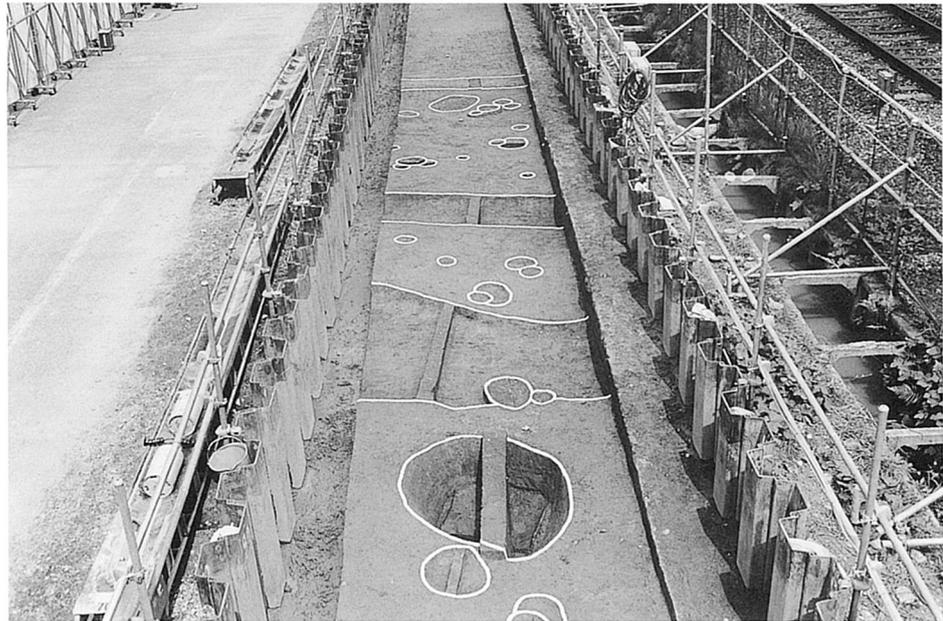
04-1区
第5面 101畦畔
(北から)



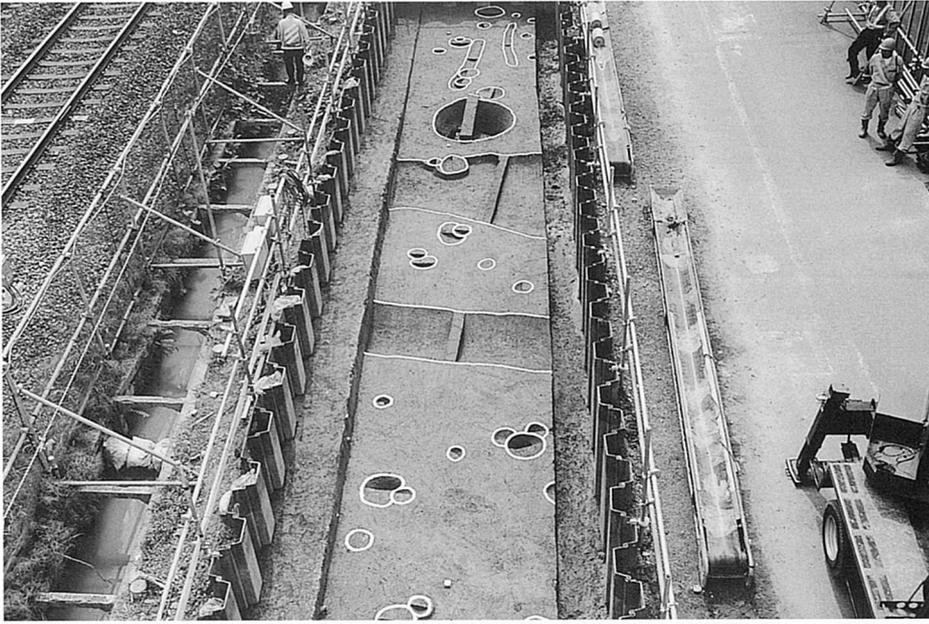
04-1区
第4面 全景 (西から)



04-1区
第4面 全景 (東から)



04-1区
第3面 全景 (西から)



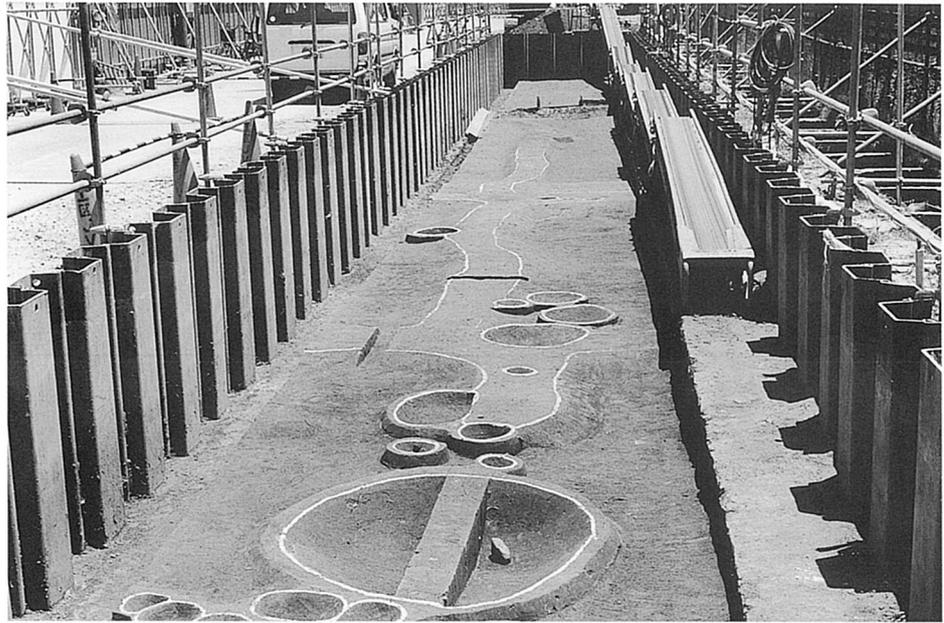
04-1区
第3面 全景 (東から)



04-1区
第3面 柱穴 検出状況
(西から)



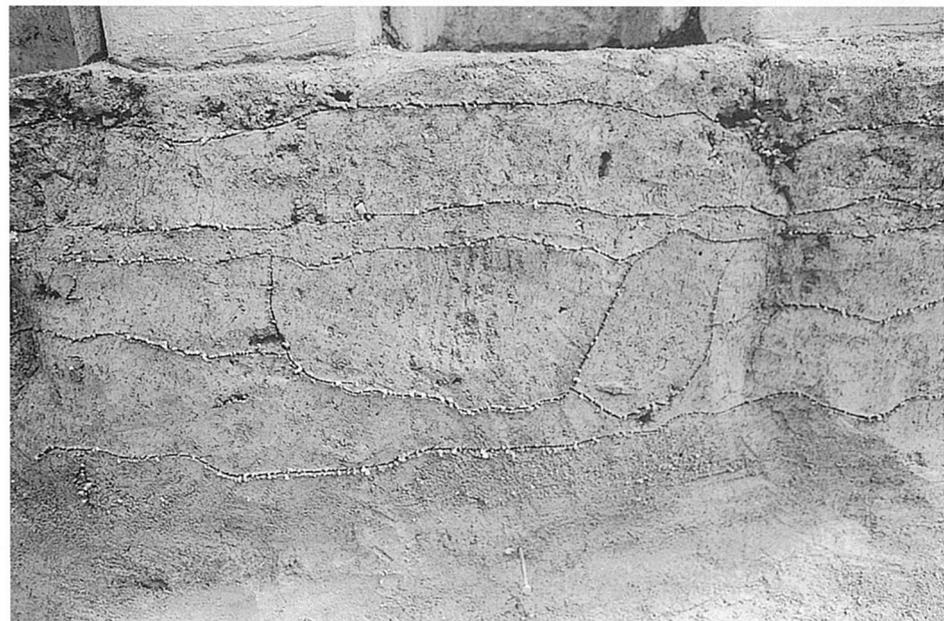
04-1区
69土坑検出状況 (北から)



04-1区
第2面 全景 (西から)



04-1区
第2面 畦 検出状況
(西から)



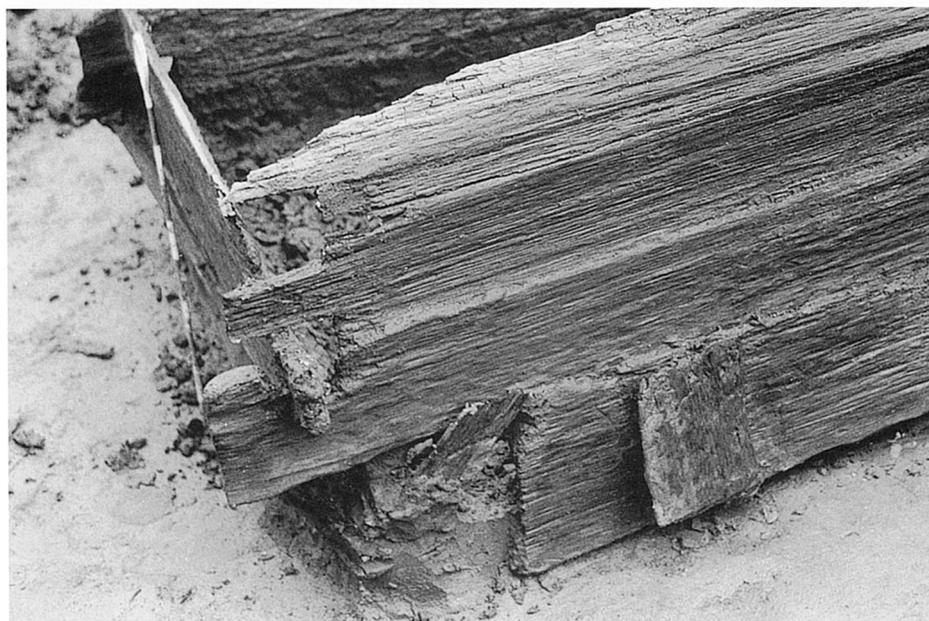
04-1区
南壁断面 第2面 柱穴
(北から)



04-1区
18井戸掘方 検出状況
(南西から)



04-1区
18井戸枳板 検出状況
(南西から)



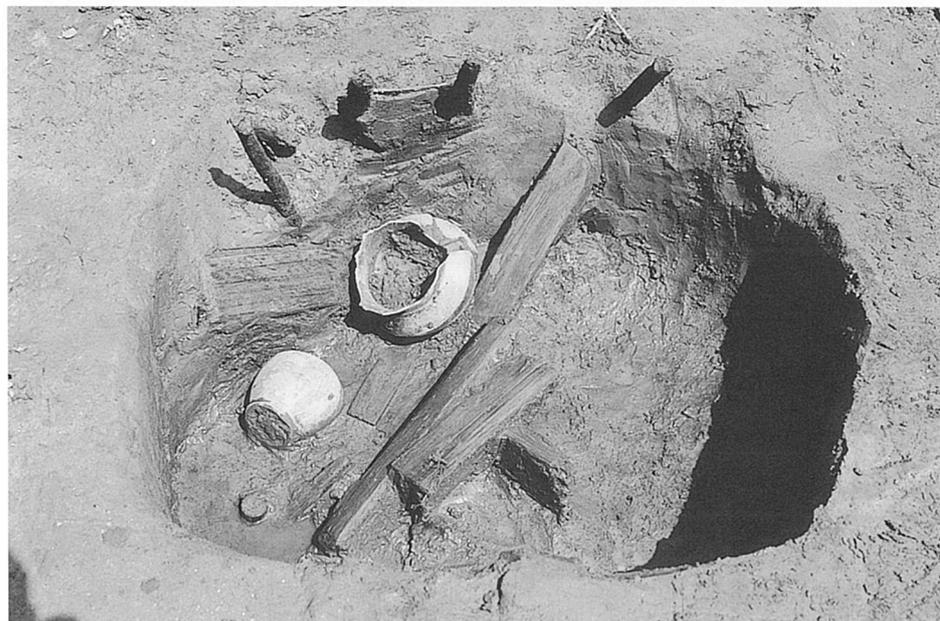
04-1区
18井戸枳板組合せ状況
(北西から)



04-1区
18井戸上層遺物検出状況
(南から)



04-1区
18井戸枠板取り外し後
(南から)



04-1区
18井戸下層遺物検出状況
(西から)



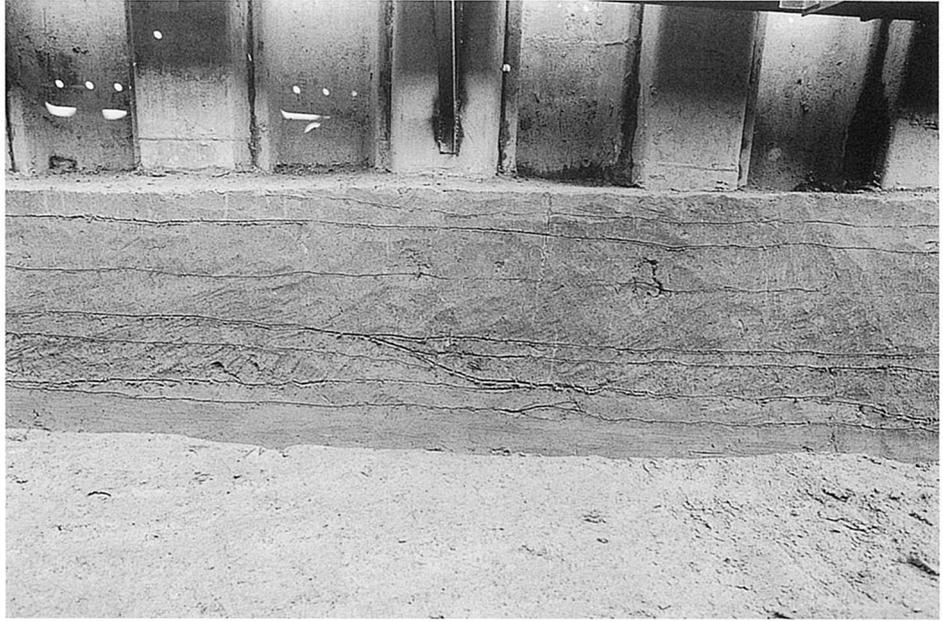
04-1区
97井戸 断面（北西から）



04-1区
97井戸井筒完掘状況
（北西から）



04-1区
97井戸掘方内遺物
検出状況（西から）



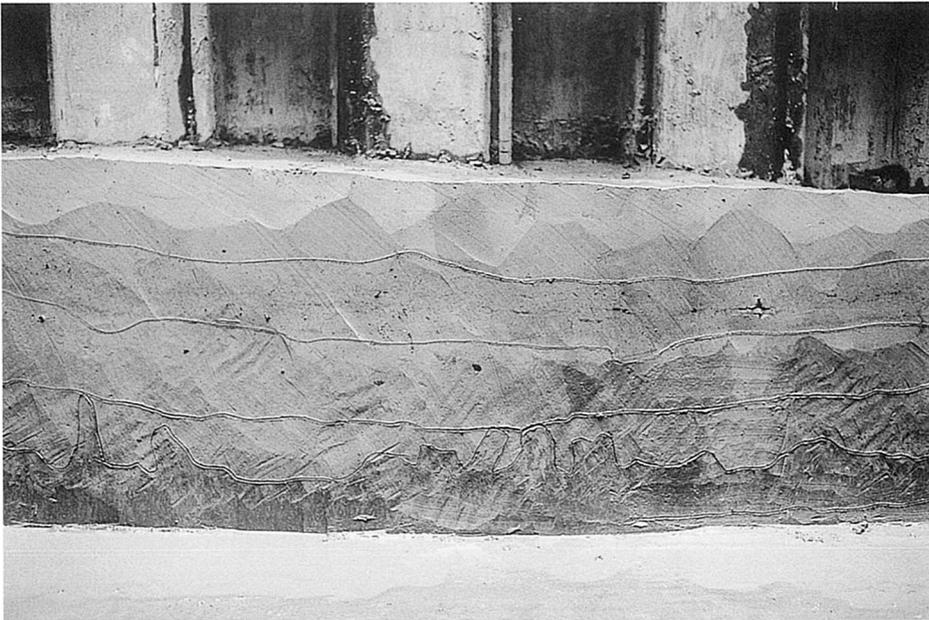
確認03-1-1区
北壁断面



確認03-1-1区
北壁断面



確認03-1-1区
3ピット断面 (北から)



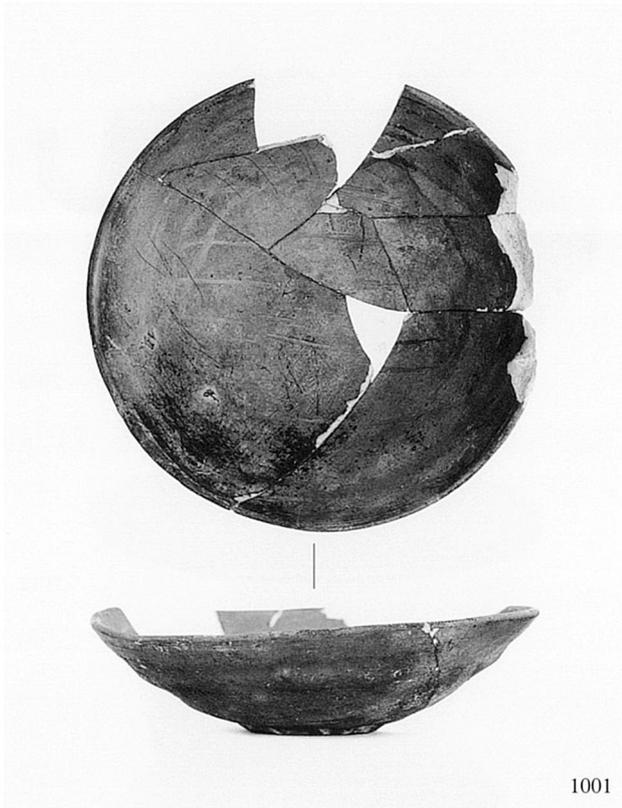
確認03-1-2区
北壁断面



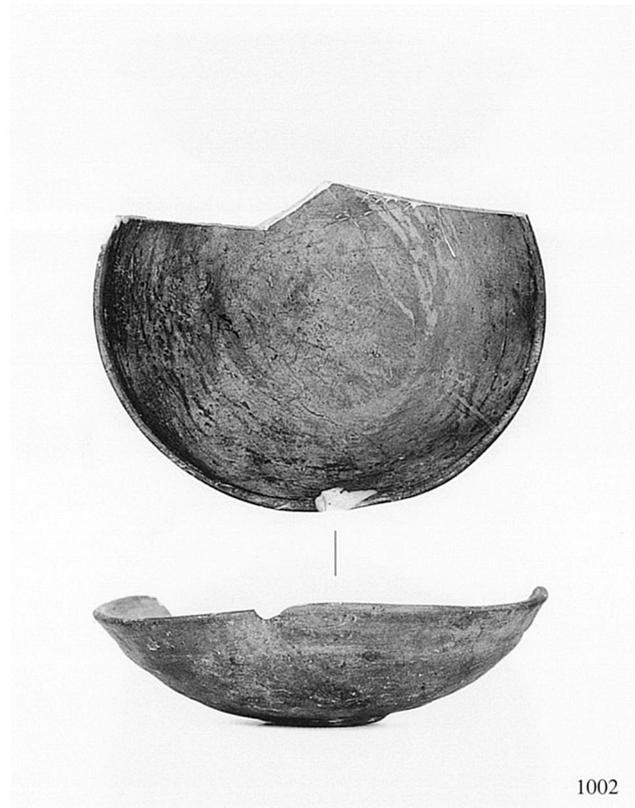
確認03-1-3区
9層上面 検出状況
(東から)



確認03-1-3区
6層上面流路断面
(南東から)

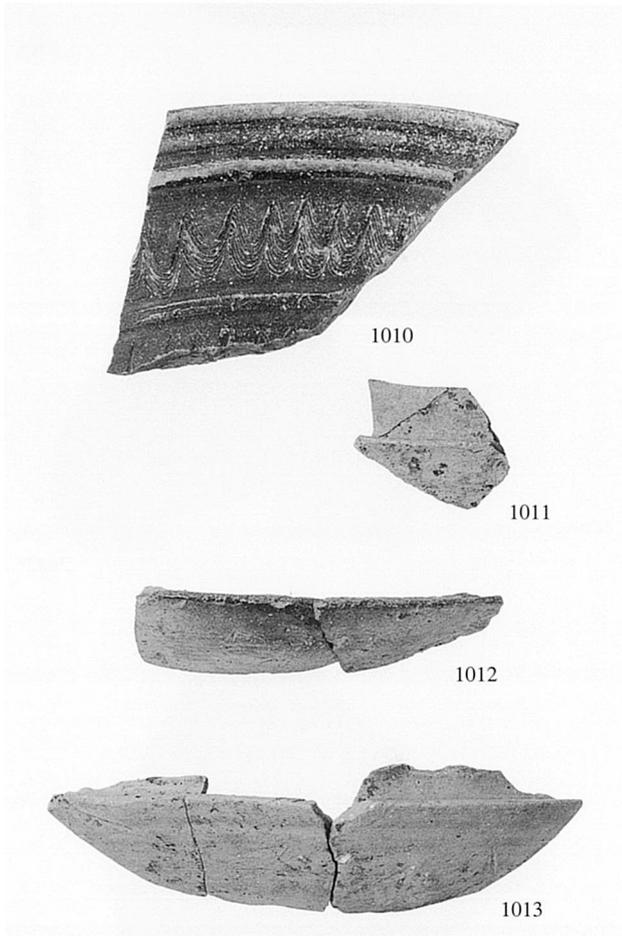


1001

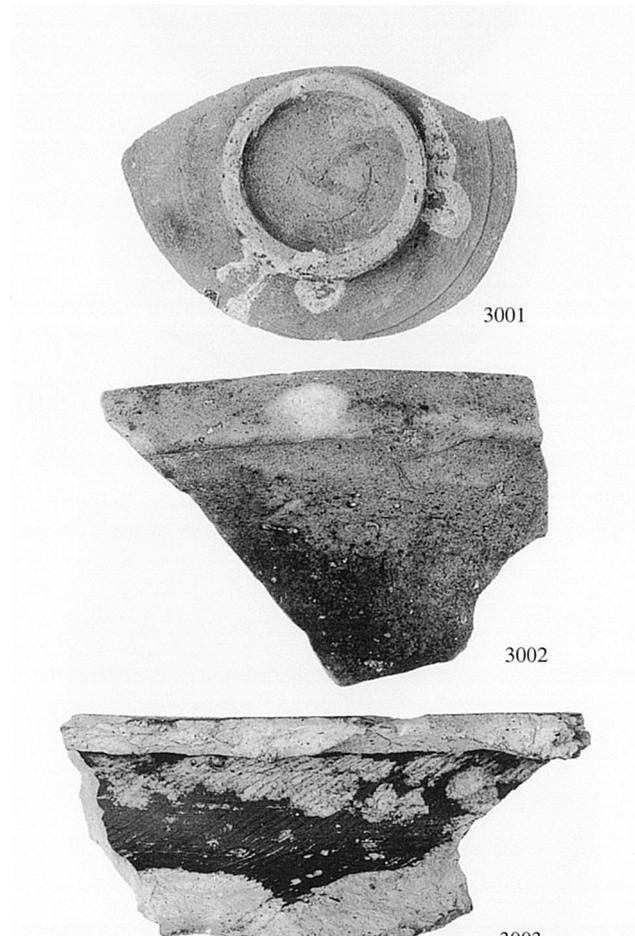


1002

03-1-3区 第4面出土遺物



03-1-2区 出土遺物



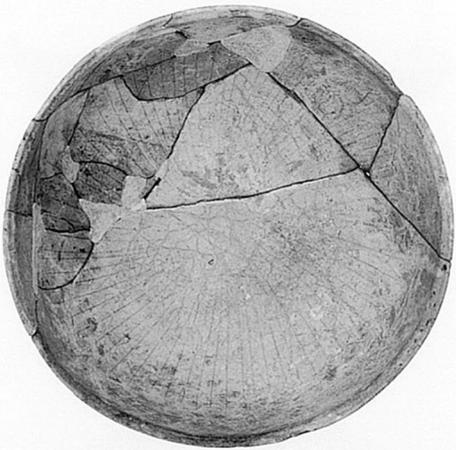
確認03-1-3区 出土遺物



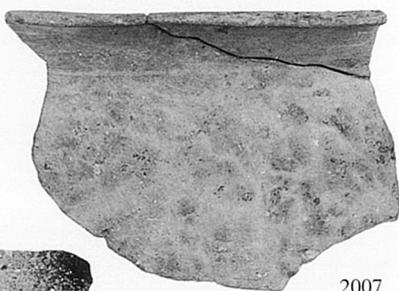
2005



2004



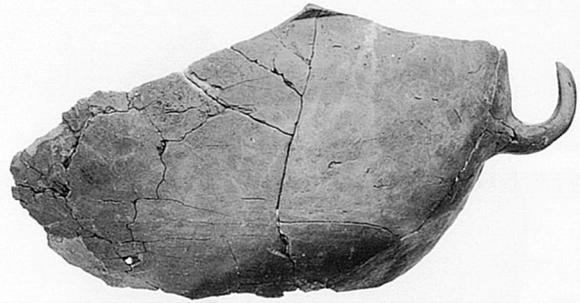
2011



2007



2006



2008



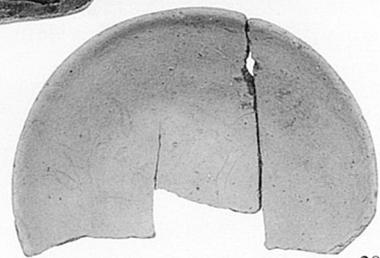
2012



2015



2045



2042



2050



2051



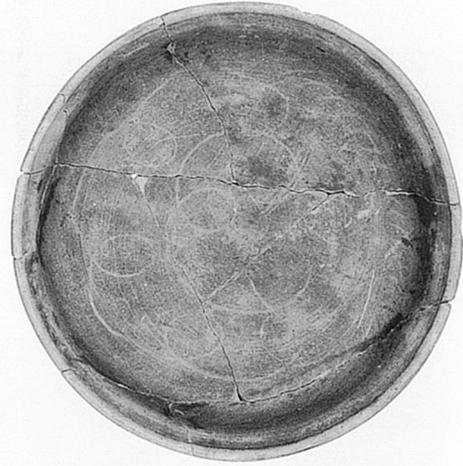
2052



2053



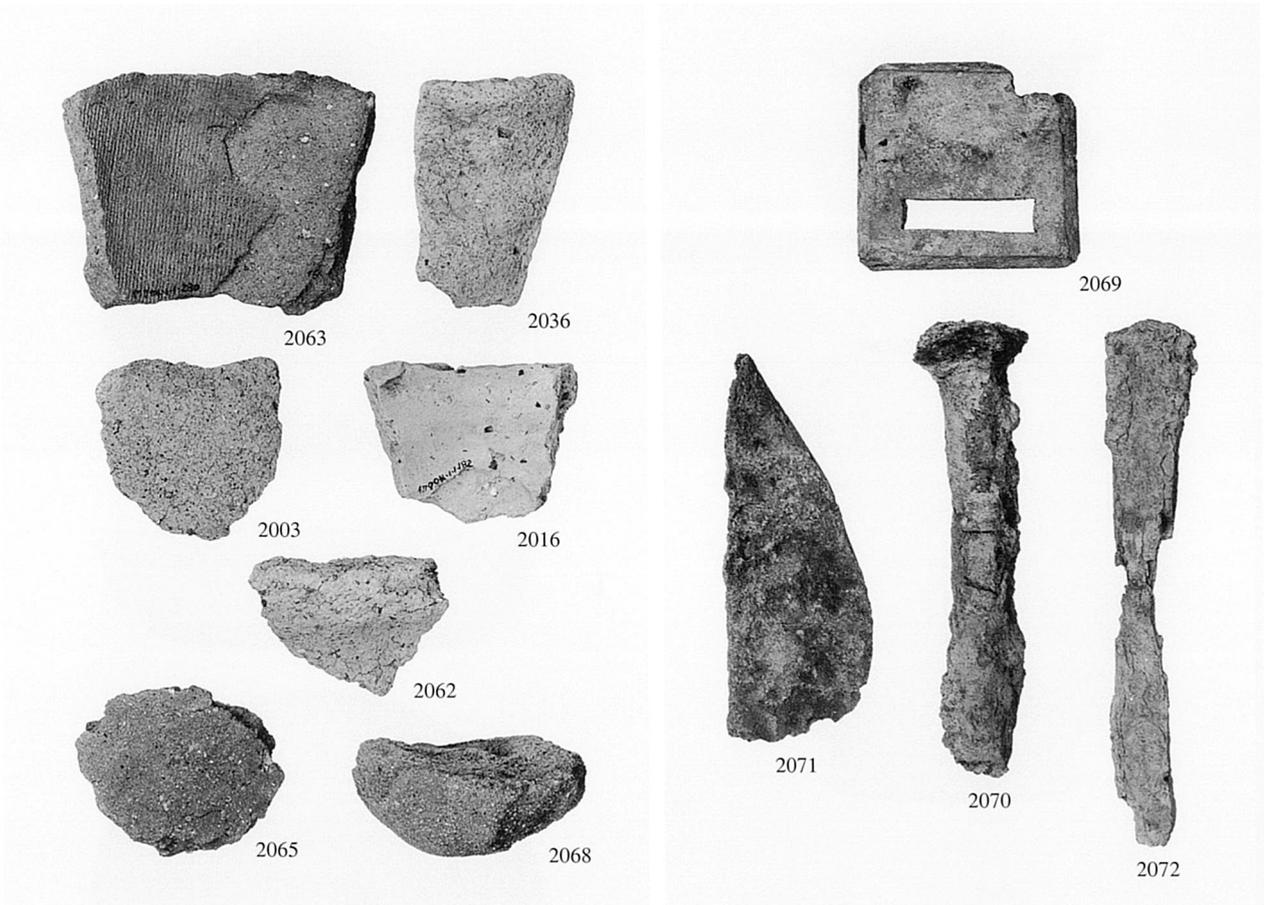
2057



2056

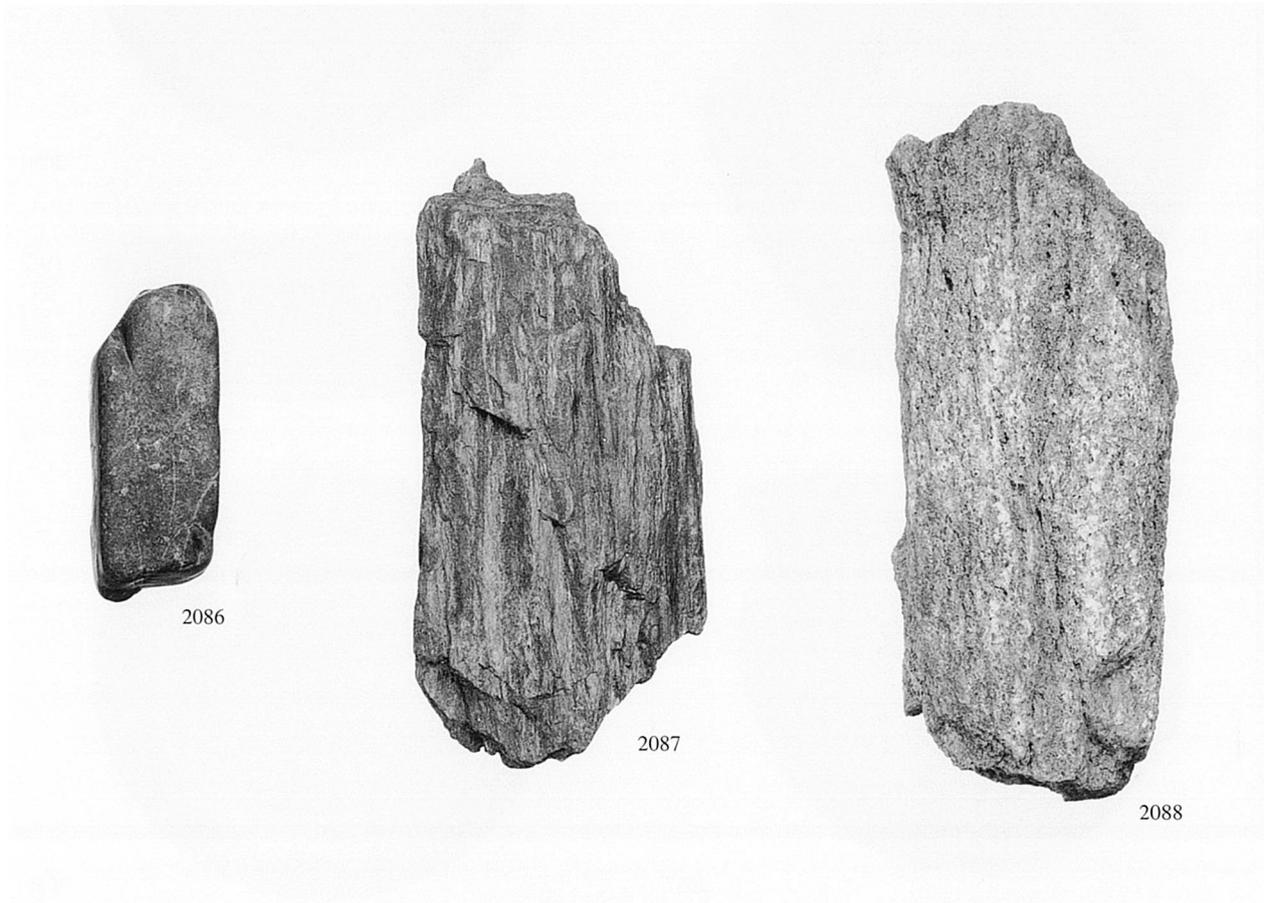


2055

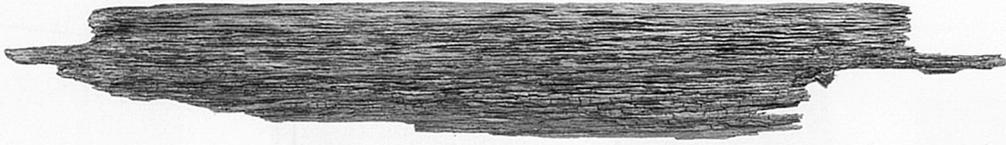


製塩土器

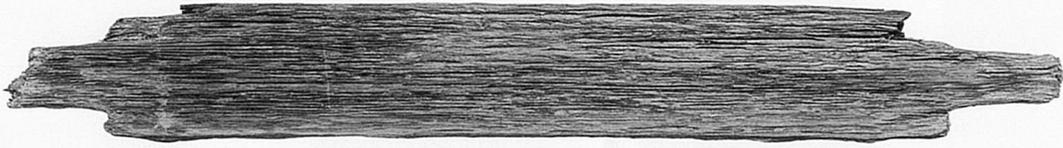
金属製品



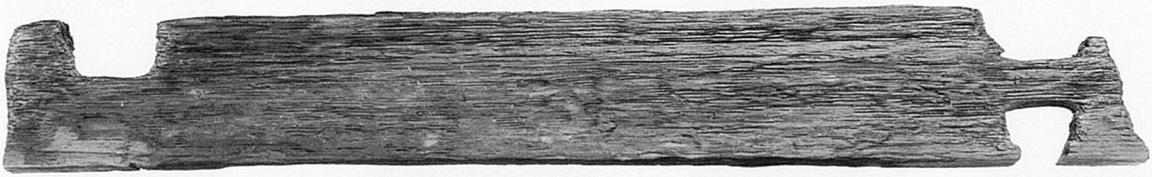
石



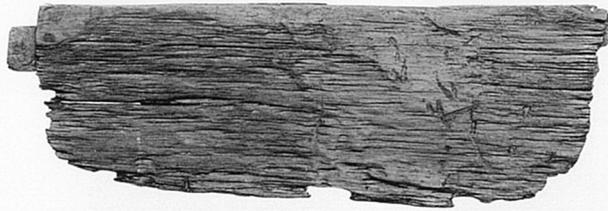
2089



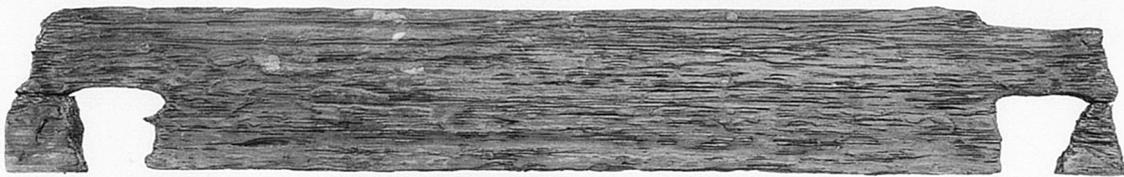
2076



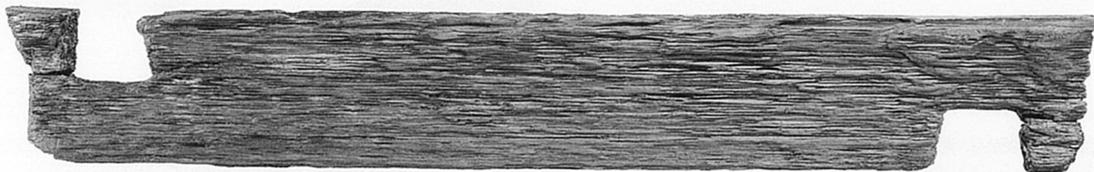
2077



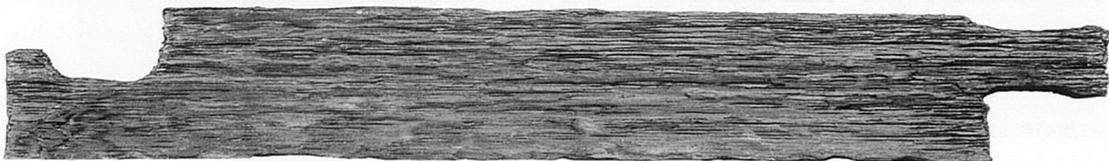
2090



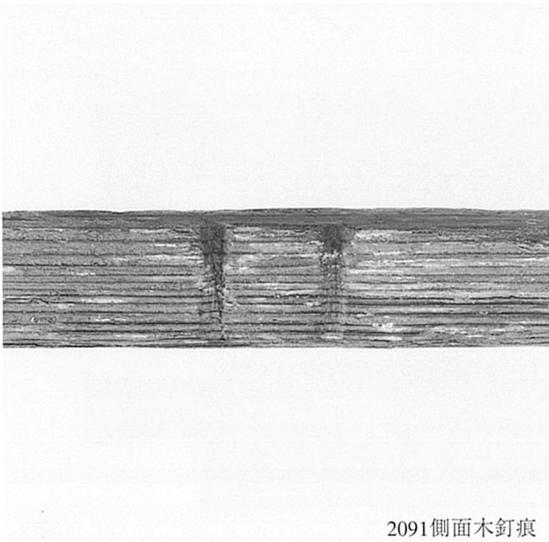
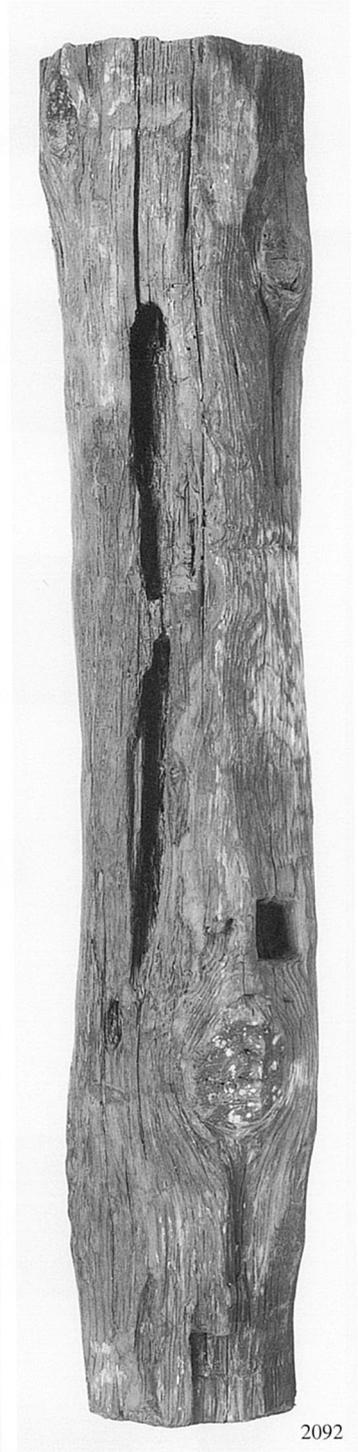
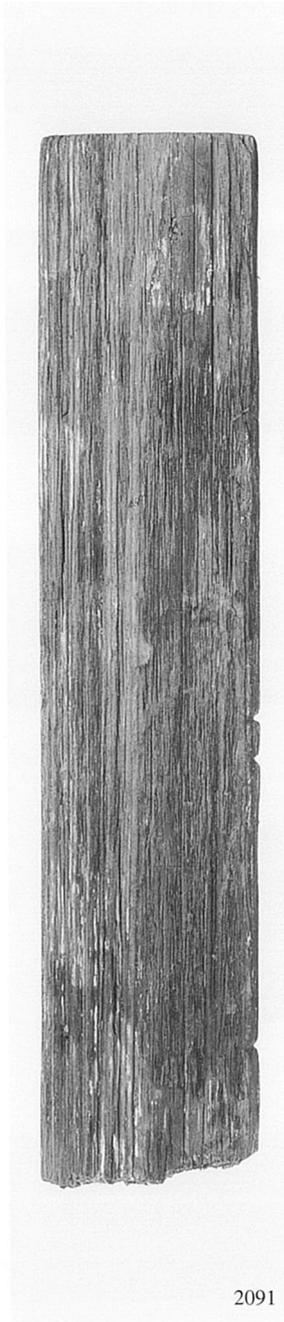
2078



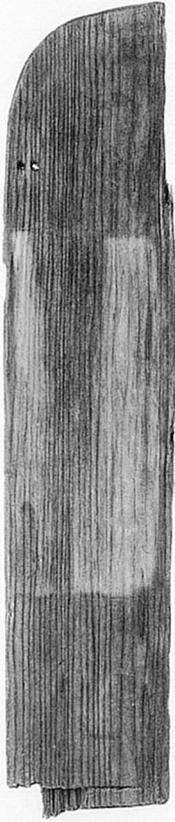
2075



2079



18井戸枠下部出土木製品



2073



2074



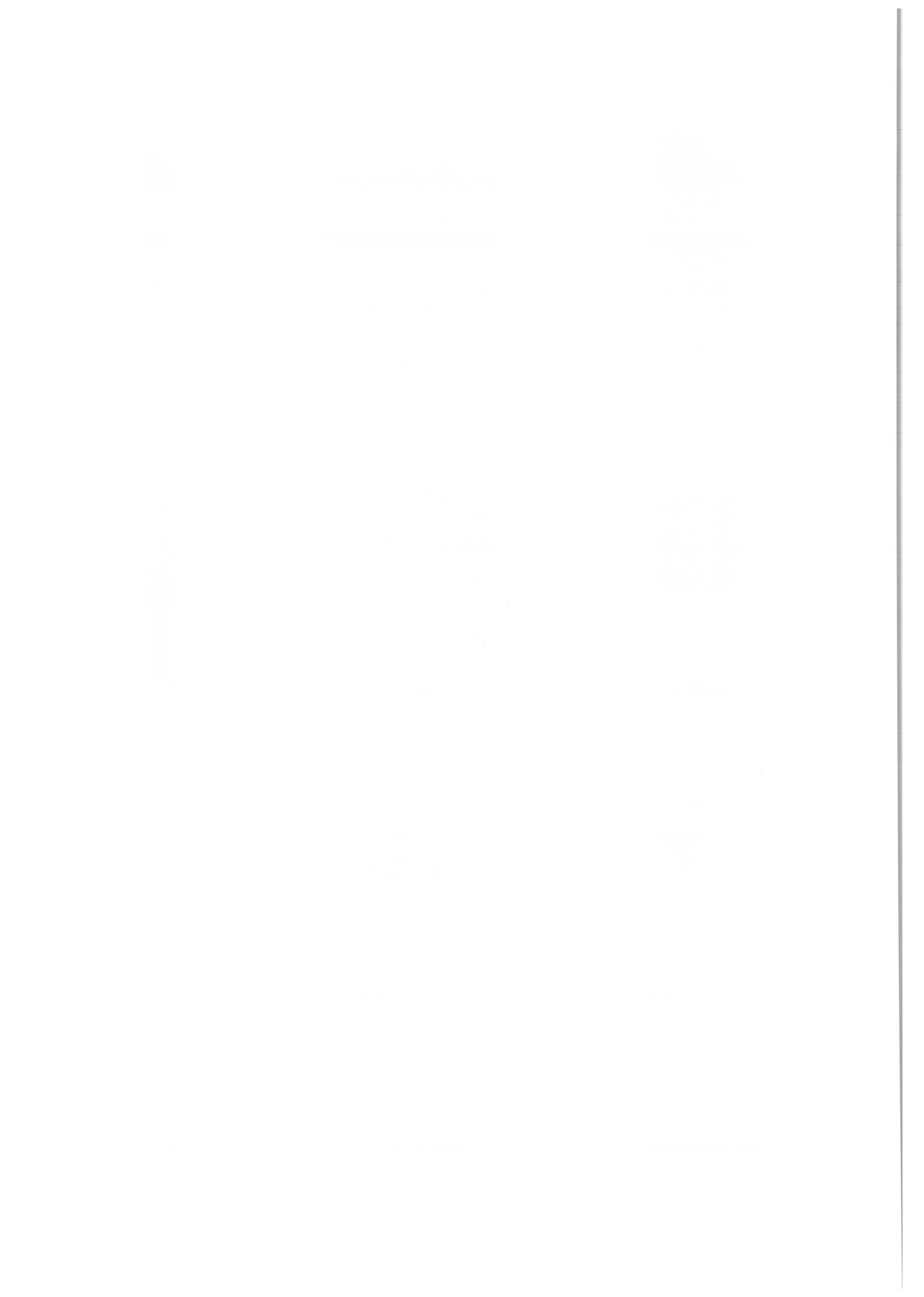
2093



2094



2095



報告書抄録

ふりがな	いわたいせき							
書名	岩田遺跡							
副書名	近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ名	第121集							
編著者名	金光正裕・川瀬貴子							
編集機関	(財)大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁目21番4号							
発行年月日	2004年12月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いわたいせき 岩田遺跡	おおさか府 大阪市 ひがしおおさかし 東大阪市 いわたちょう 岩田町 ちようめ ちない 4丁目地内	27227	115	34° 39' 48"	135° 36' 17"	03-1 2003. 10.01 ～ 2004. 03.31	267㎡ 171㎡	近畿日本鉄道 奈良線連続立体 交差化事業に 伴う
						04-1 2004. 04.01 ～ 2004. 12.28		
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
岩田遺跡	集落・ 生産域	古代		井戸・溝・土坑・ 畦畔		土師器・須恵器・ 黒色土器・製塩土器 ・埴輪・木製品		飛鳥時代から平安 時代の集落および 水田を検出 鎌倉時代以降の 生産域を検出
		中世		畦畔・島島		瓦器・陶磁器・瓦		

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第121集

岩 田 遺 跡

近畿日本鉄道奈良線連続立体交差化事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2004年12月28日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号